

第IV章 国府系石器群の伝播形成過程

第1節 国府石器群と国府系石器群に関する既往研究

国府系石器群の広域展開現象に関するこれまでの研究では、構造変動論的な問題設定がなされてこなかったため、その歴史的意義を十分に見出せずに終わっている。すなわち、国府系石器群（角錐状石器も同様である）について、分布・技術を記述し、その解釈には伝播や集団移動を持ち出して済ませてしまう場合が多い。本章では、そうした表面的・一面的解釈ではない多様な理解が可能であることを示し、第VI章での構造変動論的考察に備える。

国府系石器群は、瀬戸内地方に特有の分布を見せる国府石器群と明らかな系統関係を有すると考えられる石器群である。国府石器群とは、後半期初頭の瀬戸内地方に出現した、世界的にみても特異な横長剥片剥離技術（瀬戸内技法）と、それにもとづく国府型ナイフ形石器製作を特徴とする石器群である。本来瀬戸内の地域環境に適応した人間集団によって成立をみた国府石器群の影響が、何らかの理由で広範囲に及んだことを明瞭に示すものが国府系石器群であり、長らく日本の旧石器考古学の重要な争点のひとつとなってきた。

国府系石器群をめぐる議論の端緒は、1967年に調査された大分県岩戸遺跡や、1968・1970年に調査された山形県越中山K遺跡における、国府石器群を特徴づける瀬戸内技法に技術的に関係する資料、いわゆる「瀬戸内技法関連資料」の出土にある。岩戸遺跡では、大型厚手の剥片を素材とする石核をもとに、石核素材の主要剥離面を取り込んだ横打剥片剥離が行われていることが判明し（第Ⅲ－67図10）、越中山K遺跡では、国府型ナイフ形石器に極めて類似するナイフ形石器や、瀬戸内技法の一部分（いわゆる「第2・第3工程」）を示す接合資料が得られたのである（第Ⅲ－107図16）。以後も、こうした資料は九州地方や東海地方西部、東北地方を中心に増加の一途をたどることとなった。

こうした状況をうけて、各地の国府系石器群について、石器製作技術や石器形態・組成の詳細な比較研究が積み重ねられた。技術要素の有無を主たる判断基準として、国府系石器群の広域展開の背景に、ほぼ例外なく瀬戸内地方からの「国府文化」ないし後続する「文化」の伝播、瀬戸内集団の侵入、あるいは石器製作技術の伝播といった説明がなされている。その過程で地域間変異が生じた背景については、技術比較（綿貫1982、松藤1982・1985、柳田1983・1985、藤野・保坂1983、山口1983、三浦2005等）や使用石材（会田1994a、松藤・森川2001）の比較に基づく指摘がある。

これらの研究には共通した基本モチーフがある。一言でいえば、国府系石器群の〈地域差＝伝播の時期の差異〉あるいは〈地域差＝在地集団との接触による技術変容〉、また最近では〈地域差＝石材による技術変容〉という基本モチーフが、地域や対象をかえながら繰り返されてきたといえる。しかし、石材要因であれ、異文化の接触であれ、これまでのモデルのいずれもが抽象的な文化論（考古学的文化間の関係）の域にとどまっており、文化伝播論の

域を脱していない。また、広域拡散現象は具体的にどのような過程を経て起こったのかについても未だまとまった分析・研究が提示されていない。

このような問題は、国府系石器群の問題に限られない。例えば、日本の旧石器時代研究では、「細石刃文化」や「神子柴文化」の出現のように、地域内部での変化として説明できないと考えられる石器群の変化が、常に類似する資料をもつ外部の地域（周辺大陸）からの「文化伝播」として説明されることで済まされてきた。

そもそも「文化伝播」という概念は、先にも述べた「文化」（要素集合）概念を前提とした用語である。わが国の旧石器考古学では、先史学の確立者である V.G. チャイルドによる定義、すなわち「繰り返し認められる諸型式の組み合わせ」を意味する「文化 culture」と同様の内容を与えた、石器群の組成把握に基づく「石器文化」を基礎としてきた。チャイルドの場合は、石器だけしか認められないような場合には、「文化」culture と区別して、インダストリー industry と呼ぶべきだと述べている（チャイルド 1981）。しかし「石器文化」には「文化 culture」と相同の意味が込められたため、背後に特定の文化を共有する集団をアプリアリに対応させた文化論的単位となっていることに特徴がある。

石器や石器群が、これを残した集団の文化的な指標であるとみる思考法は、個々の石器の形態を、あらかじめ石器製作者が脳裏に描いている青写真たる「範型」が具現化したものとみなす考え（範型論）に拠っている（佐藤 1992）。範型の集合体である石器群は、そうした青写真、すなわち心性を共有する集団の指標と捉えられるため、石器群とは、主として文化的な単位として認識されることになったと考えられる。したがって、「石器文化」と「範型論」に依拠する限り、新しい要素・要素群（石器・石器群・製作技術）の出現といった大きな変化は、「文化」の発展としてよりも、外部的要因を強調して説明されねばならなかったことは当然の帰結と思われる。この思考法は、さらに「文化」段階論と結合して、頻繁な「文化伝播」を背景とした、「文化」交代説に基づく旧石器時代像を形成してきた（安斎 1991a）。なお、「国府文化」（国府石器群・国府系石器群）の広がりについては、「ナイフ形石器文化」伝統内での一時的な現象として理解されていたため、「細石刃文化」等ほどにはドラスティックな変化をもたらしたとは考えられていないようである。

しかし、「国府文化」にせよ「細石刃文化」にせよ、本拠地（と想定される地域）の石器群と全く同じ内容の「文化」をもつ例はなく、いくつかの要素が共通する程度であることが多い。この意味で、「石器文化」論に立脚する限りでさえ、「文化伝播」という用語を用いることは不適當であることが大半といえる（安斎 2002）。さらに、具体的に国府石器群の問題についていえば、山形県越中山 K 遺跡のように、瀬戸内地方から遠く離れた地域で相当に技術的な類似性の高い石器群が存在する一方、南関東地方では、膨大な発掘資料が蓄積されているにもかかわらず、越中山 K 遺跡のような石器群は確認されていない。九州西北部の佐賀県と同東北部の大分県では、前者で国府石器群の様相に近い石器群が比較的多く発見されているのに対し、後者にはそうした石器群が認められない。文化伝播論では、暗黙にある中心地からの波状の伝播プロセスが想定されることが多いが、こうした単純なモデルでは、以上のような地域間変異は到底説明し得ない。

このように、現在、国府系石器群の問題に限らず、「文化」を単位とした「文化伝播」と「文化段階論」では、現実の考古資料に十分な説明を加えることが難しくなっている。

確かに、伝播という現象は物質文化の変化に大きく影響を与えるため、物質文化の変化については一定程度「説明」する概念とはなりうる。したがって、過去の物質文化たる考古資料に直截に「文化」を仮構する石器文化論においては、変化を説明する概念として無理なく採用可能であった。しかし、安斎正人や佐藤宏之の石器群構造研究以後において我々が目標とするのは、物質文化の変化から過去の人間社会の生活を読み解くことにあるのだから、問題とされるべきは、物質文化からその存在が推測される伝播現象が、果たしてどのような社会的イベントを背景に生じたのであり、またそうしたイベントが生じた原因や、それが人間社会の生活に変更を迫った原因は何かということのはずである。ここにおいては、物質文化の変化をもたらしたものが伝播現象であったとしても、伝播が人々の生活を変えたとの言説はそのまま受け入れることはできないのである。

こうした問題が手付かずのまま残されている以上、現状では、国府系石器群について、広域展開の契機、広域展開のプロセス、地域間変異の背景を問題とし、総合的に研究した例はほとんどないといってよい。なにより、国府系石器群の広域展開が、広域的に連動する後期旧石器時代前半期／後半期移行期の構造変動にいかなる影響を与えたか、という視点の欠如は、国府系石器群の研究において致命的であるといわざるを得ない。

唯一、安斎正人が最近発表した研究（安斎 2004）は、国府系石器群の広域展開現象が、周辺地域の地域集団に与えた影響を構造変動論的に論じている。安斎は「国府型ナイフ形石器と角錐状石器は、ともに西南日本のさまざまな社会生態学的な環境との相互作用のなかで機能した石器であって、東北日本の石器群にこれら両石器が包摂された背景には、これらが槍先形尖頭器の出現にとって比類なき重要性を」もつ要素であったという予測をもとに、国府系石器群出現前後の各地の石器群変遷を確認した。その結果、石刃系統の石器群に国府系石器群が貫入したのち、槍先形尖頭器石器群に変化したのは中部高地であると指摘する。これをうけて、それまで各地で採用されてきた「石刃石核リダクションは効率のいいものであったが、集団の居住形態・移動様式は基本的には良質の頁岩産地に規定されていた。良質の頁岩産地から遠くはなれた中部高地の集団は、『国府系石器群』集団との接触を通じて、珪質頁岩製石刃でなく、安山岩（あるいは黒曜石）の剥片からでも大型の着柄型狩猟具（国府型ナイフ形石器・角錐状石器）が製作可能であるとの情報を得たのである。黒曜石での試作の後に、ボリュームのある盤状の安山岩から頁岩製の尖頭形石器やナイフ形石器よりも機能性の高い両面体の大型尖頭器が作り出せること、しかもその製作過程で生じる各種の剥片類が」さまざまな石器にも利用可能であることに気づき、両面体リダクション戦略（モード）が中部高地で、そして後には周辺の地域まで広がっていったのだと考えている。

国府系石器群が両面体モードの発生の契機となったという安斎の説には後に触れるが、安斎の視点は従来のような文化伝播論ではなく、社会生態学的コンテクストを考慮した情報伝播であることを重視したい。

構造変動論的には、石刃生産技術や細石刃生産技術がもはや「文化」や「時代・段階」を

単純に示相する指標となりえず、各種のコンテクストにおいて様々な理由で採用される一般的な石器製作技術であることから、その出現や広がりやを単に伝播や集団移動として済ませてしまうのではなく、今後はそうした技術が石器製作技術構造内に組み込まれた「固有の具体的事情とコンテクスト」を問題視すべきであると説かれている（佐藤 2003a）。国府系石器群の出現を考える場合にも、同じ視点が必要である。もちろん、横打剥片生産技術による刺突具製作は、石刃生産技術や細石刃生産技術のように一般的な石器製作技術ではない。しかし、各地の国府系石器群の出現を、単に「瀬戸内技法」が伝播したためというのでは説明になっていない。このため、瀬戸内地方で特異に発達を遂げた横打剥片生産技術によるナイフ形石器製作が、ある時期各地の石器製作技術構造内に様々な表現形をとりつつ内置された地域固有の具体的事情およびコンテクストを問題とせねばならない。

この視点に基づいて、国府系石器群の広域展開と地域間変異の諸現象を、以下で分析していきたい。なお、従来の研究は急増している資料の詳しい編年的検討を経た結論ではなかった点にも問題がある。本論では第Ⅲ章でこの作業を済ませているので、国府系石器群の広域展開と地域間変異について、より詳しい分析をおこなうことが可能である。

第2節 国府系石器群の荷担者推定

本章では、国府系石器群の広域展開のプロセスと、各地域に与えた影響およびその多様性を究明する。広域展開のプロセスでは、当然ながら、そこに瀬戸内地方で国府系石器群を担った人々が関与していたのかどうか、関与しているならばそう考えられるのはなぜか、という考察をおこなっておかねばならない。文化伝播論パラダイムに則る従来の諸仮説では、この部分の根拠が不問とされてきたからである。そこで、各地の国府系石器群の荷担者が誰であったか、少なくとも瀬戸内出自の人々か在地集団かを区別して解釈する方法を最初に求めておくべきだと考える。この検討を経て、はじめて各地域に与えた影響の多様性を理解するひとつの基礎が整えられるはずである。

まず、国府系石器群を次のように定義しておく。すなわち、主石材がサヌカイト以外の石材からなり、横打剥片製ナイフ形石器が国府型・国府系ナイフ形石器を主とする石器群を国府系石器群としたい。国府系石器群の内容は、決して一様ではないため、遺跡個別に分析を加えていくことが必要である。

国府系石器群の荷担者を推定するには、これまでおこなわれてきたように、石器製作技術分析を手がかりにする。ただし、本論では国府系石器群の瀬戸内技法の図式的手順がどの程度正確に認められるかという、これまで主流をなしてきた判断基準は採用しない。従来は、瀬戸内技法の定義（松藤 1974、1979）に則り、盤状剥片が交互剥離で剥取されているか、山形の打面調整が丁寧に施されているか、打点後退は正確に直線的か等々の細かな技術要素の有無がとりわけ重視された（第Ⅳ－1図）。もちろん、こうした比較に意味がないわけではないし、分析上重要な指摘もある。しかし、二上山北麓遺跡群の表採資料から属性分析に基づいて理念的に復元されたこの図式的手順が、国府型ナイフ形石器製作の「典型的」手法で

あるとは限らないはずである。したがって、この図式との比較に基づいて、系統的近縁性を解釈するという方法には問題がある。そのうえ、この図式との比較を仮に認めたとしても、結局はどの程度の要素が認められれば技術系統的に相同関係にあるといえるのかを判断する根拠が問題となってしまう。従来欠如していたのは、この解釈における理論的根拠（中範囲理論）である。

この根拠を与えてくれるのは、「動作連鎖」（ルロウ＝ゲーラン 1973）という概念である。西秋良宏（西秋 2004）によると、動作連鎖とは所与の行動を構成する機械的な一連の動作のことをいう。プロセス考古学では、こうした動作も、自然に対する人間の適応手段という枠組みから理解しようと試みてきた。しかし動作連鎖の概念は、技術のもつ社会文化的側面に着目するものである。人間諸個人（個体）がおこなうあらゆる動作の体系は、周囲を取り巻く自然環境条件ばかりでなく、実は作り手の属する社会の文化伝統に大きく左右されることが強く認識され始めたことによる。ルロウ＝ゲーランの言葉を借りると、個体の「動作の連鎖は、その生涯の初期を通じて獲得され、模倣による訓練、試行による経験、口頭の伝達という三つの角度からなされる」。こうして獲得された動作連鎖からは「予期せぬ事態が生じる場合以外には」抜け出すことはない。「身ぶり、態度、陳腐と日常性の中での行動のしかたが、出自社会集団との連繋の役割を果たす。個体は異なった階級や別の民族に移されても、完全には元の集団から解放されることはない」（ルロウ＝ゲーラン 前掲書、安斎 2003a）。この見方によれば、比較基準として見出さなければならないのは、「典型例」ではなくて、国府石器群における国府型ナイフ形石器製作に通底する動作連鎖ということになる。

横長剥片製の特異な国府型ナイフ形石器のV層並行期における出現の背景には、もちろん瀬戸内地方固有の石材環境（横長剥片剥離に適した安山岩）が重要であるが、それだけではなく、VI層並行期までに瀬戸内地方の社会集団において歴史的に培われてきた技術伝統、すなわち横長剥片剥離に関わる豊富な動作連鎖の存在が深く関与していた。国府型ナイフ形石器の製作にかかわる動作連鎖は、AT直後ごろに瀬戸内地方固有の環境条件、地域集団の歴史と技術伝統のもとで当該地域の社会集団に身体化された技術とみなせる（第Ⅲ章）。

先のルロウ＝ゲーランの言葉にもあるように、動作連鎖、すなわち身体化された技術的知識（ノウハウ）というものは、言葉（知識）のみで伝達・獲得することは難しいとされる（西秋 1998）。それは自転車に乗る技術を本で読み、理解しても、実践できるとは限らないのと同じである。その反面、ノウハウは一度身につければ長期にわたって持続するといわれる。したがって、国府型ナイフ形石器製作にかかわる固有の動作連鎖が、瀬戸内地方とは異なる歴史的経路をたどってきた他地域に認められるのであれば、そこには瀬戸内出自の人間が関与していたと解釈することが可能と考えられる。

ここで参考となるのは、大阪府翠鳥園遺跡の国府石器群の豊富な接合資料をもとに、国府型ナイフ形石器の製作にかかわる動作連鎖分析をおこなった高橋章司（2001）の研究である。高橋によると、国府石器群の国府型ナイフ形石器製作に関わるあらゆる動作連鎖に共通して認められる石器製作の構造的特質とは、「板状の材を用い、一面からなる大平坦面と、それ

に対し鈍角に開く横長面がある場所で、かつ、大平坦面の反対側に、山形をなす二つの斜面をもつところを選んで、大平坦面と横長面とが接する部分を帯状に取り込みながら、横長面の全体を平行に後退させて、目的剥片をとってゆくこと」(第Ⅳ-2図)であるという。そして、もちろんその目的剥片(翼状剥片)が大型刺突具である国府型ナイフ形石器製作と結びついていることも重要である。国府石器群における現実の国府型ナイフ形石器製作は、基本的にこの原則を満たしつつ実践されている。二上山北麓遺跡群で設定された図式は、あくまでこの原則にのっとり実際に石器製作をおこなう場合の、ひとつのありうる方式にすぎないことが指摘されたわけである。したがって、国府系石器群の荷担者に近畿・瀬戸内地方で国府石器群を担った人々が関与しているかどうかは、翠鳥園遺跡において、個性を超えて遺跡形成集団に共有されていた原石消費(動作連鎖)の原則(構造)を手がかりにしてこそみえてくるはずである(森先 2007c・2008a・b・c)。

このように、技術比較に際しては、「瀬戸内技法」の要素集合とみなし、技術要素の理念的集合体である瀬戸内技法と照らし合わせて異同を検討するのではなく、石器製作技術を構成する動作連鎖を構造の布置として捉え、そうした構造布置を、瀬戸内概念の構造的性で理解しうるかどうかを問題とするべきである。

とはいえ、この基準だけでも不十分である。以上の原則を満たしていても、所与の国府系石器群において、国府石器群荷担者の動作連鎖では決しておこなわれないような技術の適用が認められたり、あるいは盤状剥片の選定(サイズや形状)やナイフ形石器自体の形態的特徴に国府石器群とは大きく異なる部分が見受けられたりする場合には、瀬戸内地方出自の人間が関与しているかどうかの判断を慎重におこなうべきである。また、国府石器群において、多くの場合この翼状剥片剥離は高い連続性を持っていることも重要視する。これらの諸点に注意して、国府系石器群の荷担者推定をおこないたい。

なお、以下では国府型ナイフ形石器と国府系ナイフ形石器を区別して用いるので、その分類基準を説明しておく。国府系石器群を特徴付けるのはもちろんナイフ形石器であるが、加工部位や平面形状が国府石器群の国府型ナイフ形石器と類似しながらも、薄手・長狭型の国府型とは異なって、明らかに幅広・厚型のものがあり、本論ではこれを国府系ナイフ形石器と呼ぶ。東北地方・関東地方・九州地方の例を挙げて説明する。

まず、東北地方の例である(第Ⅳ-3図)。国府型ナイフ形石器製作に適するといわれる安山岩を用いていても、(A)新潟県御淵上遺跡の国府系石器群にみられる相対的に薄手/長狭型のものと、(B)同坂ノ沢C遺跡の厚手/幅広のものでは形態的特徴に大きな差異がある。逆に、頁岩製のものでも、(A)山形県越中山遺跡K地点のような、やや厚手ではあるが、長狭型の例と、(B)新潟県樽口遺跡A-KSE文化層のような厚手/幅広例とが認められる。石材種に関係しないこうした現象は、旧来いわれるような石材の変化による技術変容だけでは説明できない。

このうち越中山遺跡K地点・御淵上遺跡の例(A)が、瀬戸内東部の国府石器群における国府型ナイフ形石器に最も近い。頁岩製(越中山遺跡K地点例)において刃角が大きくなるという指摘は確かに適切であるが(吉井 2000)、それでも石材を超えて認められる二つのタ

イプがあることは認めるべきである。本論では、一つの分類法として、相対的に薄手長狭型の (A) タイプを国府型、そうではない (B) タイプを国府系と分類したい。

同様のことは関東地方の国府系石器群についても指摘可能である。埼玉県殿山遺跡では、玉髓製の国府型ナイフ形石器（第Ⅲ－36 図 31～33）がまとまって検出されたことで周知の遺跡である。この例でも、精美な国府型ナイフ形石器は必ずしも安山岩を素材としていない。他方、例えば殿山遺跡と同時期の代官山遺跡では、確かに横打剥片を素材とし、素材打面側一側縁を鋸歯縁加工で整形したナイフ形石器（第Ⅲ－36 図 20）であるが、短すかつ厚手・幅広で、殿山遺跡例と同じ国府型と呼ぶには問題がある。九州地方でも同様で、例えば佐賀県船塚遺跡Ⅶ層出土の国府型ナイフ形石器（第Ⅲ－66 図 5）と、宮崎県西輪久道遺跡 B 区上層（第Ⅲ－64 図 5）の例を比較してみると、その差は歴然である。これらの石器を一括して呼称するには問題があり、かつまた石材による技術変容という旧来の仮説の反証ともなるので、本論では両者間に区別を設けておく。

第 3 節 国府系石器群からみた人と情報の動き

さて、古本州島における国府系石器群の分布を示したものが、第Ⅳ－4 図である（参考のために国府石器群の分布も示してある）。全体的傾向を概観しておくと、関東地方以西の古本州島西南部に分布が密であることは明らかなが、東海地方に極めて少ないことが注目される。これとは対照的に、遺跡数のわりに新潟県～北陸地方に分布が多いが、奥羽山脈東西の東北地方にはほとんど分布が知られていない。さらに、四国地方太平洋側と九州地方西南部（鹿児島県）には分布が薄く、概して太平洋側における分布の乏しさが目立つ結果となっている。後述するように、この傾向は角錐状石器と異なっていて、角錐状石器は太平洋側にも広く分布し、多量に製作される中心的器種のひとつとなっている（第Ⅴ章）。

遺跡分布数だけでは広域展開の詳細を明らかにできないので、以下で地域ごとに国府系石器群を取り上げて分析し、その負担者の推定をおこなっていく。

1. 九州地方の国府系石器群

九州地方西北部の安山岩原産地付近における分布の集中がみられる。この地域には国府型ナイフ形石器や大型の国府系ナイフ形石器が多く発見されている。西北部のなかでも東側では安山岩製のものが多いが、同西側には黒曜石製のものも散見される。このほか、大分県大野川流域や、宮崎平野において国府系石器群の分布が多数認められる。以下で重要遺跡の資料を分析していきたい。

西北部で重要な遺跡は佐賀県船塚遺跡（第Ⅲ－66 図）である。背振山脈南麓に位置する船塚遺跡の国府系石器群は、瀬戸内地方と同様の国府型ナイフ形石器と、翼状剥片や同石核からなる。接合資料こそ得られていないが、石核（同 16・17）の観察では、微細な打面調整によって概ね左右対称形状の作業面が準備され、比較的厚みの均質な翼状剥片が石核幅いっぱいには剥離されているようである。打面調整の省略される場合もあるが、それは調整がな

くとも好適な作業面形状が確保されている場合であるらしい。石核や翼状剥片の量から見てナイフ形石器製作が比較的活発であったらしく、ナイフ形石器には折損したものが多く一見不整形なものが多い印象を受ける。しかし少数残されている完成品は国府型と呼んで差し支えない。最も瀬戸内の国府石器群に近い石器群である。同じ特徴を持つ国府型ナイフ形石器は筑後平野で多数表採されている（松藤 1982）。

岡本安山岩原産地（長岡 2004）近傍に位置する佐賀県東分遺跡（山下・富永 1984）では多数の国府型ナイフ形石器や翼状剥片・同石核が採集されている（第Ⅳ－5 図）。採集範囲は比較的狭く、石器群の内容から見てもある程度の一括性を有するとみなしておくと、技術的特徴は船塚遺跡で指摘したそれに近いことが指摘できる。このほか、類似の石器群に同じく佐賀県の馬川谷口遺跡がある。国府型ナイフ形石器が出土しているものの、その素材生産過程は不明である。阿部敬によると船塚遺跡のような剥離技術は認められないという（阿部 2007）。

より瀬戸内に近い九州地方東北部（大分県）には、西北部のような安山岩を用いた国府系石器群は確認されていない。ただし、ナイフ形石器のみの単独資料・表採資料としては大分県岩戸遺跡・宮本原遺跡・津留遺跡でサヌカイト類似石材による国府型ナイフ形石器（第Ⅳ－5 図）が散発的に確認されている（綿貫 1982）。

九州地方東北部では、岩戸遺跡（芹沢編 1978）の石器群が重要である。ここは国府系石器群の発見の端緒となった遺跡のひとつである。ここでは、翼状剥片の連続剥離を示す接合資料が認められる（第Ⅲ－67 図 10）。「スレート」製の大型剥片を石核素材とし、素材打面側ではなく側縁側から打面調整を施さずに二枚の翼状剥片を剥取した後、作業面側から石核背面側に向けて厚手でバルブの発達した厚型剥片を一枚剥離して作業面の形状を整え、さらに一枚の翼状剥片を剥離して作業が終了している。得られた翼状剥片はいずれも極めて厚型であるため、石核容量を大幅に減ずることとなってしまう、翼状剥片の連続剥取性は低い。また、重要なことに、打面調整技術と剥片剥離技術の打撃技法に区別がなく、いずれもバルブの発達した厚型大ぶりの剥片剥離であるため、打面調整が極めて粗雑で作業面の形状がうまく整えられておらず、対称性にもかなり欠けるので、結果として石核幅いっぱいには剥取できない、あるいは剥取できても剥片の厚みが極めて不均質になってしまうという事態が生じている。打撃技法に区別がないという点は、西北部の国府系石器群と異なる重要な特徴である。この接合資料以外の石核の観察でも、打面調整技術と剥片剥離技術の打撃技法に区別はみられない。さらに重要なことに、本遺跡の主要器種は角錐状石器であり、翼状剥片はナイフ形石器の素材となっていない。別地点にあたる岩戸遺跡三次調査地のように国府型ナイフ形石器がごく少数認められる例もあるが極めて稀である。剥離技術と石器製作までの動作連鎖が、国府石器群のそれとは大きく異なっている。

九州地方東南部の宮崎県には、多数の国府系石器群が存在する。赤木遺跡第 1 次調査地、滑川第 2・第 3 遺跡、野首第 2 遺跡、東畦原第 1 遺跡四次調査地Ⅳ期石器群等では国府系ナイフ形石器と少数の接合資料が得られている。しかし、この地域でとりわけ良好な接合資料が得られているのは、県中央部の川南町に所在する中ノ迫第 1 遺跡二次調査地Ⅱ期石器群で

ある。上記諸遺跡の国府系石器群の技術的特徴は、ほぼこの遺跡の資料が完備している。

中ノ迫第1遺跡二次調査地Ⅱ期石器群では、流紋岩とホルンフェルスを用いた翼状剥片生産にかかわる接合資料が多数ある（第Ⅳ－6図）。接合資料9（流紋岩）では、大型の横長盤状剥片を石核素材とし、打面調整を施しつつ翼状剥片剥取をおこなったものである。打面調整は大ぶりの厚手剥片剥離によって粗くおこなわれ、作業面形状が山形かつ対称形に仕上げられていないため、少なくとも残核を見る限り翼状剥片を石核幅いっぱいに剥離することができていない。側面観でみると、ほとんど交互剥離に近い。これは岩戸遺跡で見た接合資料の技術的特徴に近い。同じ特徴は接合資料25（流紋岩）にもみてとれる。幅いっぱいの剥片剥離が成功しないことには、おそらく加撃部位の選択と加撃の力が、目的とするサイズの剥片剥取とうまく対応が取れていないことが考えられる。このことは、しばしば石核作業面を挟むように剥片が剥離されたために、作業が終了している例が見られることからわかる。

接合資料11（流紋岩）は良好な2枚の翼状剥片が剥離されたらしく、いずれもナイフ形石器に加工されている。3枚目の剥離で石核底面を大きく取り込むウトル・パセ状の剥片剥離となったため、作業が終了している。この接合資料についても、作業面形状は山形を呈するものの、打面調整は非常に簡素である。ただし、石核素材となった盤状剥片自体小型で、また盤状剥片本来の形状をうまく利用したため、幅いっぱいの連続剥離が成功したものと思われる。

接合資料11のような例は少ない。例えば、接合資料22（流紋岩）も小型の盤状剥片から比較的形の整った翼状剥片が複数剥離された例であるが、打面調整が粗いため凹凸の激しい鋸歯状の打面となっている。こうした打面調整の粗雑さは、加撃点の安定性を低下させると思われ、このことが剥片の厚みや左右対称性の確保を難しくさせていることが考えられる。

概して流紋岩では、石核が大型の場合、幅いっぱいの翼状剥片が剥離されることは少なく、石核が小型の場合に幅いっぱいの剥離が成功している。つまり、打面調整等の措置をとっていても、それが技術的に不十分であり、かつ加撃方法に上述の問題があるため、結局得られる剥片のサイズに大きな違いが生じていない。なお、石核が小型でも、剥離がうまく進行しているのは、幅のわりに石核の厚みが大きい場合であるらしい。これは打撃の力を横方向に伸ばすために重要な打面調整がうまく施されていないためであろう。この結果、翼状剥片も、幅に比して長さ（打撃軸長）の大きいものが多い。

ホルンフェルスの接合資料でも、技術的特徴は同じである。相対的に大型の剥片が取られている傾向があるのは、石材の性質のためと思われる。ただし、国府系ナイフ形石器の素材としてはまったく用いられていない。

以上の分析から見て、技術的には岩戸遺跡とほとんど同じである。異なるのは、この遺跡では流紋岩製の翼状剥片をナイフ形石器の素材として用いている点である。とはいえ、翼状剥片自体のサイズがかなり小さく、かつ厚手であるため、ナイフ形石器もほとんどが4cm未満の国府系ナイフ形石器と呼ぶべきものからなり、中厚長狭型の国府型ナイフ形石器を中心とする国府石器群とは大きく異なっている。仮に、中ノ迫遺跡を残した人々が国府型ナ

イフ形石器やその製作技術を熟知していたとしても、同じものを製作しようとしていたとは到底考えられない。

残る九州地方西南部には、ほとんど国府系石器群が分布しない。前山遺跡第Ⅱ文化層において、頁岩製の横長剥片2枚の接合資料が報告されている(第Ⅳ-6図)。報告書では瀬戸内技法によるとされているが、こうした資料からそこまでの判断はできない。第Ⅲ文化層では小型幅広の国府系ナイフ形石器が出土している。城ヶ尾遺跡ではチャート製の国府系(国府型と呼んでもよい)ナイフ形石器が単独で出土している。探索の努力にもかかわらず(桑波田 2004a・b)、この地域では、国府系ナイフ形石器はごく少数出土しているというのが現状であり、東南部宮崎県とは大きな違いをみせる。

以上、九州地方においては、従来の想定とは異なり(吉留 1994、桑波田 2004a、松本 2008)、船塚遺跡や東分遺跡の位置する西北部に瀬戸内からの人の移動があった可能性が高い(森先 2008b)。その時期はⅤ層上部並行期である。馬川谷口では国府型ナイフ形石器が見られるが、別の技術によって製作されているらしく、在地の人々が瀬戸内出自集団から情報を受け取って製作したものであろう。これ以外の地域(東北部・東南部)においては、瀬戸内出自の人間の直接的関与・移動はなかったと考えられる。したがって、東北部・東南部の国府系石器群は、西北部からの二次的伝播、おそらく社会間を通じて起こる情報伝播を通じて形成されたものと考えられる(森先 前掲)。二次的伝播といっても、中ノ迫遺跡のように横長剥片・翼状剥片剥離から国府系ナイフ形石器製作までが認められる石器群は、編年的検討の結果によると、Ⅴ層上部並行期に相当し、人の移動があった時期とは編年上の時期差はほとんどない。

2. 四国地方・中国地方・山陰地方の国府系石器群

瀬戸内地方を挟んで北側と南側に位置するこれらの地域には、国府系石器群の分布が非常に乏しい。山陰地方では鳥取県・島根県において国府型・国府系ナイフ形石器の単独出土が数例知られているにとどまる(第Ⅳ-7図)。隠岐産の黒曜石を使うものがほとんどである。

岡山県の蒜山原には笹畝遺跡第2地点の国府系ナイフ形石器と角錐状石器がある。岡山県恩原2遺跡Ⅴ文化層でも、安山岩を多用した1,365点の石器群に国府型ナイフ形石器(凝灰岩・黒曜石製)が含まれている(第Ⅲ-83図21・22)。しかしこの遺跡では盤状剥片の縁辺に沿って打点を並列移動しながら剥離する横長剥片剥離技術が中心であり(同34~37)、石核幅いっぱい翼状剥片を剥離する過程はみられない。大半の横長剥片製ナイフ形石器は、大型品から小型品まで、大きさに比して薄手の横長剥片を用いて背部一側縁を中心に加工を加えた幅広木葉形のものである(同1~20)。安山岩製の国府型ナイフ形石器はおそらくこういう過程をへて製作されたもので、国府石器群との直接的関係を示すものではない可能性が高い。横長剥片剥離を中心とする石器群ではあるが、以上の点で、国府石器群とは全く異なる。本石器群の時期がⅣ層下部あるいはそれ以降となることからみても(第Ⅲ章)、この石器群の形成自体に瀬戸内出自集団の直接関与を想定する必要はない。ただし、石材の異なる2点の、比較的精美な国府型ナイフ形石器の由来は問題が残る。瀬戸内方面の石材で作ら

れたものでもなく、黒曜石のものは隠岐産であるので、山陰地方に散在する黒曜石製国府型ナイフ形石器との関係が窺えるが、山陰地方で国府石器群が発達した形跡もない。その由来を推測する手がかりをもたない。

なお、恩原1遺跡のオドリ火山灰層上部暗色帯からは、翼状剥片石核1点が出土している。

さて一方、四国西南部の愛媛県和口遺跡（木村 2003）では、採集資料ながらきわめて重要な石器群が回収されている。遺跡は豊後水道に面した御荘湾の背後に形成された低丘陵上にあり、遺物分布はその特定の小範囲に限られるという。採集された石器は1000点を数え、小範囲におさまる一遺跡における一個人の採集資料としては相当な規模を誇る。

内容は、多数の国府型ナイフ形石器・国府系ナイフ形石器に、その他の横長剥片製ナイフ形石器、翼状剥片、同石核であるが、国府型ナイフ形石器と翼状剥片が主体をなす（第Ⅲ－84図）。翼状剥片は厚みの均質な左右対称性の高いものを中心とし（同33・34）、国府型ナイフ形石器も製作途上の折損品を除いて細身長狭型からなっており（同23～32）、国府石器群との共通性が高い。剥片剥離過程を示す接合資料はないが、以上の内容は明らかに国府石器群と同様の方法によって国府型ナイフ形石器の集中製作を示すものであり、瀬戸内方面からの直接的な人の関与があったと見てよい。

3. 東海地方の国府系石器群

東海地方では、国府系石器群の多くは西部の岐阜県に多く、国府石器群との近縁性を示す石器群が発見されている。このほかの地域では、国府系ナイフ形石器の単独出土遺跡が多い。

下呂石（湯ヶ峰デイスайト）原産地（湯ヶ峰山）近傍の遺跡は、いずれも表面採集資料で発掘資料は無い。初矢遺跡と大林遺跡が良く知られている（第Ⅲ－60図12～17）。最初の下呂石原産地において国府系石器群の存在を指摘したのは鈴木忠司らによる初矢遺跡採集資料の報告で（鈴木・片田 1979）、下呂石製の国府型ナイフ形石器2点が採集されている。初矢遺跡の近傍にある大林遺跡では、各種の石刃・縦長剥片製石器に混じって幅広厚手の国府系ナイフ形石器や翼状剥片がみつまっている（飛騨考古学会旧石器分科会 1995、井上 2001）。

湯ヶ峰よりさらに北、岐阜県北端にある宮ノ前遺跡センター地点では、輝石安山岩製とされる大型の国府型ナイフ形石器が単独出土している。

岐阜県日野1遺跡は、木曽川北岸の各務原台地からやや北西の低位段丘面上に位置し、多数の礫群とともに2,629点の石器が出土している。旧石器時代石器群とされたものの大半はV層上部並行期と考えられる（第Ⅲ－58図）。ブロック13から、国府型ナイフ形石器製作にかかわる接合資料（個体別資料番号K116）が得られている（第Ⅳ－7図）。接合資料の石材は、遺跡から30kmほど北にある阿部山で採取可能な板取系珪質溶結凝灰岩（長屋 2003・2005）である。二枚の盤状剥片から翼状剥片を製作していく過程を示している。遺跡に持ち込まれた状態が盤状剥片であったか原石に近い状態であったかは分らない。二つの盤状剥片では、いずれにおいてもその打面側から、かなり細かな打面調整により作業面形状を三角形に整えつつ、石核幅いっぱい翼状剥片を剥離しようとしている。特に、Aではかな

り連続した翼状剥片が剥離されている。翼状剥片は厚みが比較的均質で左右の対称性が高い。翼状剥片や同石核は他のブロックからも出土し、いずれも上記と類似した技術的特徴をもつ。板取系珪質溶結凝灰岩製を含む国府型ナイフ形石器が折損品ながら複数点出土している。ちなみに、隣接する日野2遺跡でも下呂石製・チャート製国府型ナイフ形石器と、同じく下呂石製・チャート製の翼状剥片石核が出土している。

これ以外には、各務原台地周辺の諸遺跡や愛知県西部において国府型ナイフ形石器と国府系ナイフ形石器が散発的にみつかっている（川合 2003）。愛知県勅使池遺跡・豎三蔵通遺跡ではサヌカイト製の国府型ナイフ形石器が採集されている。岐阜県の各務原台地でもいくつかの表採資料がある。土山西遺跡ではチャート製の国府系ナイフ形石器、芦原遺跡ではサヌカイト製国府型ナイフ形石器と珪質凝灰岩製の国府系ナイフ形石器が各1点採集されている（沢田・長屋 1990、沢田 1992a）。寺田遺跡や椿洞遺跡では比較的大型の国府系ナイフ形石器が出土している。角錐状石器はチャート製だが、国府系ナイフ形石器は主に下呂石、板取系珪質溶結凝灰岩製である。

静岡県西部には、しばしばサヌカイト製石器が出土する事例がある。ツールばかりでなく、チップ・小剥片としても残されていることがある。

静岡県東部（三島・沼津市域）には、遺跡数自体が極めて多数確認されているにもかかわらず、国府系石器群の出土は知られていない。唯一、三島市中林山遺跡（鈴木・芦川ほか 2002）では休場層中部（YLM）より黒曜石製の横打剥片製一側縁ナイフ形石器が確認されているが（第IV-9図）、層位的にもかなり上層からの出土であり、非常に薄手・小型で国府石器群との直接的関係を考えるには問題のある資料である。

東海地方の中部にあたる静岡県西端の磐田原台地は遺跡が密集して確認されている地域であるが、国府系石器群はわずかに数遺跡で確認されているに過ぎない。IV層下部並行期の京見塚遺跡では、かなり厚手の盤状剥片を石核素材として厚手の横長剥片が連続剥離されている接合個体を実見により確認しているが（未報告資料）、これを素材としてナイフ形石器を製作する過程は一切認められない。勾坂中遺跡群では膨大な資料の中から国府系ナイフ形石器が数点散見されるのみである（第IV-8図）。勾坂中上2遺跡では、厚手幅広の国府系ナイフ形石器が1点認められる。

以上、東海地方では、西部の下呂石原産地周辺から各務原台地周辺にかけて、国府石器群同様の技術的特徴をもつ石器群が散見された。各務原台地周辺にはサヌカイト（二上山産と思われる）製石器類も認められることから、瀬戸内からの人の移動があった可能性が高い。しかしそれ以东にはほとんど痕跡を追うことができない。静岡県東部にいたっては皆無である。日野1遺跡の石器群から見る限り、瀬戸内方面からの人の移動は少なくともV層上部並行期には起こっている。

4. 関東地方の国府系石器群

現在のところ、関東地方全体では54遺跡において国府系石器群ないし国府系ナイフ形石器単独出土資料の存在を確認している。旧石器時代に属する遺跡が、例えば武蔵野台地だ

けでも 1000 遺跡を超えるなかであって、極めて検出事例が少ない。特に北関東地方での検出遺跡は群馬県上白井西井熊遺跡、栃木県寺野東遺跡Ⅱ文化層、茨城県北西原遺跡（川口 2002）の 3 遺跡だけである。

国府系石器群としての分類可能なほどまとまった資料はほとんど見られない。しかし、興味深いことは、このような国府系石器群の零細さにもかかわらず、東海地方とは異なって稀に精美的な国府型ナイフ形石器が 1 ～数点検出される事例があることである。そしてそれらの遺跡では、古本州島東北部との関連性を伺わせる要素が多い点は見逃せない。

埼玉県の大宮台地に位置する殿山遺跡はその代表である。この遺跡の国府型ナイフ形石器は玉髓製（第Ⅲ－36 図 30 ～ 32）であり、この玉髓は国武貞克によれば新潟県のもものと類似しているといい、その方面との関係をうかがわせる。なお、これらの国府型ナイフ形石器の製作過程を示す資料は遺跡内には無い。かつて殿山技法（織笠 1987b）として関東地方における独自の国府型ナイフ形石器製作技術とされた剥離技術が提唱されたことがあったが、織笠昭の提示した資料は多くが小型の黒曜石製横長剥片を小型盤状剥片から剥離するという一般的技術に過ぎず、本遺跡出土の国府型ナイフ形石器の大きさ・石材とも一致しない理念的な技法である。

千葉県一本桜南遺跡では、比較的形態の整ったチャート製の国府型ナイフ形石器が製作痕跡なく検出されている（第Ⅳ－10 図）。また、千葉県源七山遺跡第 3 文化層では、チョコレート頁岩製の、きわめて大型の国府系ナイフ形石器が発見されている。田村隆や国武貞克らが明らかにした下野・北総回廊（田村・国武ほか 2003、田村 2006）を経由してもたらされたものと考えられる。

最近の調査になる群馬県上白井西井熊遺跡第 2 文化層では、5600 点の遺物が検出され、在地の黒色安山岩・黒色頁岩を用いた翼状剥片の大量製作過程が復原されたことで注目されている。正式報告が未刊行のため、概要報告（大西 2008）から判断せざるをえないが、翼状剥片製作にかかわる多くの接合資料が得られている。黒色安山岩の場合、その剥離技術はいわゆる瀬戸内技法の手順とほとんどの部分で一致しており、瀬戸内地方の国府石器群との技術的近縁性が一見して明らかである。ただし、10 点弱出土しているナイフ形石器の形態は、厚みがありやや幅広木葉形の国府系ナイフ形石器であることが、国府石器群と異なっている。ただし、ナイフ形石器は製作事故による折損品ばかりが認められること、翼状剥片自体の形態は国府石器群のそれに酷似するものが目的とされていることから、本来は国府型ナイフ形石器製作が目的物であった可能性は高い。この推測にたち、本論ではこの石器群の形成に瀬戸内地方の人間が直接関与していたと考えたい。黒色頁岩の場合は幼児人頭大の礫を分割して、好適な形状の盤状剥片が剥離された場合に限り、翼状剥片剥離が行われている。この遺跡自体には東北地方産と思しき石材は見られないようだが、遺跡の位置が利根川最上流域にあり、新潟県と北関東をつなぐルート上にあることは注意しておきたい。

東京都丸山東遺跡は文化層分離が極めて不十分で、多時期の石器群が混在したまま報告されているが、Ⅳ層文化層より透明黒曜石製（おそらく信州産）でやや幅広の国府型ナイフ形石器が出土している。この石器は折損後に基部側を抉るように再加工を加えられ、再使用を

試みられており重要である。一般的な刺突具として用いられていると考えられるためである。石器素材の生産痕跡はない。

以上のほか、在地の石材を用いた国府型ナイフ形石器が、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層に1例のみ確認できる。かなり厚みがある。相模野台地では一般的に用いられる緑色細粒凝灰岩製のこのナイフ形石器も、やはりその製作過程を追うことができない。在地の石材を用いているということで、遺跡からそう遠くない場所で製作されたことが推定されるが、その技術がいかなるものであったかは、ナイフ形石器だけからは分らない。

このほかには、在地の石材を用いた中小型の国府系ナイフ形石器しか認めることができない。代表的なものには東京都鈴木遺跡D地点(角張 1989)例(ホルンフェルス)が挙げられる。

このように関東地方では、北関東・東関東およびそれらをつなぐルート上にある大宮台地では、翼状剥片の生産遺跡や、東北地方との関係をうかがわせる石材を用いた国府型ナイフ形石器が認められる傾向にある。このルートを外れた武蔵野台地や相模野台地では、黒曜石製の国府型が出土した丸山東遺跡、大型の国府型が出土した柏ヶ谷長ヲサ遺跡を例外として、在地石材を用いた中小型の国府系ナイフ形石器がほとんどである。つまり国府系石器群の内容差を加味して分布を検討すると、関東地方に一樣に国府系石器群が広がっているのではなく、主に利根川を境とした様相差が存在する可能性が高い。

瀬戸内方面からの人の移動があったことを示唆するのは上白井西井熊遺跡例のみで、その時期はⅤ層～Ⅳ層下部である。新潟県には瀬戸内方面から人が移入して残したと考えられる石器群が複数あるので(後述)、上白井西井熊遺跡はその派生先と考えられる。

その他の事例は製作痕跡を伴わないため、荷担者推定は難しいが、石材から見ても、多くはこの地域で製作されたものではない可能性があり、古本州島東北部奥羽山脈西部との何らかの社会的接触の結果もたらされたものと考えるのが妥当であろう。殿山・一本桜南・柏ヶ谷長ヲサ第Ⅸ文化層のいずれも、Ⅴ層上部並行期である。東関東の国府系石器群については田村隆らによる下野-北総回廊最北端の磐越高地を介して、奥羽山脈西部地域との何らかの社会的接触によりもたらされたと思われる。その意味で、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層例の解釈は困難を極める。1点のみであり、在地の石材を用いていること、中型の国府系ナイフ形石器が散見されること、盤状剥片を用いた横長剥片石核が認められることなどから、瀬戸内技法によらない代替技術によって製作された可能性がある。

5. 中部高地の国府系石器群

中部高地における国府系石器群の痕跡は極めて乏しい(第Ⅴ-10図)。ほとんどが黒曜石製の石器からなる男女倉遺跡B・J地点石器群には大型の有樋尖頭器や厚手の切出形石器とともに、厚手幅広の国府系ナイフ形石器と呼べそうな石器がある。しかし、この国府系ナイフ形石器は砂川石器群直前期、国武貞克のいうⅣ下最新段階の石器群、例えば埼玉県明花向C地点(田中・金子ほか 1984)の石器群に近い。時期的にみて国府型ナイフ形石器の広域展開とはほとんど関係をもたないであろう。

野辺山B5地点遺跡(佐藤 1970)では、国府系ナイフ形石器と思われる黒曜石製の石器が

採集されている。剥片とされているが、図を見る限りでは横長剥片製ナイフ形石器である。

開田高原に位置する柳又遺跡 C 地点では、第Ⅳ文化層より下呂石製の国府系ナイフ形石器が出土している。背部整形が弧状に施された幅広木葉形のものである。加工は鋸歯状加工ではなく、器体奥部に及ぶやや平坦な剥離による。ただし同文化層の二側縁加工ナイフ形石器は、少なくともより新しい時期に属すると思われるため、国府系ナイフ形石器の共伴石器群は不明である。ほぼ同一層準ながら集中部を異にするため別文化層（第Ⅴ文化層）とされた木葉形の下呂石製の角錐状石器、チャート製大型切出形石器、チャート製横長剥片製ナイフ形石器（これも背部整形がやや平坦な加工である）等に伴うものかもしれない。第Ⅴ文化層では安山岩の盤状剥片を素材とする石核から、石核底面に向けて横長剥片を剥離したことを示す石核がある。

中部高地は国府系ナイフ形石器の散発的出土に特徴づけられ、瀬戸内からの人の移動があったと推測できるような痕跡はほぼ皆無である。柳又遺跡の石器群は、下呂石製の石器を一定数含み、木曾川を介して岐阜県側石器群との関係を強く窺わせる。

6. 古本州島東北部の国府系石器群

この地域の国府系石器群は、関東地方や東海地方とは異なり、総遺跡数に対して、国府系石器群を出土する遺跡の割合が高い。また、一遺跡で多数の国府型ナイフ形石器・同石器製作関連資料が認められることも特徴である。以上のことは、在地の石刃石器群の中に瀬戸内からの影響が「貫入」したという評価を導く根拠となっている。しかしここでも国府系石器群の内容は多様であり、まずその整理をおこないたい。

代表的な遺跡には、山形県越中山遺跡 K 地点、新潟県樽口遺跡 A-KSE 文化層、御淵上遺跡、同坂ノ沢 C 遺跡、野尻湖遺跡群の長野県東裏遺跡 H2 地点、福井県西下向遺跡がある。東裏遺跡を除き、図は第Ⅲ－106～108 図に提示している。以下では石器群の内容差に基づき、便宜的に二つの群に分けて説明する。

・A 群

御淵上遺跡の国府系石器群は、薄手／長狭型で、鋸歯縁加工の発達するやや大型の国府型ナイフ形石器に特徴をもつ（第Ⅲ－107 図 1～8）。また、良好な接合資料は得られていないものの、石核や剥片の分析から、ナイフ形石器の素材が輝緑凝灰岩・輝石安山岩・玉髓・碧玉・チャート等の石材を用い、盤状剥片を石核素材として（麻柄・古森 1992・1993）、その打面部の背面側から腹面側に向けて翼状剥片を剥取する（同 7・8）。打面調整は細やかに施されることが多く、作業面の対称性が確保されている。瀬戸内系石器群では、同遺跡の尖頭器石器群、あるいは周辺地域の石刃石器群でよく利用される珪質頁岩はあまり用いられず、代わって安山岩の利用が目立つ。御淵上遺跡では、国府系石器群に共伴する石器群の内容は判然としないのであるが、型式学的にみて同遺跡の尖頭器石器群はかなり後出的特徴をもち、これらが国府型とセットをなした類例もなく、かつ尖頭器の母体が編年的には国府系石器群出現以前には遡れないことから、国府系石器群とは共伴しないとするのが妥当であ

る。

長野県北端の野尻湖遺跡群東裏遺跡 H2 石器群（第Ⅳ－11 図）は、薄手・長狭型で、鋸歯縁加工の発達する中・大型国府型ナイフ形石器（同 3～5、17～19）を複数有しており、その特徴が最も類似するのは御淵上遺跡である。石材は安山岩である。ただし、遺物の多くは自然流路内の砂礫層から出土しているため、遺物の平面分布はかなりの自然的改変を蒙っているらしく、出土層準も野尻湖の標準層序に対比できない（土屋・谷 2000b）。したがって、国府型ナイフ形石器にどういった石器群が共伴するのかは、不明な点が多い。発掘調査報告書では、遺物があまり摩滅しておらず、遺物分布に一定のまとまりがあること等から、このまとまりにある程度の単位性を認めてよいとするが、不確実といわざるを得ない。ここでは、設定された「ブロック」ごとに、国府型ナイフ形石器と共存する傾向のつよい石器を概観するにとどめたい。

国府型ナイフ形石器としばしば共存しているのは、非調整打面をもつ尖頭石刃を素材とする中型尖頭形石器（同 2・6）や、中小型の複刃厚形削器（角錐状石器）、剥片尖頭器（同 13）、および山形県上ミ野 A 遺跡や樽口遺跡 A-KSE 文化層に類似する二側縁加工ナイフ形石器（同 14）・切出形石器（同 15・16）等である。特に、他の「ブロック」群から少し離れた位置にある「ブロック」11 では、国府型ナイフ形石器・非調整打面をもつ尖頭石刃を素材とする尖頭形石器・台形様石器・切出形石器・短冊形の局部磨製石斧（ただし、石斧は技術形態から見てⅦ層並行期にさかのぼるとおもわれる）が認められる。多数の搔器も存在する。不安定な出土状況下ではあるが、国府型ナイフ形石器と上ミ野 A 遺跡・樽口遺跡 A-KSE 文化層類似の二側縁加工ナイフ形石器・切出形石器、そして多数の搔器の存在に注目しておきたい。

福井県三国町西下向遺跡（第Ⅲ－108 図 8～13）は「三国技法」提唱の根拠となった遺跡である。出土石器の点数が 128 点（表採品 1 点含む）と少なく（平口・松井 1983、平口・松井ほか 1984）、評価が難しい。「三国技法」そのものは 2 点の石核、そして剥片 2 点の接合資料 2 組を主たる根拠としていて資料的裏づけに乏しい。

西下向遺跡の石器群を見直すと、必ずしも特異な技術を有した石器群とは思われない。根拠とされた石核 2 点のうち 1 点は、盤状剥片の一端から石核幅いっぱいに剥片を剥離したものである。もう 1 点は、石核の長軸を作業面として大型の横長剥片を打剥したものであるが、作業面の形状や残された剥離面からみて、打点を横方向に移動しながら剥片剥離をおこなった石核である。ただし、遺跡に残されたナイフ形石器は国府型の範囲内で理解可能であり（麻柄 1984）、瀬戸内系石器群の一群に加えることもできない。西下向遺跡に残された、国府型ナイフ形石器製作に関わる石器群の構造布置は、並列横打剥離石核を除き、瀬戸内概念で説明可能な範囲と考えておきたい。

越中山遺跡 K 地点（第Ⅲ－107 図 9～16）は東北地方における国府系石器群の発見の端緒である。加藤稔（1969）が最初に指摘したように、本遺跡では在地の石刃石器群ではほとんど用いられない「異例」の石材（黒色の珪質頁岩、碧玉、凝灰質泥岩等）が活発に利用されていることが特徴である。正式報告が未刊行であるが、ここでは会田容弘の報告文（会

田 1992・1994b) を参照する。国府型ナイフ形石器の製作過程が分かる接合資料があり、翼状剥片・同石核も多数出土している。幼児人頭大の礫を分割して得られた盤状剥片の一部を石核素材として用い、その打面側から、打面部に細調整を加えつつ、翼状剥片を連続剥取している(同 16)。このため、九州地方東南部で観察した石器群と異なって、頁岩製ながら厚みの比較的均質な、左右対称性の高い翼状剥片が多数剥離されている。

国府型ナイフ形石器は、鋸歯状の背部整形をもつ長狭型の中・大型品を中心とする(同 9・10)。大きさのわりにやや厚みがある特徴を持つ。大型品は(珪質)頁岩・凝灰質泥岩製に多いらしく、オパール化の進んだ黒色の珪質頁岩には中型品が多いようである。また、ブロック状の石核消費を通じて得られた剥片からは尖頭部をもたない角錐状石器を製作している(同 11)。大小のノッチを連続させていびつな刃部を形成する鋸歯縁削器、ベック状の厚手尖頭部をもつ錐形石器も認められる。少数の薄手石刃や、石刃製搔器が伴出している。

なお、表採資料ながら、長野県上水内郡信濃町の瑞穂遺跡(野尻湖人類考古グループ 1990)や富山県婦中町石山 I(麻柄 1984)、八里向山遺跡(下濱編 2004)、猪野口南幅遺跡(宝珍・松村編 2000)からも安山岩製の国府型ナイフ形石器が出土している。山形県小国町湯の花遺跡出土では珪質頁岩製の翼状剥片(会田 1987)が採集されている。

・B 群

A 群と異なる様相を持つ国府系石器群がある。樽口遺跡 A-KSE 文化層石器群や、坂ノ沢 C 遺跡では、石刃石器群に国府系ナイフ形石器が共伴している。

樽口遺跡 A-KSE 文化層(第Ⅲ-106 図)は、国府系ナイフ形石器(同 1~3)、多様な剥片製ナイフ形石器(同 4)・尖頭形石器(同 10・11)、石刃製尖頭形石器(同 7~9)、切出形石器(同 5)を伴う。立木の文化層区分(立木編 1996)のとおりに、A-KSE 文化層の尖頭形石器は A・B-KH 文化層や A・B-KSU 文化層とは異なった特徴をもち、分布状況のうえでも KH・KSU 文化層のものとは区別するのが適当だろう。また、本石器群には、石刃石器群のものとは異なって、バルブの発達した剥片製で短寸の搔器が多い。搔器には、刃部と反対側を細く絞り込んだ特殊な形態のものが 1 点認められる(同 14)。これは、後述する上ミ野 A 遺跡にも存在するので注意される。他に、鋸歯縁削器、彫器・同削片も認められる。複刃厚形削器はあるが、尖頭形のものはない。国府系ナイフ形石器は、それぞれ形態的に個性的で多様であり、長さのわりに幅広・厚型で、背部整形は大小の剥離痕が不規則に並び、粗雑である。背面剥離痕構成からみて、厚手の中・大型剥片を石核素材とするものの、背面側から腹面側へ横打剥片を剥離するものよりも、腹面側から背面側へ横打剥片を剥離するものが多い。剥片剥離における打点は石核の周囲を巡るように配置される(第Ⅳ-12 図)。こうして得られる横打剥片は、形態的な規格性が乏しいので、背部整形はその位置や程度を柔軟に変更しつつ施す必要があったと考えられ、これがナイフ形石器の多様性を生み出している。

一方、坂ノ沢 C 遺跡ブロック 3 石器群(鈴木 1999)は、総点数 50 点程度と小規模ながら、樽口遺跡 A-KSE 文化層に類似した石器が出土している(第Ⅲ-107 図 17~22)。樽口遺跡同様、厚手／幅広の国府系ナイフ形石器が認められる。坂ノ沢 C 遺跡の石器群で注目される

のは、安山岩製であるにもかかわらず、御淵上遺跡とは異なる厚手／幅広型の国府系ナイフ形石器が存在することである。坂ノ沢C遺跡にも調整型石刃技法による石刃石器が共伴している。他に、切出形石器や小形薄手石刃製の尖頭形石器がみられる。

このほか、新潟県津南町の正面ヶ原B遺跡（佐藤 1998）や、表採資料の新潟県大聖寺遺跡（佐藤・磯部 1988）・同二タ子沢B遺跡（鈴木 2001）出土横打剥片製ナイフ形石器のナイフ形石器も、中型幅広のもので国府型とは呼べず、むしろ樽口遺跡のナイフ形石器に類似品が認められるものである。同様の石器に、長野県貫ノ木遺跡 H4 地点・山形県月山沢遺跡（会田 1987）・秋田県館の上遺跡（工藤・高橋 1998）等から、頁岩製の国府系ナイフ形石器が出土している。

ところで、山形県新庄盆地の上ミ野A遺跡（第Ⅲ－111 図）は、縦長剥片製二側縁加工ナイフ形石器や切出形石器に特徴を持つ石器群が出土した遺跡だが、わずかに 1 点ながらも横長剥片製ナイフ形石器（同 13）があり、盤状剥片から横長剥片を生産した石核が少数伴うので触れておく。

遺跡の概要は以下の通りである。遺跡は新庄盆地の西縁に位置し、乱馬堂遺跡・横前遺跡・南野遺跡とは盆地をはさんで対岸にあたる、枅形川右岸の中位段丘上にある（羽石・会田ほか編 2004）。遺物包含状態は比較的良好で、AT 上位の可能性が高いことがわかっている。遺跡からは 2595 点の石器と 628 点の礫が検出されている。礫は石器群と重複して検出され、分布図から見る限り数基の礫群をなして集中しており、東北地方の石刃石器群にみる散漫な礫群とは好対照をなす。石器石材は（珪質）頁岩が主体で、黒曜石・玉髄を僅かに含み、樽口遺跡と石材構成がよく共通している。器種構成は二側縁加工ナイフ形石器（同 1～5）・切出形石器（6～14）と鋸歯縁削器（同 18～20）・搔器（同 21～25）を中心とし彫器や横打剥片製ナイフ形石器からなる。剥片には横長剥片から石刃状の縦長剥片までが認められるが、ほとんどの遺物には大きなバルブとコーンが発達する。ほぼ剥片モード単一の石器群と考えられるが、石刃製の尖頭形石器も 1 点含む。

器種構成に占める割合は異なるが、上ミ野A遺跡にみられる石器の型式的特徴は、新潟県周辺の国府系石器群を伴う石器群に一般的なものである。すなわち、上ミ野A遺跡を特徴づけるやや厚手で細身の二側縁加工縦長剥片製ナイフ形石器は、樽口遺跡 A-KSE 文化層（第 106 図－4）や大聖寺遺跡（表採）、東裏遺跡 H2 地点（第Ⅳ－11 図 14）にみられるものと特徴を共有し、切出形石器も樽口遺跡例（第Ⅲ－106 図 5）に近い。刃部とは反対側を細く絞り込んだ特殊な形態の搔器が 1 点認められる点も、樽口遺跡例と共通する。上ミ野A遺跡では、切出形石器の製作がある程度行われた可能性があり、このことが遺跡における器種構成比を大幅に変化させている可能性がある。二側縁加工ナイフ形石器の由来は明らかではないが、規格的形態を有し在地の伝統から発生したとも思えない。三国峠や磐越高地を経由して、切出形石器や基部挟入タイプの縦長剥片製ナイフ形石器が発達する関東地方（北関東・東関東）との関係を考えてほうがよいだろう（例えば、第Ⅲ－37 図 30、第Ⅲ－38 図 7 など）。いずれにせよ、横長剥片製ナイフ形石器も一般的な形態であるので、上ミ野A遺跡は瀬戸内地方の国府石器群との関係をほとんど考えなくてよい。

さて、国府系石器群 A 群は、その特徴が国府系石器群とよく共通しているグループである。その動作連鎖の共通性から、おそらく瀬戸内出自の人々が直接的に関係していると思われる。この地域には国府系石器群が多いばかりでなく、人の移動も相対的に顕著であったらしい。この点、東海地方との差異は歴然である。B 群は A 群とは区別される様相を呈す。ナイフ形石器の形態こそ類似しているが、国府系石器群との動作連鎖の共通性がほとんど見られないグループである。在地系統の石刃石器群を伴うことから、おそらく在地の人間集団が瀬戸内方面から進出してきた人々から石器製作に関わる情報を受け取り、自らの石器製作技術に受容した結果残されたものが、国府系石器群 B 群であったと考える。

7. まとめ

国府系石器群の荷担者を推定し、瀬戸内方面からの人の動きを推定した。その結果、人の移動はかなりの地域的偏りをもっていることが分かった。そのパターンをまとめ、背景を予察しておく。

まず、人の移動があったと考えられる石器群の編年的位置は、九州地方・東海地方西部・関東地方の編年を参照する限り、IV 層下部並行期に及ぶ可能性を含みつつも、V 層上部並行期を中心としていた。関東地方では精美な国府型を含む石器群の時期は基本的に V 層上部並行期である。

第 IV - 13 図は、これまでの検討結果を踏まえ、瀬戸内出自の人々が直接関与して残されたと考えられる国府系石器群を、他の国府系石器群と区別して示したものである。本節の冒頭において、国府系石器群の分布だけにもとづいて、国府系石器群は太平洋側での分布が希薄であると述べたが、以上の分析の結果、そこには人の移動も認められないことが分かった。一方、新潟県から北陸地方、東海地方西部、九州地方西北部にはおそらく瀬戸内地方からの人の移動があったらしい。人の移動があったこれらの地域では、在地の集団によって残されたとされる国府系石器群も多く分布するという傾向がある。国府系石器群は、在地の石器群中に混じって認められることが多いことから、大集団が大挙して各地へ広がったというよりは、個人・小集団規模での移動が主であったと考えたほうがよいだろう。

ところで、瀬戸内からの人の移動は、上記のようにかなり地域的偏りがあるが、このように偏りをもつ人の移動を規制していた背景的要因は何であろうか。興味深いことに、人の移動が起こっている地域は、当時温帯針広混交林が展開していた地域に限られる（第 IV - 14 図）。瀬戸内地方を含む、温帯針広混交林帯は、新潟県以西、中部高地を除く関東以西に広がっている。国府系石器群の分布がこの範囲に限られることは、両者のなんらかの関係を示唆するものである。ただし、これだけでは東海地方中・東部から関東地方の分布の希薄さを説明することはできない。第 IV - 13 図では、国府系石器群の分布域に、瀬戸内地方のサヌカイトと類似する、良質安山岩原産地の位置を重ねて示してみた。すると、国府系石器群の分布（なかでも、瀬戸内からの人の移動があったと考えられる地域）は、温帯針広混交林帯で、かつ良質安山岩原産地を控える地域とほぼそのまま一致していることが浮かび上がってくる。これらのことから推測すると、国府系石器群からみた瀬戸内地方からの人の動きは、

瀬戸内地方と類似した環境条件の整っている地域へ向けて起こっていることが指摘できよう。そして、瀬戸内出自の人々の移動先から派生的に起こる情報伝播により、周辺地域に変容した国府系石器群が現れ、上記の範囲を逸脱した分布を示していると考えられる。その代表は九州東南部・東北部であるが、東海地方中部や関東地方も同様の背景を持とう。前者は積極的な技術受容を行っているが、後者ではそれが行われなかったことが、両者の大きな違いを生んでいる。さらに、新潟県に隣接する東北地方の地域集団は、越中山遺跡K地点のような山形県にまで入り込んだ瀬戸内出自集団の移住例があるにもかかわらず、全く情報受容をおこなっていないことは注意される。

サヌカイト産地が付近に存在しない愛媛県和口遺跡の国府系石器群は、以上の推測から見ても特異な例である。しかし、この遺跡で用いられている頁岩は黒色・硬質かつ金属音を発する特徴をもっており、サヌカイトに近い性質を持つ石材であったことが、この特異な遺跡を生み出した背景かもしれない（木村 2003）。

第4節 情報の受容様式

瀬戸内地方の地域集団の拡散による情報伝播を背景として形成された各地の国府系石器群は、かれらの移住先が前節で述べた要因によって規制され、きわめて地域的な偏りが大きい。それが各地に与えた影響も様々である。国府系石器群展開先の在地の人間集団により残されたと考えられる国府系石器群の技術分析をまとめることで、この点を整理しておく。

九州地方では、西北部において中大型の国府型ナイフ形石器をもつ馬川谷口遺跡や、中大型の国府系ナイフ形石器が複数認められる百花台遺跡等があり、国府型ナイフ形石器の分布も比較的多い。船塚遺跡や東分遺跡に瀬戸内からの人の移動が認められ、これとの接触を契機として、短寸化した剥片尖頭器にかわり、角錐状石器と共に、横長剥片製ナイフ形石器が中大型刺突具として取り入れられた可能性が高い。この地域の西側には黒曜石製の国府系・国府型ナイフ形石器が広い範囲で認められる。

これに対し、東南部では、大型刺突具は各地点で生産された多様な縦長剥片から柔軟に製作できる縦長剥片製ナイフ形石器が中心となり、IV層下部並行期には特大型の刺突具としてホルンフェルス製角錐状石器や大型切出形石器が多くなる。しかし、この地域では大型国府型・国府系ナイフ形石器はほとんどなく、中小型の刺突具ないし刃器としての国府系ナイフ形石器が大半であり、またその製作は遺跡内で原石搬入から製作までが一挙に行われている例が多い。完成品は遺跡外へ搬出されただろうが、搬入品としての国府系ナイフ形石器を多数残すような遺跡は管見の限り認められない。東北部は、地域内に原産地のない安山岩製の国府型ナイフ形石器が散在するものの、それ以外は概ね東南九州に類似した様相のようである。

西南部についても、大型刺突具における剥片尖頭器の後退に際して国府型／系ナイフ形石器は重要な役割を果たさなかった。それだけでなく、国府型／系ナイフ形石器は中小型刺突具としてもほとんど採用されていない。

中国山地では、フコウ原遺跡・恩原1遺跡O文化層の例を見る限り、V層上部並行期には縦長剥片製大型ナイフ形石器が存在し、国府系ナイフ形石器はみられないものの、翼状剥片石核があるため、何らかの影響が及んでいたことは確かであろう。より後出の恩原2遺跡S文化層では横長剥片製ナイフ形石器の卓越が著しい。しかし、他地域に比べ、V層上部並行期にどの程度の影響が及んでいたのかがまず不明であり、V層からIV層下部並行期までの変化を国府系石器群の広域展開という現象を通じて見通すことは、現在の資料数からしても困難といわざるを得ない。

東海地方中・東部や関東地方では、瀬戸内出自の人々からの影響をほとんど受けとっていない。東海地方西部では、下呂石原産地から各務原台地周辺において、中大型の国府型・国府系ナイフ形石器がよく認められる。日野1遺跡のように、瀬戸内出自の人間が直接関与したと考えられる石器製作がみられるので、こうした技術との遭遇を通して、この地域で継続的に使われてきた下呂石と結びついた翼状剥片・横長剥片製のナイフ形石器製作が、縦長剥片製ナイフ形石器とともに、大型刺突具製作技術のひとつとして在地集団に受容されたようである。ただし、それが具体的にどのような技術によっているかは不分明である。また、この地域ではIV層下部並行期にも大型の横長剥片製ナイフ形石器があり（椿洞遺跡）、関東地方などに比べてこの石器が大型刺突具として重要な位置を占めていたことがいえる。

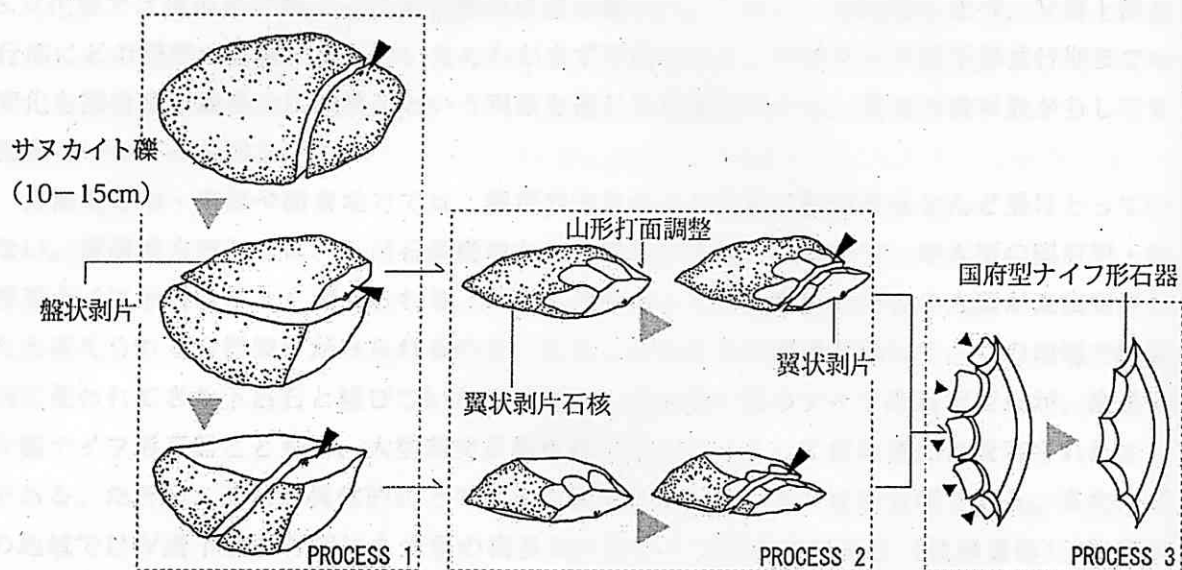
関東地方では、国府系石器群の発達は弱い。国府系とみなしたナイフ形石器もすべて中小型品からなり、大型刺突具の位置を担っていない。縦長剥片製ナイフ形石器がその位置を占めている。このことは、V層上部・IV層下部並行期を通じてかわらない。

中部高地には国府系石器群の影響がほとんど及ばないばかりか、V層・IV層下部並行期の石器群自体がほとんど見当たらない。

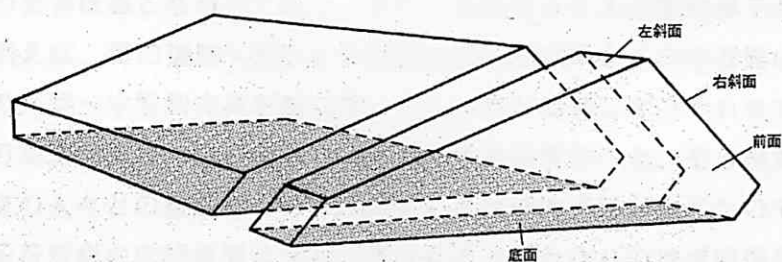
東北地方では、奥羽山脈東西の地域で瀬戸内出自の人々から技術受容をおこなったとみられる痕跡はない。新潟県～北陸地方では、製作技術は国府石器群のそれとは全く異なるが、国府系ナイフ形石器の受容はおこなわれており、それらは決まって中小型の厚手刺突具として製作されている。例えば、樽口遺跡A-KSE文化層石器群の国府系ナイフ形石器は、断面三角形～高台形で幅広の大型～中型刺突具を担っている。これと相関して、それまで厚手大型品からなっていた石刃製刺突具は、同石器群では薄手の刺突具製作へと、その役割を変化させている。瀬戸内出自の人々との接触を一つの契機とした技術的再編が生じたのであろう。

このように、国府系石器群の広域展開は特有の理由によってかなりの地域的偏差をもっていたことで、情報の伝播にも偏りが生じ、技術的影響の偏差が生じた。さらに、国府型ナイフ形石器製作は、その技術的特異性から、そのままのかたちで受け入れられている地域はほとんどみあたらず、各地で多様な受容形態をとっている。重要なことは、瀬戸内からの人の移動があった地域では、横長剥片製ナイフ形石器が大型刺突具として受容されているのに対し、そうでない地域では中小型の刺突具として受容されており、しかも、石器群の中に極めて少数組成されるにとどまることが多いことである。こうした様相差だけでなく、関東地方で指摘したように、両地域の中にはさらに細かな地域差がある。この受容形態の多様性が、各地域独自の環境条件と深く相関して立ち現れた現象であることは明白とおもわれるが、こ

の点について考察する前に、もうひとつの検討課題、角錐状石器の広域展開について次の第V章で分析を加えたい。

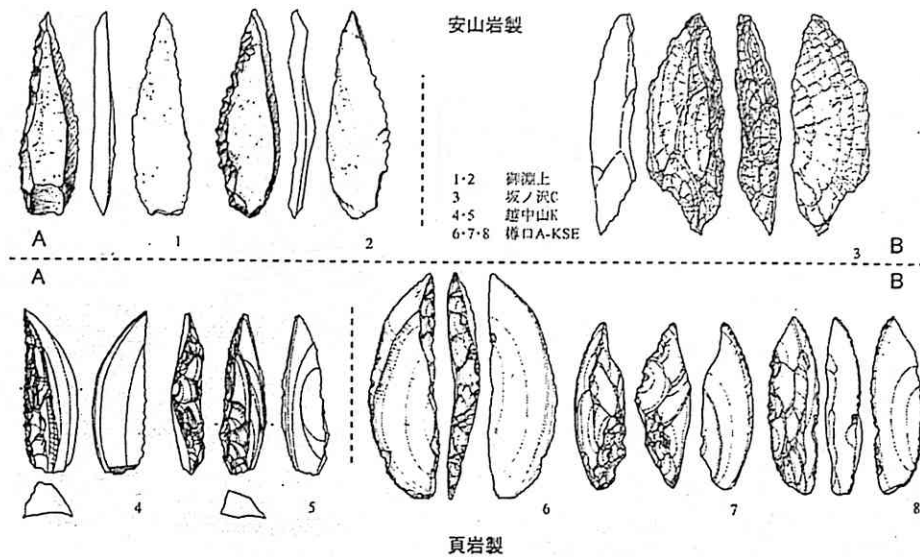


第Ⅳ-1 図 瀬戸内技法 (松藤 1974 に加筆)

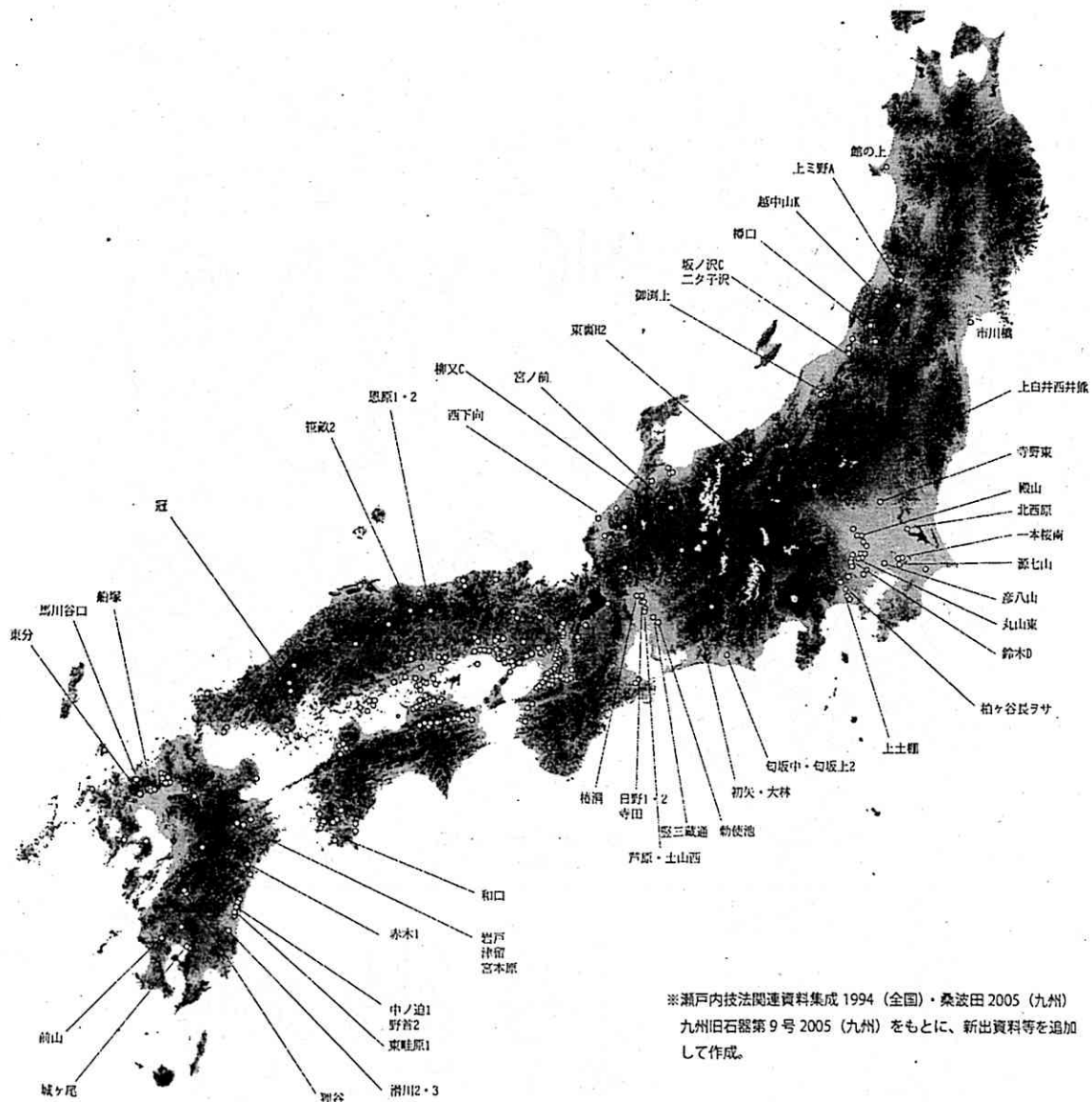


- ・すべての面は、原面でもボジ面でもネガ面でもよい。また、素材面でも作出面でもよい。
- ・底面は1面構成でなければならない。その他の面は何面構成でも構わない。
- ・打撃は斜面上のどこに与えられてもよい。

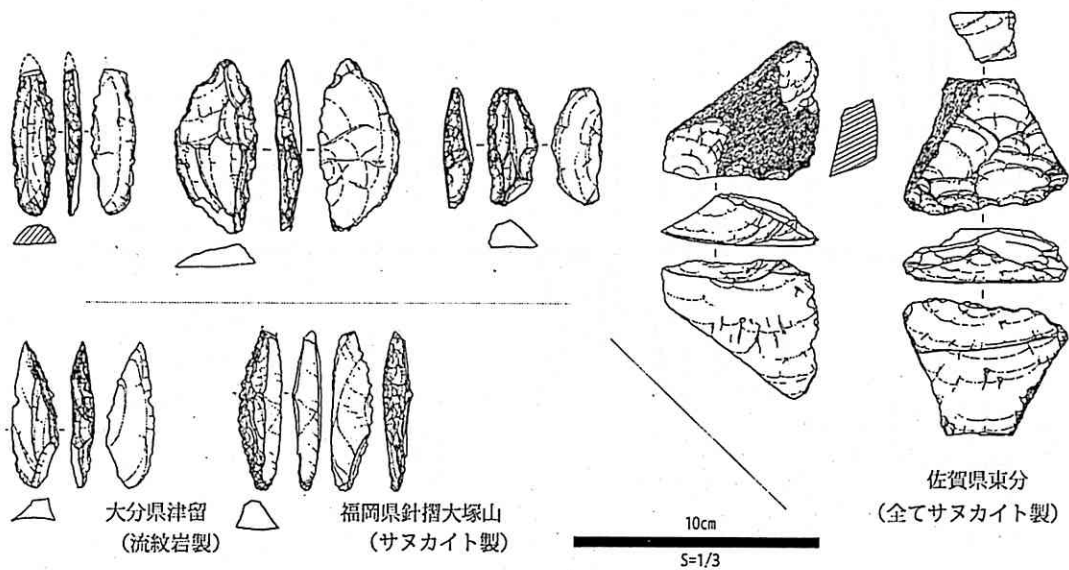
第Ⅳ-2 図 瀬戸内概念 (高橋 2001)



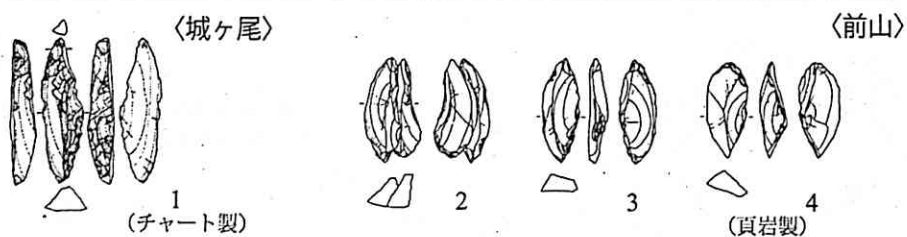
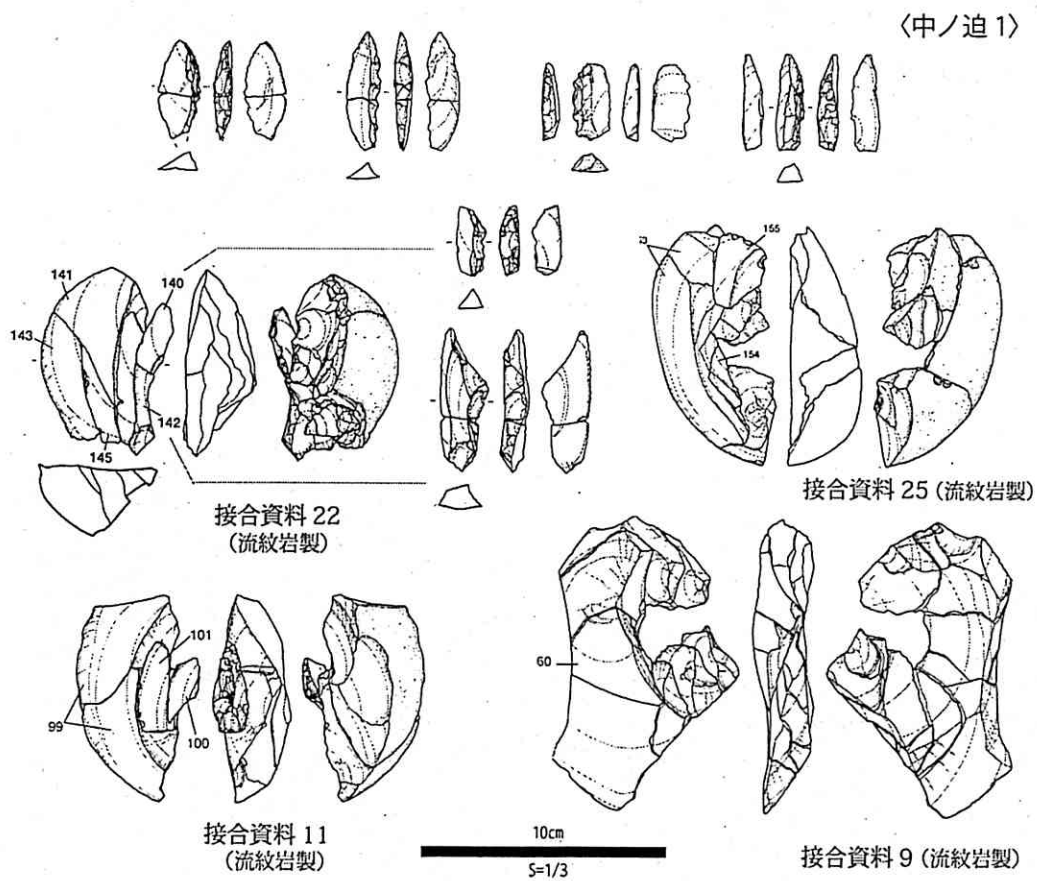
第IV-3図 国府型ナイフ形石器 (A) と国府系ナイフ形石器 (B)



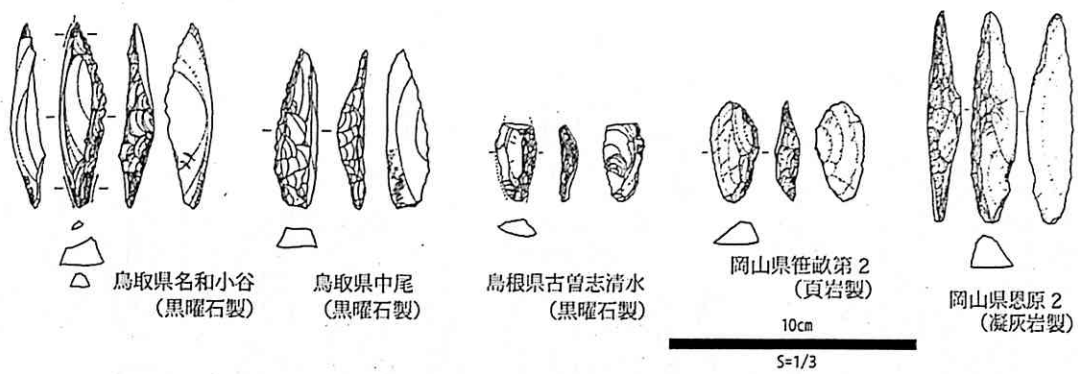
第IV-4図 国府系石器群の分布



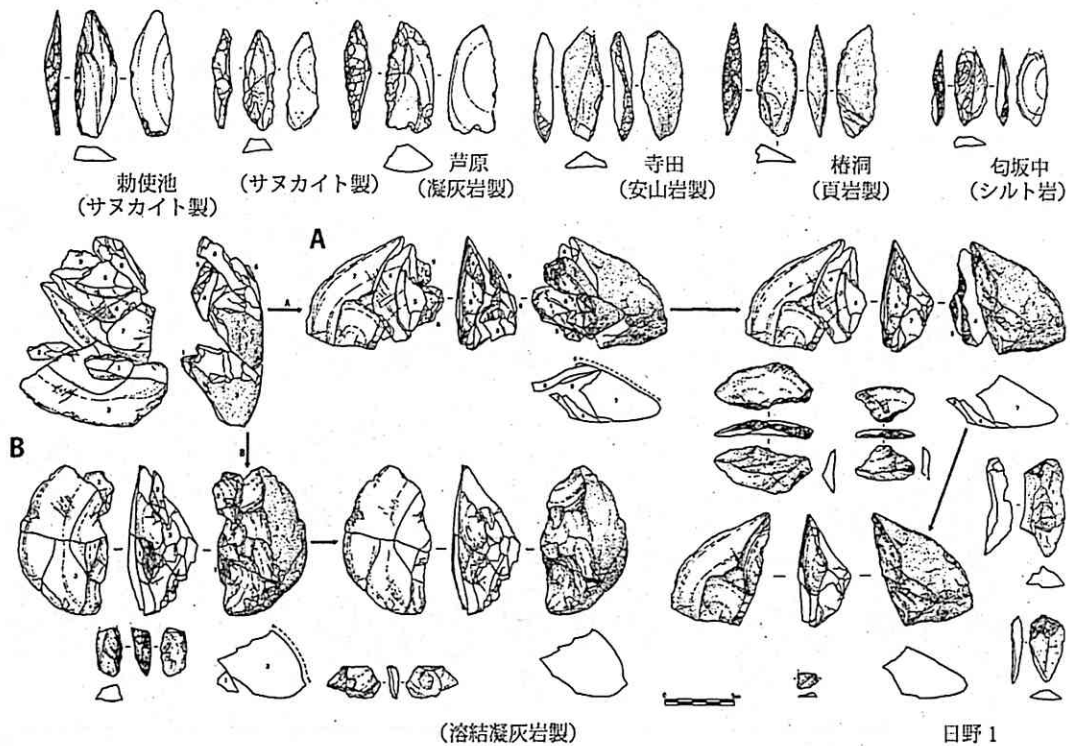
第IV-5 図 九州地方西北部・東北部の国府系石器群



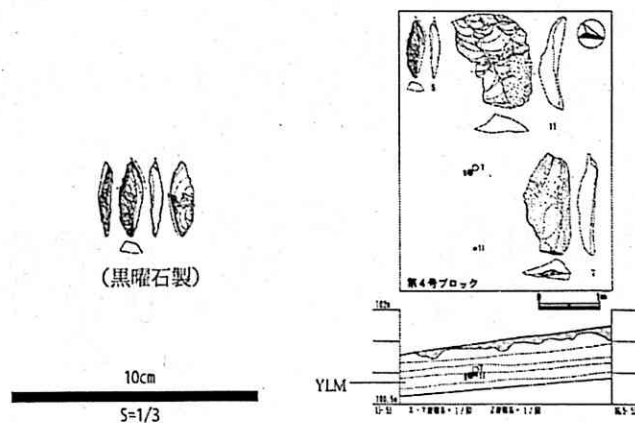
第IV-6 図 九州地方東南部・西南部の国府系石器群



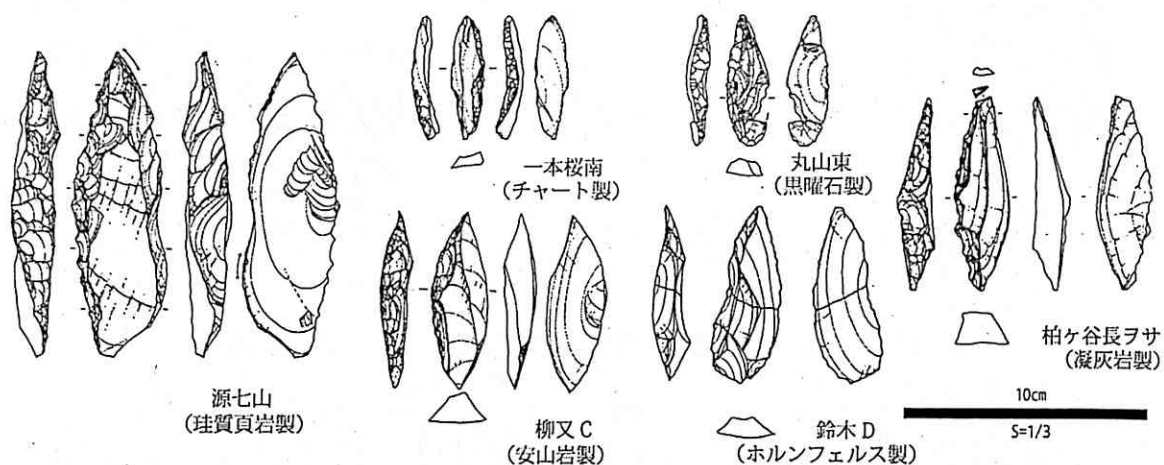
第IV-7図 中国地方・山陰地方の国府型・国府系ナイフ形石器



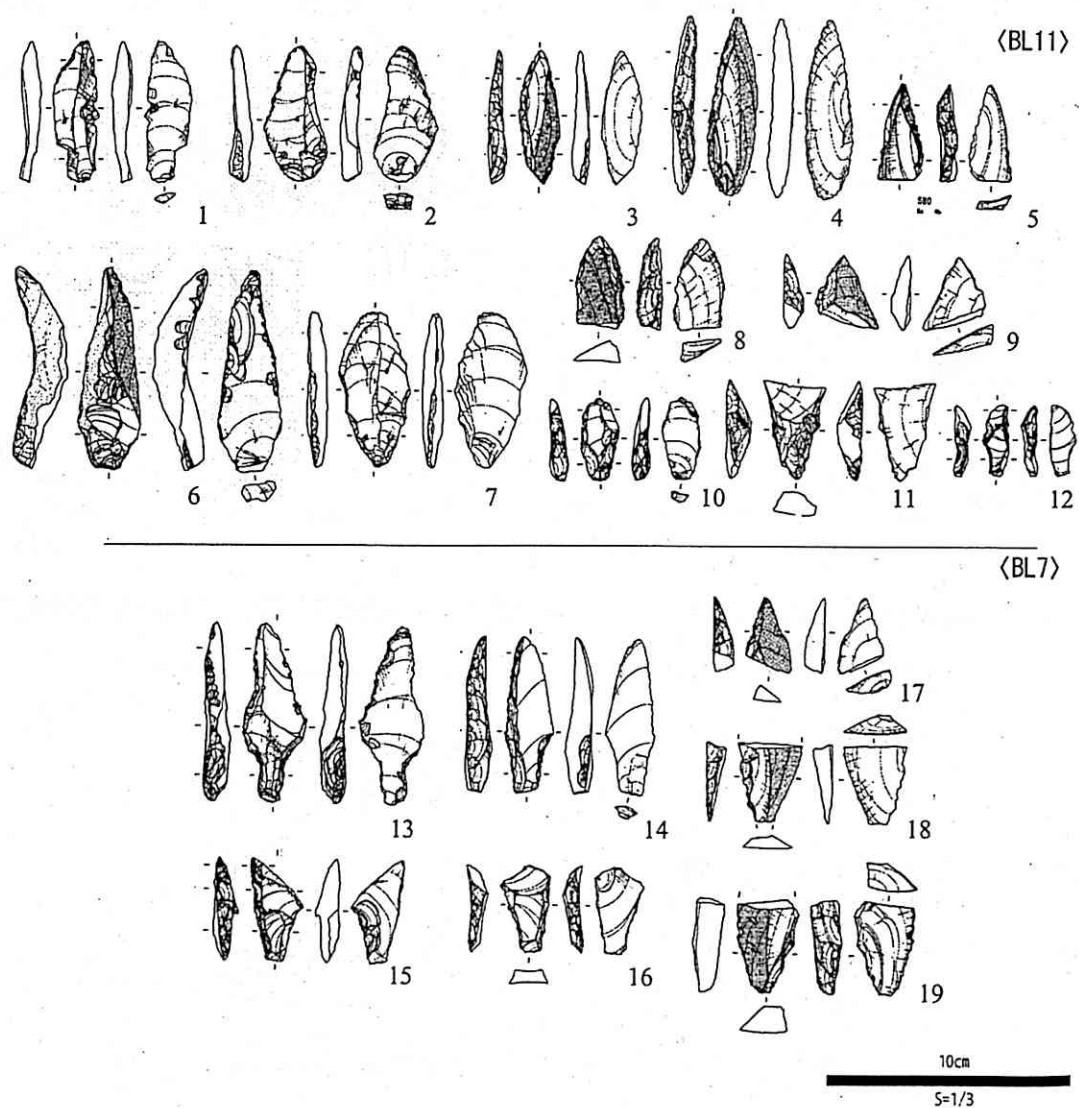
第IV-8図 東海地方中部・西部の国府型・国府系ナイフ形石器と日野1遺跡接合資料



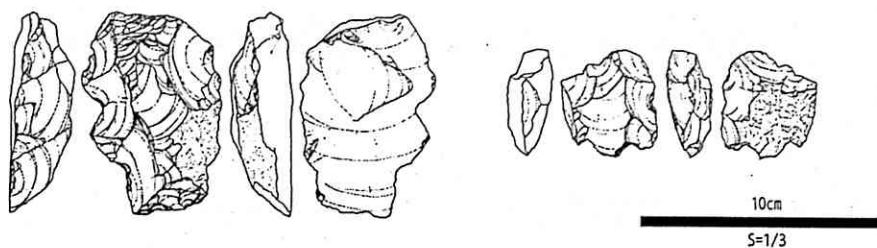
第IV-9図 中林山遺跡の横長剥片製ナイフ形石器と出土層位



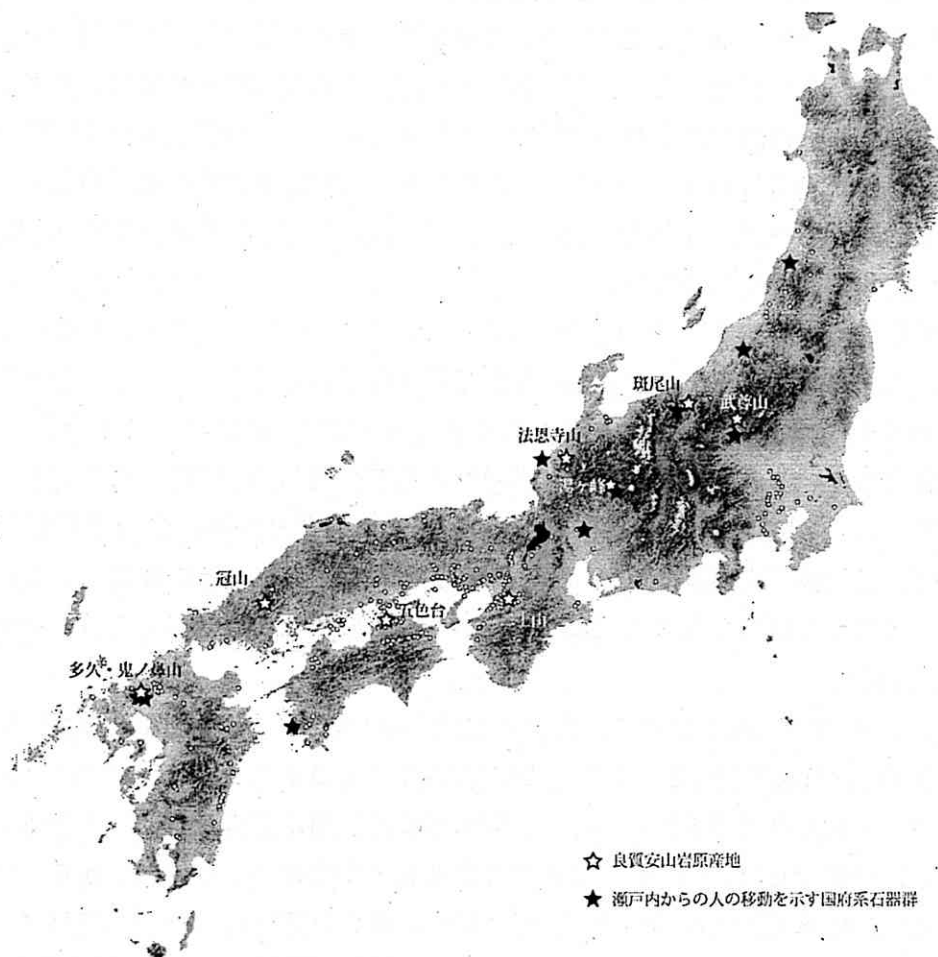
第IV-10 図 関東地方・中部地方の国府型・国府系ナイフ形石器



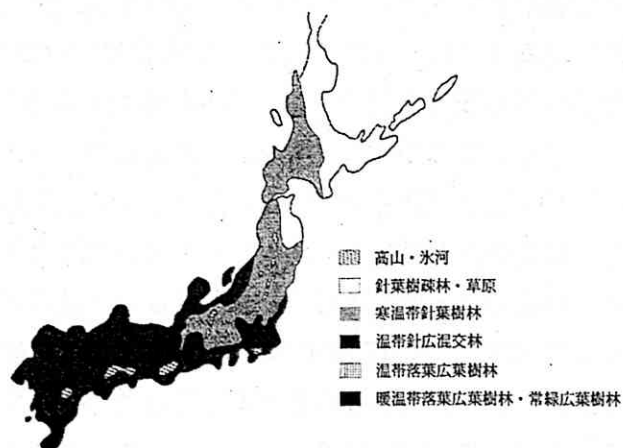
第IV-11 図 東裏遺跡 H2 地点の石器群



第IV-12図 樽口遺跡 A-KSE 文化層の剥片素材石核の一例



第IV-13図 国府系石器群と良質安山岩原産地の分布



第IV-14図 最終氷期の古植生 (辻 2001)

第V章 角錐状石器の広域展開と地域間変異

第1節 角錐状石器の再分類

1. 角錐状石器という分類カテゴリーとその問題

本章では角錐状石器の広域展開と地域間変異について、その実態を整理・分析するという作業をおこなう。ただし、現在、角錐状石器という分類概念の含意する内容は、ナイフ形石器と同様に、設定当初に比べてかなりの拡張がみられるため、角錐状石器という器種分類で指示される石器形態が多岐にわたっている。このことはその時間的変化や空間的展開を詳しく議論する際に、少なからぬ問題を生み出す危険性がある（森先 2007a）。まず、角錐状石器の再分類という作業をおこないたい。

現在、技術形態学的に角錐状石器と一括されている器種は、分厚な剥片や、稀に扁平礫等も素材として、側縁を鋸歯状加工により整形した断面三角形から高台形となる厚形の石器の総称といえ、いまや形態上は一端を尖らせたもの（織笠 1988）だけでなく、尖頭部を持たないものさえ含まれている。しかし、例えばポイント様石器（杉原 1956）、角錐状石器（西川・杉野 1959）、舟底様石器（鎌木 1959）、舟底形石器（芹沢 1957）、尖頭器様石器（矢島・鈴木 1976）、三稜尖頭器（橘 1975）といった用語が存在していたことにもみられるように、本来は設定対象資料そのものを異にした、いくつもの分類名称が与えられていた（松藤 1981、矢島 1985）。

例えば鎌木義昌や佐藤達夫らによる、研究の初期段階での認識は次のようなものであった。佐藤は、岡山県城山遺跡例を、北海道の舟底形石器との類似性から鎌木義昌（1959）が付した用語そのままに舟底様石器とみなし、同宮田山遺跡西地点例を報文どおり角錐状石器として区別し、両者は互いに関係のある石器であるとの認識にたって、前者から後者へという時間的変化を遂げる可能性を示した（佐藤 1969）。これと近い内容は鎌木義昌（前掲論文）も早くから示唆している。たしかに城山の舟底様石器は側縁加工が粗い鋸歯状となり、幅広かつ甲高で舟底状を呈するが（第V-1図1）、宮田山遺跡西地点の角錐状石器の場合は、側縁は鋸歯縁加工ながら比較的直線状に整形され、非常に細身かつ鋭い尖頭形である（同2）。

もちろん、この二種類の石器が鎌木や佐藤の指摘したとおりに変化すると考えることは、現在では難しい。しかし、そこでは現在すでに「角錐状石器」という名称のもとに一括されてしまっている石器が明確に識別されていた。系統関係を整理しうるほどの資料が得られていなかったという時代背景も関係しようが、そうだとした場合でも今でいう角錐状石器が認識された当初は、それぞれの技術的・形態的特徴に十分な注意が払われている。

ところが、主として1980年代以降に提出された集成的研究による角錐状石器の広域比較研究では、上記した各種の差異はむしろ各々の石器の共通点、すなわち厚手素材への全周鋸歯状加工という特徴によって、次第に統一されていった。おそらく、当時進行していた大規

模開発による資料の急増という現実に対し、個別石器間の差異に拘泥するよりも、俯瞰的視点から資料を整理する必要性に迫られていたために起こった石器認識の変化と考えられる。だがこのことは、角錐状石器という概念で指示される石器が、特定の機能的実体を有する単一種の石器であるとみなすことに繋がったと考えられる。それは、この時期以後、角錐状石器・舟底様石器といった用語については、分類名称としてどれが最適であるか（白石 1984、矢島 1985、織笠 1988、松藤 1992、宮坂 1994、絹川 1998）という観点からしか論じられていないことから分かる。

もちろん、角錐状石器自体の分類がおこなわれなかったというわけではなく、しばしば試みられた。ただし当時主流であった断面形状や加工面数といった属性に基づく分類（柳田 1978、松藤 1981、多田仁 1997 など）は製作技術分類であり、角錐状石器という単一の機能的実体を暗黙の前提としておこなわれたものである（第Ⅴ－2 図）。

このように、かつて認識されていた個別石器間の差異は、ナイフ形石器と同様に、形態と型式の整理のなかで次第に統合されたものとみられる。したがって、角錐状石器という概念は、まずその単一の機能的実体を疑うことから始める必要がある。この理由から、柳田や松藤らの製作技術分類はいくつもの成果を上げているのでその有効性は確かであるとしても、本論では採用しない。筆者は、最近では亀田直美（1995）が示唆していた角錐状石器と呼ばれる石器の多様性に再度注目し、単に全てを狩猟具として捉える見解（白石 1997・2002、木崎 1996 等）には与せず、先学が指摘していた諸点にも留意しながら再分類を試みる。なお筆者は、いま角錐状石器と呼ばれている石器に多様な特徴を有する石器が含まれているとしても、それぞれが系統的に無関係であるとは考えていないので、以下で分類を経たのちは、角錐状石器という用語は総称として用いる。

ところで、1980 年以後になると、本論のように広域を対象とした角錐状石器の集成的研究がおこなわれるようになる。角錐状石器の広域比較研究の代表作として、白石浩之の論考（1984）や比田井民子の論考（比田井 1990）が挙げられる。両者は広く関連資料を集成し、当時得られうる情報を活用して角錐状石器の時間的空間的推移を考察した。当時の資料的限界のため、その編年は現在の関東地方および九州東南部の層位事例・研究例からみれば修正は避けられない。同じ問題は萩原博文の論文（1994）についても指摘できる。とはいえ白石・比田井が明らかにした角錐状石器の分布範囲そのものは現在もなお大きな変更を要しないし、萩原が認識した九州における角錐状石器の地域的特徴は、後に岩谷史記（1997）によってもほぼ追証されている。

ただし新出資料の増加や、前項で述べた分類上の問題があるため、分布論にも再検討の余地が大いにある。本論では、先行研究を継承しつつも、角錐状石器の再分類に基づき、広域地域間での比較によって、角錐状石器の地域的な発達の差異を抽出することを試みたい。

2. 角錐状石器の再分類

分析資料は、公表されている北海道以外の遺跡について角錐状石器の集成をおこなったものである（第Ⅴ－4 図：2008 年 9 月現在で 505 遺跡）。資料全体を通覧し、その技術的形

態的多様性を確認すると、長さとの関係や先端部の有無、整形加工の特徴、左右対称性において特に変異幅が大きいことが確認できた。そこには削器状のものや、明らかに尖頭形を呈する細身のもの、やや細身ながら側縁の整形が不揃いな尖頭形のものなど、様々である。これらの特徴から、いくつかの類型にまとめた。以下典型例に基づいて記載する。

*

【角錐状尖頭器】(第V-3図1~4)

本類型は木葉形から柳葉形までを含むが、左右対称形となる特徴をもち、正面観・側面観とも一端が非常によく尖鋭化されているものである。刺突機能が推定される。側縁には鋸歯縁が残されているものが多い。従来の用語を尊重しつつ誤解のないように「角錐状尖頭器」と呼称する。多くは長幅比4:1~2.5:1の範囲に収まる。二面加工品も三面加工品も含む。

なお、同様に刺突機能が推定されるが、極めて長狭型（ほとんどが長幅比4:1前後かそれ以上）かつ側縁の調整が非常に入念なものがある（第V-3図1・2）。宮田山遺跡西地点において最初に角錐状石器と呼ばれた石器（西川・杉野1959）もこの一例に挙げられる。これはその分布を検討すると、瀬戸内地方に主分布域があることから（第V-4図）、特別に「瀬戸内型角錐状尖頭器」と呼称して区別しておきたい。ただし、例えば国府遺跡第6地点のものなどはこの石器の範疇に近いものの、側縁がやや不整形となる特徴があり、瀬戸内地方でもやや特殊であるが、非常に長狭尖頭形で形態的によく共通するため、この類型に含める。瀬戸内型角錐状尖頭器は中・大型品が中心であるが、非常に小型の例も稀に認められる。

瀬戸内型の認識は、織笠昭（1988）が中部日本以西において先端角が鋭い傾向にあるとしていたことと一致している。より詳しく見れば、瀬戸内地方を離れると急減し、九州地方でも確認することはできるが、東海・関東甲信越静ではほぼ皆無に近い状況である（第V-4図、第V-1表）。瀬戸内型は、二面加工品の場合でも基部裏面調整が観察できる場合が相対的に多く、着柄との関連が推定される。

ところで、瀬戸内型角錐状尖頭器とほぼ同形態であるが、先端部が明瞭に作り出されないものが、環瀬戸内地域にわずかに認められる。これを別類型とすることや、未成品とみなすことも可能だが、折損であるかどうかの判断が困難な事例も含むため、現時点では瀬戸内型の範疇に含めておいた。

【複刃厚形削器・厚形石錐】

複刃厚形削器とは、正面観において両端いずれもが尖らないもの、あるいは非常に甲高であるため、側面から見た場合には両端とも鈍く仕上げられているものである（第V-3図5・6）。左右の対称性は必ずしも必須条件でないとおもわれる。細かな調整や基部の作り出しと思われる加工があまり認められず、粗い鋸歯縁を残す。なかでも小型品では側縁部に鋸歯縁や突端部を残そうとする傾向が特に強いため、この類型の加工は、形態形成というよりも技術上は刃部形成といえる。鋸歯縁凹部に微細な剥離痕がしばしば観察され、これを取り除く刃部再生過程を示す接合例も散見される。長さとの関係は一定範囲に収まらない。「複刃厚形削器」（赤沢・小田・山中1980、田村1992）と呼称するのは以上の理由による。本

類型には研究の初期に「舟底様石器」「舟底形石器」と呼ばれたものの多くを含む。

角錐状石器の一部には短寸幅広尖頭形（長幅比 2.5：1 未満がほとんど）で、一端が両側縁からの凹入状加工によって尖らされるが、基部が広がる形態をもつものがある（第Ⅴ－3 図 7・8）。数量的には多くないが、これを厚形石錐としておく。

＊

角錐状尖頭器とした類型は、従来、角錐状石器と呼ばれてきた石器の中で最も一般的な類型であり、数量では全体の半数を超える。しかし東北地方にはほとんど分布せず、関東地方でも大型品は少なく、瀬戸内地方～九州東部で大型品が特に多いという地域的な偏りがある。瀬戸内地方の大型品は瀬戸内型を中心とする。複刃厚形削器も広く確認されるが、環瀬戸内ではやや少ない一方、数少ない東北地方の例はほとんどが複刃厚形削器である。さらにこの石器は九州南部でかなり発達する。石錐は数量自体少ないが、瀬戸内地方に少なく、関東地方や九州地方に多いという傾向はある。

このことからわかるように、従来の枠組みでいう角錐状石器の発達度合いは決して一律ではないので、以下本分類に基づいて角錐状石器の通時的・地域的展開を追究することで、従来とは異なる知見が得られるものと予想される。以上の分類に基づき、角錐状石器の分布とその多様性の詳細を次節で分析したい。

第 2 節 角錐状石器の地域的多様性

第Ⅴ－4 図をみると、北限は岩手県にまで延びるが、西南日本を中心とした分布であることはおおむね従来の指摘どおりであることがわかる。この分布で最も注目されるのは、国府系石器群の分布との異なりである。国府系石器群の分布にはかなりの偏りが生じていたことを確認したが、角錐状石器の場合、その分布は西南日本一帯に及んでおり、両者の発達の背景がかなり異なっていることが予想される。まずは、時期差を留保して、地域ごとの分布と多様性を確かめていきたい。

1. 九州地方

九州地方では、西南部・東部・西北部という程度の地域差がある（第Ⅴ－5 図 1～25）。西南部では、鹿児島県前原和田遺跡、城ヶ尾遺跡第Ⅱ文化層（同 1・2）、九養岡遺跡（同 3・4）でまとまった角錐状石器の出土が知られている。これらの遺跡では、およそ 21000RCYBP とされる桜島 P15（第Ⅲ章も参照）火山灰を含むⅣ層と同層準か、より上位のⅢ層を中心として角錐状石器を中心とする石器群が出土する。角錐状石器は頁岩・黒曜石・玉髄を主に用いて製作されており、角錐状尖頭器を含むものの複刃厚形削器・厚形石錐がより多い。他にも前山遺跡（同 5・6）、桐木耳取遺跡（同 7）などで角錐状石器が認められる。前者は石器群の密集が著しく混在の可能性が高い石器群を出土しており、検討が難しい。桐木耳取遺跡では、長狭型の剥片尖頭器に、小型の複刃厚形削器と思われるものが伴出している。整った角錐状尖頭器の出土は見られず、角錐状尖頭器でも側縁に鋸歯縁が大きく残るものが多

い。

東南部・東北部では、大分県百枝C遺跡、同庄ノ原遺跡、宮崎県東睦原第2遺跡（同19）、同中ノ迫第2遺跡（同15・16・20）などに、瀬戸内型を含む整った角錐状尖頭器が出土する。大分県では流紋岩が主に用いられ、宮崎県ではホルンフェルス・流紋岩・頁岩を中心として、勘大寺遺跡例（同17・18）のように小型品には黒曜石も多用される。これ以外にも複刃厚形削器や厚形石錐があるが、西南部のような発達を見せない。瀬戸内型以外の角錐状尖頭器も、左右対称性の高い形態が多くを占めることが指摘できる。西北部では瀬戸内型の出土は稀である。ただし、大分県境に近い熊本県下城Ⅱ遺跡（同8）、西北部東端にあたる福岡県筑後平野では宗原遺跡（同12）や表採資料を中心に安山岩を用いた瀬戸内型角錐状尖頭器が見られる。厚形石錐や複刃厚形削器も認められる。

概して、九州地方ではその東側の瀬戸内に隣接する地域において角錐状尖頭器がよく発達している。ここには瀬戸内型も多く認められることは注意しておきたい。岩谷（1997）に類似した指摘がある。なお、西南部・東北部・東南部では、遺跡近傍で採取した石材を用いて、製作痕跡が残される傾向にあるのに対し、東北部では産地の限られた安山岩を用いるため、原産地で大まかな製作がおこなわれたと思われる（佐賀県老松山遺跡：同11）。

2. 近畿・瀬戸内地方

瀬戸内地方では中間西井坪遺跡（第Ⅴ－5図28）をはじめとして多くの遺跡で角錐状石器が存在している。いうまでもなく瀬戸内型角錐状尖頭器の発達が著しく、サヌカイト原産地にあたる国分台遺跡群のほか、三条黒島遺跡、大洲遺跡（同26）、瀬戸大橋建設関連の諸遺跡（与島西方：同29）から出土している。西では冠遺跡群の冠D地点（同27）に、東の大阪平野周辺丘陵部では板井寺ヶ谷遺跡上位文化層（同31）、南花田遺跡、国府遺跡第6地点（同32）に瀬戸内型およびそれに近いものが認められる。備讃瀬戸地域を除いて角錐状石器の点数が少ない印象を与えるが、角錐状石器は瀬戸内地方全体を通じて、多くの遺跡で数点程度だけ組成され、ある特定の少数遺跡にまとまって残される傾向があるため、後者のような遺跡が見つからないだけという可能性はあり即断はできない。

原産地遺跡（冠・国分台）、およびその近傍（中間西井坪遺跡）で集中的に製作される傾向があるようだが、広く踏査・発掘調査がおこなわれているはずの二上山サヌカイト原産地では製作址が認められない。

3. 四国地方南部・中国山地・山陰地方

瀬戸内地方における角錐状石器が瀬戸内型角錐状尖頭器に顕著な特徴をもつにもかかわらず、直近の隣接地である四国地方南部太平洋側・中国山地の角錐状石器には瀬戸内型がまったくといってよいほど認められない。

四国地方南部では、奥谷南遺跡（第Ⅴ－5図40・41）の発掘資料と、佐野楠目山遺跡（同42・43）の例が代表的である。奥谷南では、細石刃石器群との混在が著しいが、角錐状石器はチャートおよび頁岩を用いて多数製作されている。角錐状尖頭器や複刃厚形削器が認め

られるが、いずれも側縁の整形が粗く左右対称性に欠く、粗雑な製作技術である。尖頭部の作り出しも弱い。この特徴は佐野楠目山遺跡でも等しく看取される。こうした特徴は、直近の瀬戸内地方よりも九州地方西南部に強い類似性を示すものである（森先・山崎 2006）。

中国山地では笹畝遺跡第 2 地点（同 38・39）の発掘資料に黒曜石製と安山岩製の 2 点の角錐状石器（複刃厚形削器）が、断面採集資料に木葉形の頁岩製角錐状尖頭器がみられる。蒜山原の上野中遺跡第 2 地点（同 35）でも 1 点の角錐状尖頭器が採集されているが、形態的に不整形である。なお、山陰地方では遺跡数自体が少ないが、原田遺跡（同 36・37）では複数の角錐状尖頭器が出土した。このほかには、今のところ 2 点の角錐状石器の分布を確認している。いずれの遺跡でも、瀬戸内型はみられない。

4. 東海地方

東海地方東部には、桜畑上遺跡 BB 1 層下部石器群（同 57）に複刃厚形削器が、子ノ神遺跡 BBO 層出土第Ⅲ文化層（同 53・54）に中型角錐状尖頭器と小型の複刃厚形削器がみられる。これ以外は遺跡内に 1 点のみ認められる遺跡があるにとどまる。尖頭器としての発達が顕著ではない。黒曜石を用いる例が多い。

東海地方中部では京見塚遺跡（同 50・51）で 13 点ほど確認できるが、いずれも非常に小型で、角錐状尖頭器は少ない。句坂中遺跡 BL15・BL53 でそれぞれ 2 点・1 点見られる。角錐状尖頭器を含む。この地域でも角錐状石器は尖頭器としての発達が弱いようである。在地で一般的に用いられるシルト岩を石材としている。

その反面、東海地方西部では、椿洞遺跡（同 44～47）・寺田遺跡（同 50・51）をはじめ、愛知県・岐阜県下で相対的に多くの遺跡（9 遺跡）で角錐状石器を見出している。角錐状石器には瀬戸内型角錐状尖頭器はまったくないが、角錐状尖頭器自体は存在し、複刃厚形削器も含まれている。在地で一般的に用いられるチャートを用いている。

5. 関東地方・中部高地

関東地方では角錐状石器を出土する遺跡は多数知られているのだが、大型品が非常に少なく、中小型品が主体となり、かつ角錐状尖頭器が少なく、複刃厚形削器が多い。石材は主に黒曜石・安山岩・チャートを用いるが、黒曜石素材のものが圧倒的に多く、中小型品と結びついている。茨城県・千葉県では、下野 - 北総回廊（田村 2006）を介して、珪質頁岩製のものが相対的に多くみられる。

東京都出山遺跡（第 V - 5 図 61）や丸山東遺跡（同 67）の角錐状尖頭器は、この地域では多くない大型かつ比較的対称性の高い角錐状尖頭器である。丸山東遺跡の接合例は、黒曜石製のやや厚手大型の剥片の両側縁から幅をすぼめる様に一挙に整形していることを示す。このほか、角錐状尖頭器を出土した主な遺跡には、東京都東早淵遺跡第 4 地点、同下戸塚遺跡第 1 文化層、同西之台 B 遺跡Ⅳ層下部、同鈴木遺跡都道南地点Ⅴ層、同自由学園南遺跡 1991 年調査地（同 64）、埼玉県中原後遺跡 2 次調査地、同中川貝塚 3 次調査地、神奈川県上草柳遺跡第 2 地点（同 62・63）、同用田大河内遺跡第Ⅵ文化層（同 58）、同代官山遺跡第

Ⅵ文化層、千葉県白幡前遺跡第2文化層ブロックS30(同65)、同取香和田戸遺跡第4文化層、同天神峰奥之台遺跡第Ⅲ文化層などを挙げることができるものの、大型対称形の角錐状尖頭器は決して多くない。

関東地方の角錐状尖頭器の全体的傾向として、ここまでに見てきた古本州島西南部の事例に比べると、左右の対称性が十分ではなく、作りが粗雑であることが指摘できる。相対的に小型品が多い。さらに、関東地方の角錐状尖頭器は、形態上は角錐状尖頭器の要件を満たしていながらも、加工が全周に及ばないような例が多い。側縁加工の一部が省略されているのであり、おそらく素材のサイズが十分ではないために起こる現象のようである。

なお、南関東東部の千葉県では、角錐状石器が遺跡内で多数出土する事例が、南関東西部に比べて少ないという特徴をもっている。

中部高地には事例が少ない。柳又遺跡C地点や、男女倉遺跡J地点(森嶋・川上編1975)、手長丘遺跡(諏訪市史編纂委員会編1986)、野辺山B5遺跡等があり、木葉形のものを中心とするという特徴をもつ。

6. 東北地方・北陸地方

この地域の角錐状石器は零細である。峠山牧場IA遺跡ブロック18の例は、角錐状石器の最北の例である(第Ⅴ-5図80)。このほか、山形県越中山遺跡K地点(同78)、福島県弥明遺跡、新潟県樽口遺跡A-KSE文化層(同79)、同正面ヶ原B遺跡、同かじか沢遺跡(同77)、東裏遺跡H2地点(同76)で角錐状石器が出土している。角錐状尖頭器はまれで、越中山遺跡K地点、正面ヶ原B遺跡でみられるだけであり、又小型である。このほかはすべて複刃厚形削器からなっている。瀬戸内型のような長狭大型品は現在のところ皆無である⁽¹⁾。

ところで、瀬戸内地方の国府石器群には幅広木葉形の角錐状尖頭器が伴うが長狭大型品がほとんどない。複刃厚形削器は多数ある。東北地方では瀬戸内からの人の移動がⅤ層上部並行期であるかⅣ層下部並行期であるかを特定することが難しかったが、人の移動を示す国府系石器群の角錐状石器が複刃厚形削器を中心とし、通常瀬戸内型角錐状尖頭器が伴わないことなどからみても、Ⅴ層上部並行期を中心としていた可能性が高い。とすれば、国府系石器群後に出現する杉久保石器群や瀬戸内系石器群の成立期は、Ⅳ層中部に成立する砂川石器群よりも、若干早かった可能性がある。

7. まとめ

以上の内容をまとめておく。第Ⅴ-4図・第Ⅴ-5図にみるように、角錐状尖頭器は関東地方以西の古本州島西南部で広く認められるが、顕著に発達するのは瀬戸内地方から九州東部(西北部東側の福岡県含む)にかけての地域である。これらの地域には瀬戸内型角錐状尖頭器というきわめて長狭かつ対称形のものが多く分布し、角錐状石器が刺突具としてよく発達していることを示す。逆に、関東地方、東海地方、四国地方南部、九州地方西南部という、古本州島太平洋沿岸では角錐状尖頭器に不整形なものが多く、また複刃厚形削器が多い傾向にあるといえそうである。ただし、東海地方西部の各務原台地周辺では、側縁加工が比

較的精緻で形態の対称性の高い大型角錐状尖頭器が多い。中国山地から山陰地方にかけては資料が少なく詳細は不明であるが、角錐状尖頭器自体を認めることはできた。

このように、角錐状石器は国府系石器群と異なって古本州島西南部に満遍なく広がる。しかし、両者の広域展開には明らかな相関も認められる。まず、瀬戸内型角錐状尖頭器の分布域が国府石器群の分布域と概ね重複している。瀬戸内型を含め、比較的形態の整った角錐状尖頭器が発達する地域（九州東部・東海西部）は、実は前章において瀬戸内からの人の移動があったと想定された地域、およびかれらから積極的な技術情報を受け取った人々がいた地域に相当することは重要であろう。逆に、関東地方、東海地方中・東部、四国太平洋側、九州地方西南部という、瀬戸内出自の人間がほとんど、あるいは全く進出していない地域では、角錐状尖頭器でも形態の不整形なものが多く、複刃厚形削器を中心とすることは指摘されるべきである。ただし、注意が必要なのは、東海地方中・東部、四国太平洋側、九州地方西南部では、中心的刺突具が角錐状石器であったにもかかわらず角錐状尖頭器の形態的洗練が進んでいないのに対し、関東地方では角錐状尖頭器自体は中心的刺突具とはいえない。むしろ、剥片製の大型切出形石器やナイフ形石器が中心的刺突具の役割を担う。

なお、瀬戸内出自の人々が進出している新潟県から北陸地方にかけての地域では角錐状石器が発達しないということは、上記の相関性を逸脱する現象としてここで注意しておきたい。

いずれにせよ、国府系石器群の広域展開にみられた地域差と、角錐状石器のそれとが明らかな相関関係を有することは興味深い。このような明瞭な相関を見せていることは、前章でも確認したように、刺突具形態の発達の地域差が各地域独自の環境条件と深く相関して立ち現れた現象であることを強く示唆するものであろう。

第3節 角錐状石器の通時的変化と技術構造上の位置

以上では時間軸を保留して、角錐状石器の分布および発達の地域差について述べてきた。そこで、この結果を通時的視点から見直すとどのようなことが分かるのか、簡単に検討しておきたい。すでに示した編年案に基づいて検討すると、角錐状石器の通時的変化の様相について、興味深い事実が明らかになる。通時的に地域間の比較をおこなっておく（第Ⅴ－5図）。

まずⅤ層下部並行期には、角錐状石器と明確に呼べるような資料が極めて少ない。関東地方でもⅤ層下部期の石器群に角錐状石器とは呼べないまでも、大振りの全周加工による石器が見られたが、角錐状石器というには素材が薄手である（柏ヶ谷長ヲサ遺跡第ⅩⅠ文化層）、整形加工が素材剥片背面側から施される（天文台構内遺跡Ⅲ第5文化層：第Ⅴ－5図72）などの差異も大きい。確実に角錐状石器と呼べる資料としては、静岡県の桜畑上遺跡BBⅠ下部出土石器群（同57）の複刃厚形削器や、九州西南部の桐木耳取遺跡第Ⅰ文化層（同7）にみられるものであろう。その他の地域のⅤ層下部並行期石器群には今のところ確実な例が認められない。関東地方のものが角錐状石器と系統的な関係をもっていたとしても、そしてまた、Ⅴ層並行期の細分ができなかった瀬戸内地方の角錐状石器が仮にⅤ層下部並行期のも

のであったとしても、この時期にはまだほとんど普及していない石器であると評価するべきであろう。

これに対し、V層上部並行期には明らかな角錐状石器が広く出現するようになるだけでなく、角錐状尖頭器が出現する。代表的なものでいえば、関東地方では千葉県一本桜南遺跡(同68)、東京都柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層(同69)、同葛原B遺跡第III文化層、東海地方では静岡県上ノ池遺跡第III文化層(56)、岐阜県日野1遺跡、九州地方では大分県五馬大坪遺跡(同23)、同一方平I遺跡北区、熊本県狸谷遺跡II石器群、宮崎県前ノ田村上遺跡II期石器群(同21)、同垂水第1遺跡、鹿児島県前山遺跡第II文化層(同5)をあげることができる。大型品は少ないが、角錐状石器が明らかに刺突具の一員として参入していることが重要である。特に鹿児島県においては、すでにこの時期から大型化の傾向が強い。

IV層下部並行期は、角錐状石器が広い範囲でもっとも発達した時期である。全体的にいうと、細身のものが増え、尖頭器が多くなる。遺跡数が膨大となるため、第V-5図には代表的な例のみ示す。古本州島西南部一帯において、他の器種とともに大型刺突具の位置を担うのであるが、関東地方～東海地方では大型刺突具としての角錐状尖頭器が少ないことは、述べてきたとおりである。

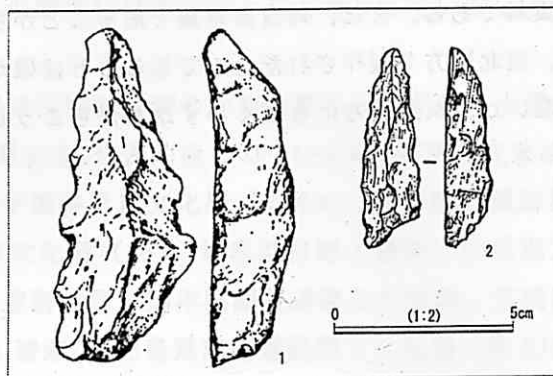
以上のことから、V層下部並行期に一部で関連資料が見られた角錐状石器は、V層上部において広域でしばしば認められるようになり、またこの時期に角錐状尖頭器と化していることが明らかとなった。角錐状石器は、V層下部並行期にはあまり重要な器種ではなかったし、尖頭器化するタイミングには各地で大きな時間差はなかったと思われる。刺突具としての角錐状尖頭器を含む角錐状石器は、IV層下部の時期になって広い範囲で時期を同じくして発達するが、そこには前節で述べたような地域差もある。角錐状石器の多くはIV層下部並行期に属するので、前節の地域差はほとんどこの時期の地域差を示しているとみなして大過ない。とすれば、国府系石器群がもっともよく認められる時期にやや遅れて角錐状石器の発達があったことになるのだが、地域性の単位は国府系石器群に見られたそれと強い相関を持っていたので、V層上部からIV層下部にかけて、各地で進められていた生態適応の地域的単位は共通したものであったと考えられる。そしてこの地域単位は多少の変動を伴いつつもその後の地域性の根本をなしていく。

したがって、これらの地域的単位ごとに資源環境を調べ、ここまでに明らかにしてきた石器製作の技術構造(刺突具と素材供給技術の基幹的關係)との対応関係とその背景を説明するモデルを構築することによって、後期旧石器時代後半期前葉に急速に進行した地域適応戦略の本質を明らかにできるものと考えられる。これが本論の目的であるので、最後に次の第VI章で取り組む。

註

- (1) 宮城県北西部にある薬葉原遺跡群の鹿原A遺跡では長狭対称形の瀬戸内型と呼びうる角錐状尖頭器が発見されていたが、現在ではこの遺跡は捏造遺跡であることが判明している(前・中期旧石器問題調査研究特別委員会2003)。ただし、この角錐状尖頭器は断面抜き取り資料である

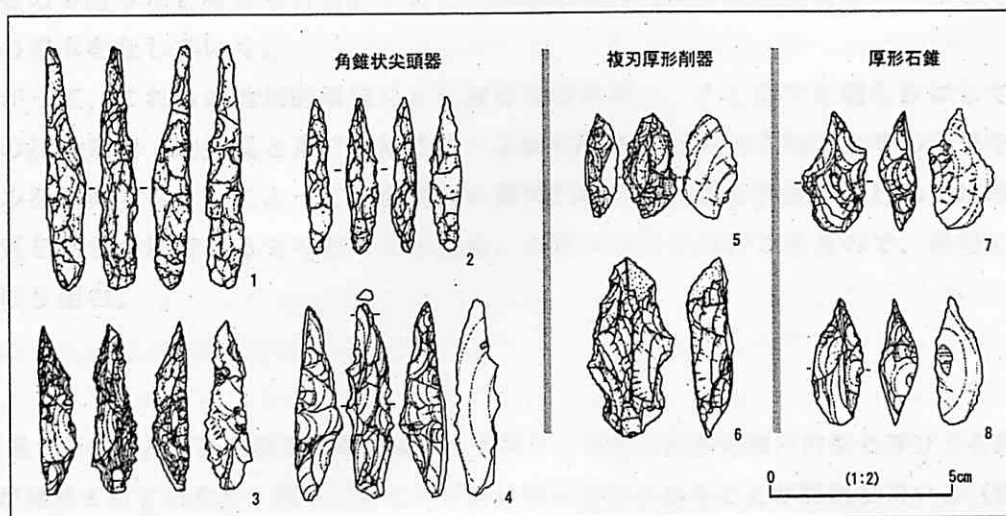
他の資料と違い、表採資料である。また、珪質頁岩製であることから、本来当遺跡になかったものであったとしても、東北地方で製作されたものであることは確かであろう。発見の事情を考慮してここでは扱わないが、東北地方にもごくわずかながらこうした形態の角錐状尖頭器が存在することを示している。



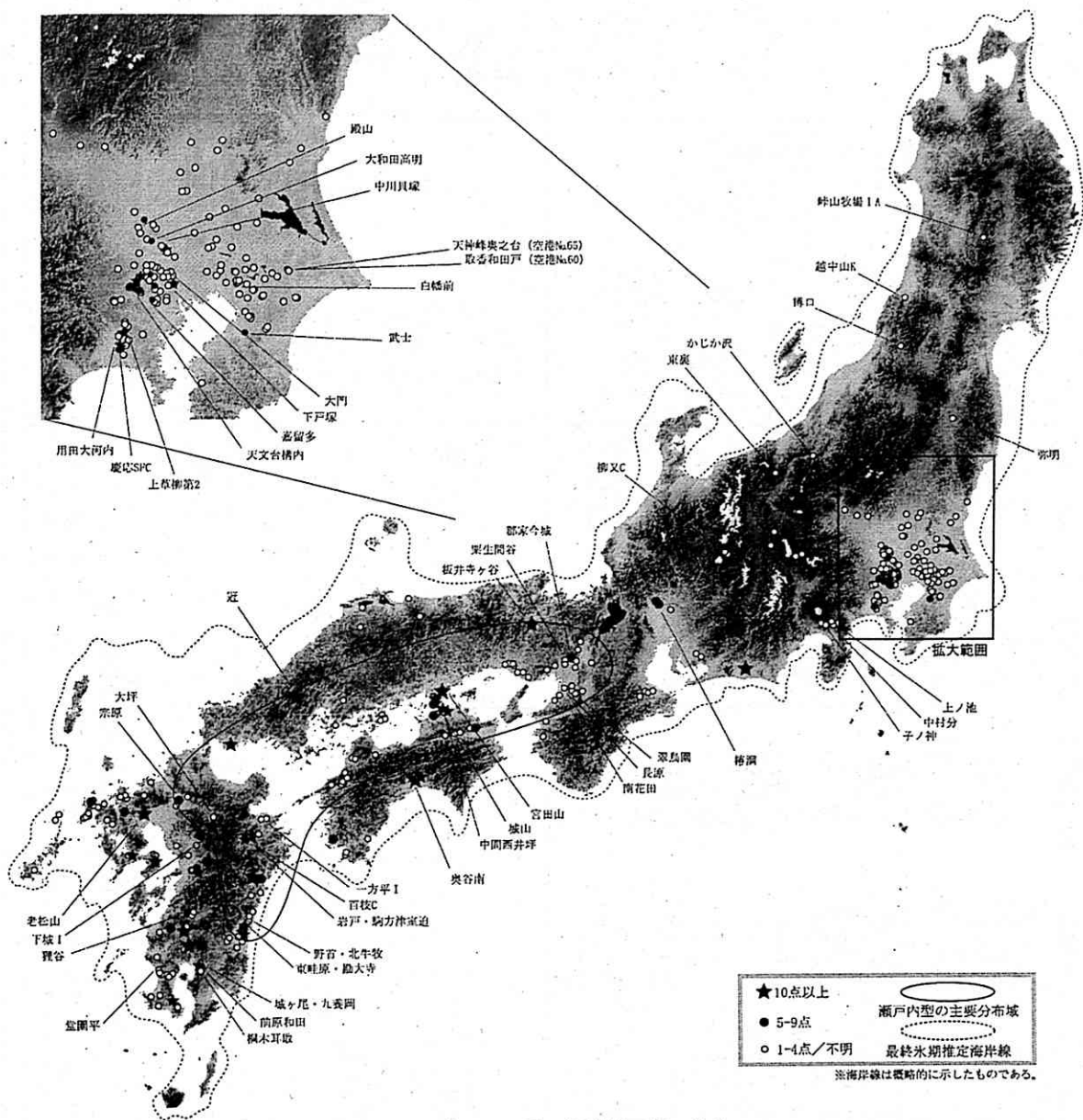
第V-1図 舟底様石器と角錐状石器

分類	第Ⅰ類A	第Ⅰ類B	第Ⅱ類A	第Ⅱ類B	第Ⅲ類A	第Ⅲ類B	第Ⅳ類A	第Ⅳ類B
加工	周縁加工	周縁加工	周縁及び裏面	周縁及び裏面	2面加工	2面加工	3面加工	3面加工
サイズ	大形	小形	大形	小形	大形	小形	大形	小形
断面形	台形	台形	台形	台形	三角形	三角形	三角形	三角形
平面形								

第V-2図 多田による角錐状石器の分類 (多田 1997)



第V-3図 本論での角錐状石器分類



第V-4図 角錐状石器の分布

第V-1表 瀬戸内型角錐状尖頭器の出土率

	A角錐状石器出土遺跡	B瀬戸内型出土遺跡	B/A瀬戸内型出土遺跡の割合
東北地方	5	0	0.0 %
関東地方	202	1	0.5 %
中部高地	6	0	0.0 %
東海地方東部	6	0	0.0 %
東海地方中部	4	0	0.0 %
東海地方西部	13	0	0.0 %
四国太平洋側	5	0	0.0 %
中国・山陰地方	4	0	0.0 %
近畿・瀬戸内地方	114	39	34.2 %
九州地方東北・東南部	54	18	33.3 %
九州地方西北部	65	10	15.4 %
九州地方西南部	27	2	7.4 %
計	505	70	—

九州地方

西南部

西北部

東北部・東南部

瀬戸内・中国・山陰・四国地方

近畿・瀬戸内

中国・山陰

四国太平洋側

東海地方

西部

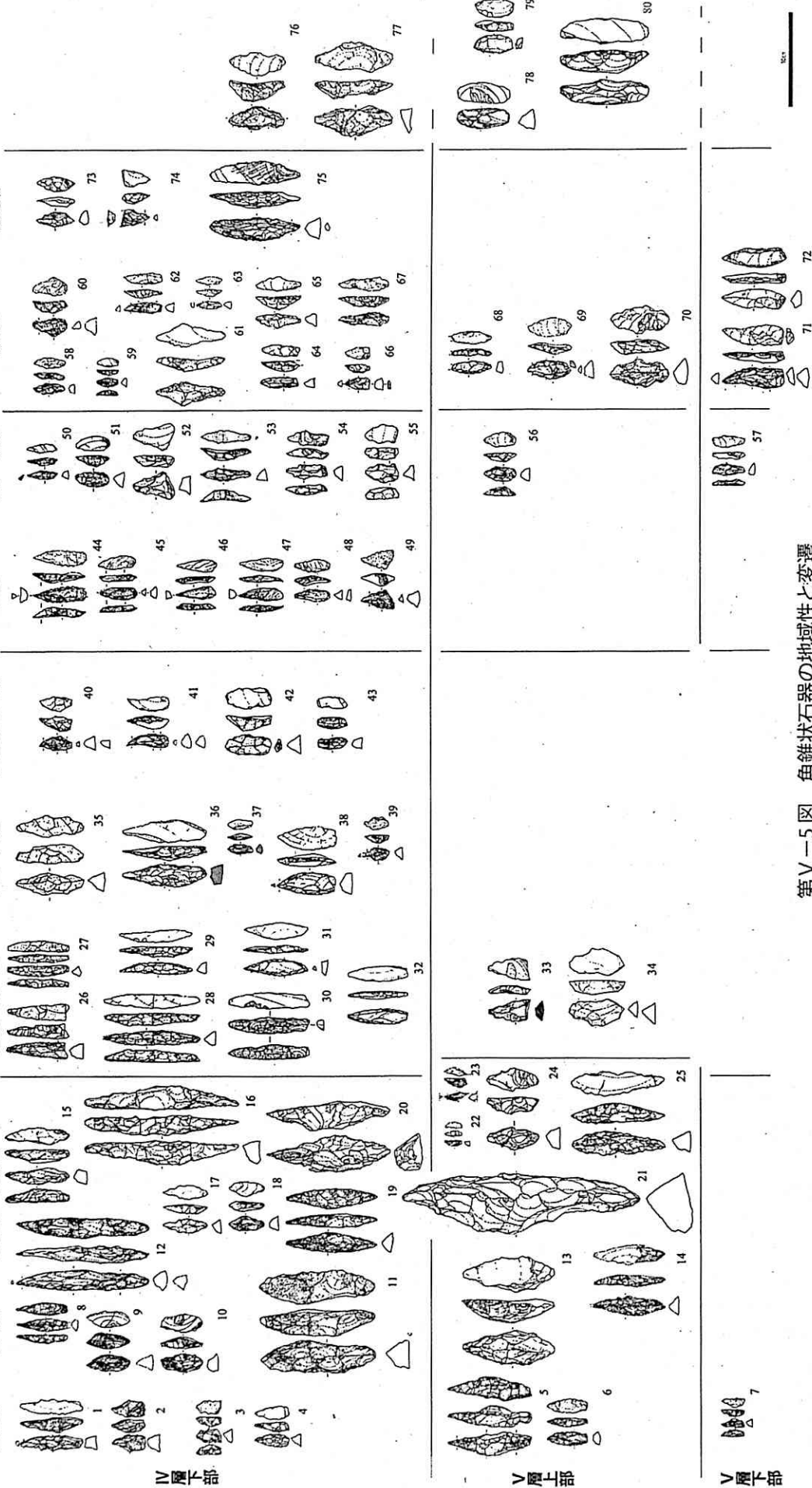
中部・東部

関東地方

南関東

北関東

東北地方



第V-5図 角錐状石器の地域性と変遷

- 1・2: 城ヶ尾・II文、3・4: 九雲岡、5・6: 前山・II文、7: 榑木江取I文、8: 下城山・I文、9・10: 西輪久道・B区上層、11: 老松山、12: 京原、13: 羽川谷口I区・2区、14: 隈・西小田13次、15・16・20: 中ノ道2、17・18: 助大寺
 19: 東田原2、21・25: 前ノ田村上・II期、22: 刈谷・II、23: 大坪、24 垂水I、26: 大洲、27 冠D、28: 中岡西井坪、29: 与島西方、30: 四谷台第5、31: 板井寺ヶ谷・上位文、32: 栗生岡谷・BL6、33: 郡家今城C、34: 粟島岡、35:
 上野中2、36・37: 原口・5期、38・39: 笹敷2、40・41: 奥谷南、42・43: 佐野橋目山、44~47: 榑岡、48・49: 寺田、50・51: 京見塚、52: 亀坂上2、53・54: 子ノ神・BUO、55: 市見代II・BUO、56: 上ノ池・II文、57: 祝畑上、
 58: 川田大河内・VI文、59: 登ヶ谷戸・3文、60: 下戸塚・2文、61: 山田、62・63: 上草柳2・II文、64: 白土赤園南1991・2文、65: 白土赤園S30、66: 高留多・2文、68: 一本坂南・6文、69・70: 柏ヶ谷最上サ・IX文、71: 柏ヶ谷最上サ
 ・X I文、72: 天文台嶺内山・5文、73: 伊勢崎II・I文、74: 今井三郎堂・III文、75: 宇都宮見崎高校、76: 東横H2、77: かじか沢、78: 越中山、79: 榑岡・A-KSE文、80: 神田夜場IA・BL18

第Ⅵ章 地域環境適応戦略の転換過程とその背景

第1節 ここまでの要約と問題設定

第Ⅲ章にて編年研究をおこない、古本州島における技術構造の通時変化・地域間変異を追究し、また、その変化のプロセスに深く関与していると考えられた国府系石器群、角錐状石器の広域展開現象について、第Ⅳ章と第Ⅴ章で詳しく論じてきた。本章では技術構造にみる顕著な地域性がどのようにして生じてきたのかについて、居住形態の変化にも注意しながら、地域環境適応戦略の観点から総合的に論ずる。

ここまでは何が、いつ、どこで、どのようにという点に焦点を当てて分析・記述することを中心におこなってきた。分析結果を踏まえ、最後に誰が、なぜ、という点に重点をおいて解釈を加えていく。後期旧石器時代前半期から後半期への移行期において、各地で起こっていた技術構造の変化が、人間集団の資源開発戦略のこういった側面を表しているのかを、居住形態の変化も考慮しながら解釈し、地域環境適応の進行過程をその背景から説明していきたい。

まず本節ではここまで個別に扱ってきた内容を要約し、以後の考察に備えておくこととする。第Ⅵ-1表は、通時的な技術構造の変化を追える地域について、地域差の形成過程をまとめたものである。

後期旧石器時代前半期から後半期への技術構造の変化は、広域で一致して生じた現象であった。その変化は、Ⅵ層並行期に初めてもっとも顕著に現れている。これを端的にいうと、基本的に前半期を通じて認められた、石刃製のナイフ形石器・尖頭形石器と、剥片製の台形様石器（次第に切出形石器・剥片製小型ナイフ形石器に置換）からなる二極構造が、ナイフ形石器・尖頭形石器の内部での大型石器・小型石器という二項性からなる技術構造へ変換されたということになる⁽¹⁾（佐藤 1992）。

地域性については次のようにまとめられる（第Ⅵ-1表Ⅵ層並行期）。古本州島東北部は前半期からの変化が比較的少ない地域である。ここでは尖頭形石器の継続的発達という地域性がある。古本州島西南部ではナイフ形石器の大小二項性が技術構造の特徴である。大小二項性のうち、大型刺突具は石刃技法ないし縦長剥片剥離技術が担うことが通常であるが、小型石器については縦長剥片剥離技術や横長・幅広剥片剥離技術が担っており一定しない。このなかで、近畿・瀬戸内地方だけは、横長剥片剥離技術が大型刺突具の素材をサポートしており地域差を呈する。さらに、古本州島西南部のうち関東地方と、古本州島東北部では大型刺突具の素材供給として石刃技法が依然発達しているが、それ以外の地域では石刃技法の発達が弱く、素材供給に見る上記の二項性は緩やかである。なお、この時期の大型刺突具は、東海以西の地域で発達が弱い。Ⅵ層並行期にはこうした地域性が認められる。古本州島東北部と西南部の地域差が顕在化し、固定化する。

V層下部並行期についても、技術構造上の地域性の範囲にあまり大きな変化はない（第VI-1表V層下部並行期）。他方、九州地方西南部・東南部では剥片製小型ナイフ形石器の発達が見られず、台形様石器・切出形石器が小型石器の位置を占めており、地域差を示す。また剥片尖頭器がAT災害を契機とする九州固有の事情によって導入されたこともこの地域差に拍車をかけている（第III章）。近畿・瀬戸内地方ではV層並行期の細分ができないものの、台形様石器が存在しないことは確かであるので、VI層並行期の技術構造を引き継いでいるらしい。が、素材供給技術が特殊化して大型の国府型ナイフ形石器製作と結びつき、国府石器群が成立したことで、より地域差を強めることとなった。

ところが、V層上部には、古本州島西南部を中心に、各地の技術構造に大幅な入れ替え、組み換えが生じて多様化を遂げる（第VI-1表V層上部並行期）。素材供給技術は、古本州島東北部では地域差を持ちつつも石刃モードが継続的に発達しているが、対照的に同西南部では剥片モードが発達する。それとともに、大型刺突具・小型石器という刺突具の大小二項性が継続しているものの、大型刺突具・小型石器の両項の構成要素が豊富になっていることが特徴で、技術構造の地域差を際立たせている。特に各地の大型刺突具は、古本州島東北部奥羽山脈東西で尖頭形石器（・有肩尖頭器）、新潟県から北陸地方では尖頭形石器・二側縁加工ナイフ形石器・国府系ナイフ形石器、関東地方・東海地方東部では主に縦長剥片製ナイフ形石器、東海地方西部では国府系ナイフ形石器と縦長剥片製ナイフ形石器、瀬戸内地方では主に国府型ナイフ形石器、九州地方西北部では形態の崩れた剥片尖頭器と縦長剥片製ナイフ形石器・国府型および国府系ナイフ形石器、九州地方東部では縦長剥片製ナイフ形石器と角錐状尖頭器、形態の崩れた剥片尖頭器、九州地方西南部では縦長剥片製ナイフ形石器と形態の崩れた剥片尖頭器、角錐状尖頭器となる。素材供給技術と器種との結びつきが多様化し、極めて細かな地域差を見せている。V層下部並行期までの地域性の中に、さらに細かな地域性が生じ、地域性がはっきりと階層化を遂げるのがV層上部並行期であるといえよう。

この構成要素の多様化は、①瀬戸内に居住していた国府石器群の荷担者が、小規模でながら広域に移住したことによって、各地にそれまでになかった新しい技術的情報が伝播したこと、②また同時に、おそらくそうした地域社会間をめぐる人の移動の活発化が、角錐状石器の技術情報をきわめて急速に伝播したこと、③さらに、ある石器がそれまでとはまったく異なる機能的位置を占める現象（機能転化）が広く起こったことによって生じたものと考えられる。③の例としては、角錐状石器の尖頭器化（九州地方・瀬戸内地方・東海地方・関東地方）、切出形石器の大型刺突具化（関東地方）、国府型ナイフ形石器の小型刺突具化（九州地方東部）、両面調整尖頭器の出現（九州地方南部）などがその代表である。

IV層下部並行期には前時期の細かな地域性を引き継ぎ、地域によってはさらに細分化を遂げる（第VI-1表IV層下部並行期）。それと同時に、IV層下部並行期の多くの地域では、V層上部並行期において極度に多様化した刺突具と素材供給技術の変異幅が縮小する傾向にある。地域適応の進行に応じて、資源構造の制約を受け、多様化した技術に取捨選択・整理が働いたものと考えられる。

この時期の技術構造差を、大型刺突具の地域性に注目して整理しておく。古本州島東北部

ではⅣ層下部並行期を細別することができなかった。しかし、後続する時期の特徴から、奥羽山脈東西では依然として尖頭形石器が大型刺突具の位置を占めていただろう。また、第Ⅳ章で述べたように、仮に新潟県でやや早く杉久保石器群が成立していたならばこの地域でも尖頭形石器が、同じ理由で北陸地方では横長剥片製ナイフ形石器が、関東地方では切出形石器を中心に横長剥片製ナイフ形石器と角錐状尖頭器が、東海地方東部ではおそらく角錐状尖頭器が、東海地方西部では角錐状尖頭器・横長剥片製ナイフ形石器が、瀬戸内地方では角錐状石器と国府型・国府系ナイフ形石器が、九州地方西北部では角錐状尖頭器や国府系ナイフ形石器が、九州地方東北部・東南部では角錐状尖頭器・切出形石器が、九州地方西南部では角錐状尖頭器が、主な大型刺突具の位置を占める。

本論の目的に照らして、設定・考察すべき具体的問題は次の三つである。

- ①特にⅥ層並行期とⅤ層上部並行期を中心に、広域で連動しておこる顕著な技術構造の変動過程の背景的要因はなにか。
- ②技術構造の広域連動的変化は、各地の人間集団による地域適応戦略のどのような変化を表していると考えられるか。
- ③変動過程において、国府系石器群や角錐状石器の広域展開に示される技術情報の伝播がどのように影響を与え、技術構造の地域差は適応上のどういった地域事情を示唆するのか。

まず①を明らかにするために必要な、後期旧石器時代前半期から後半期への環境変化に関する研究をまとめ、②・③の問題にアプローチしたい。

第2節 後期旧石器時代前半期から後半期への環境変化

Ⅴ層上部並行期の技術構造の変化は、極めて広い範囲で連動して起こったものであり、その背景を局地的な要因に帰することは出来ないと考えられる。広域で一致して起こったと予想されるこの時期の自然環境の変化とはどのようなものであったかをまとめておきたい。ただし、当該時期に起こった古環境変化は、まだ本論で提示した石器群編年ほどのタイムスケールでは明らかにされていない。したがって、技術構造の変化を環境変化と関連づけて論ずるにあたっては、両者の対応関係を若干大胆に推測しておこなっている。今後、当該時期の環境変化がより詳しく明らかにされ、より細かな議論が可能となっていくことを期待したい。

本論の冒頭でも述べたように、後期旧石器時代前半期から後半期の移行期は、この酸素同位体ステージ (OIS) 3 から同 2 への移行期に相当している。第Ⅵ-1 図は、グリーンランド氷床ボーリングコアの各層準の酸素同位対比変動から得られた気候変動サイクル (ダンスガード・サイクル) と、日本海深海底堆積物の暗度変化とを対比したものである。この暗度変化は堆積物中の珪藻化石種変化と密接に関連していて、これが海水準変動を反映することがわかっているので、日本海周辺域においても概ねダンスガード・サイクルに同調した突然かつ急激な気候変動が、最終氷期の気候の特徴であった (多田 1997)。しかし、こうした急

激な気候変動を基調としながらも、相対的な温暖期、寒冷期が区別されており、OIS3 は最終氷期中盤の温暖期、OIS2 は最終氷期最寒冷期 (LGM) と評価されている。

さて、この気候変動期には、各地で頻発していた火山活動が深く関わりながら生態系の顕著な変化が生じたことが指摘されている (辻 1985)。このうち、特に古本州島の環境変化において重要な影響を与えたのが、始良火山の噴火による始良 Tn 火山灰 (AT) の降灰であった。始良火山の噴火は、その噴火による火砕流そのものが与えた被害は南九州地方を中心として極めて甚大なものであったが、本論の視点から特に重要なのは、それが九州地方にとどまらない広範囲において急速な植生変化を引き起こしたと考えられる点である。

日本列島各地で AT の降灰前後の植生変化を調べた辻誠一郎の研究 (辻 前掲) によると、始良火山の破局的噴火は、最終氷期最寒冷期の端緒にこそならなかったが、寒冷化と植生の急速な変化を促進したとされる。寒冷化自体は AT 降灰に先立って開始しており、針葉樹の分布拡大がすでに始まっていたが、爆発的噴火を契機として、一瞬にして針葉樹林時代を迎えたと評価されている。この影響は、それまでコナラ亜属主体の森林植生が卓越していた古本州島西南部で特に顕著であった (辻・小杉 1991)。突発的な火山噴火による気温・気候・地表環境の変化が「生態系の秩序を攪乱し、社会的な非平衡と生態的順位の交代を誘導することによって、生態系の変化の方向性を促進したためである」(辻 2004)。これは生態系史における構造変動ということができる (辻 2008)。ただし、古本州島北端の津軽地方では、火山灰の給源から遠く隔たっていたことと、以前より針葉樹林が成立していたことから、森林植生には大きな変化が生じなかった (辻・小杉 前掲、辻 1991) とされることにも注意しておきたい。

こうした研究を参照すると、AT 直上にあたる V 層並行期の時期とは、AT 降灰によって植生環境の急速な変化が促進されたといわれる時期におおむね一致するとみてよいのではないだろうか。

さらに、最近の古動物相の研究では、酸素同位体ステージの変化に対応した動物群の変化が明らかになり始めている。河村善也(1998)により、後期更新世後半の古本州島の動物相は、基本的には約 13 万年前あるいはそれ以前に日本列島に渡来していた動物たちが、列島の中で絶滅や固有化していく過程として捉えることができるとされてきた。本論の研究に関連する後期旧石器時代には、大きく二つの動物群が重要となる (高橋 2007・2008)。すなわち、マンモス動物群とナウマンゾウ・オオツノシカ動物群である。本州から九州地方にかけての地域では、温帯・森林棲のナウマンゾウ・オオツノシカ動物群が基本的には広がっていたが、気候変動および氷河性海水準変動に対応した動物群の南北移動を背景として、ある時期には北方からのマンモス動物群の構成種の移住が起こったと考えられている⁽²⁾。この動きは、当然、本論が問題とする最終氷期最寒冷期にも顕著に起こったと推測されており、その移住先は本州中部岐阜県にまで及んでいたとされるが、数少ないバイソンやヘラジカの化石骨が主に分布するのは関東地方以北である。

さらに、狩猟戦略と関連して重要な、本州における大型獣の絶滅時期についても、高橋により興味深い説が提示されている (高橋 2008)。北方系・南方系の両動物群の大型獣は、マ

ンモスゾウ・ナウマンゾウ・オオツノシカ・ヘラジカであるが、岩手県大迫町風穴遺跡からでたゾウ類の大腿骨のAMS 炭素年代として $18,140 \pm 60$ $^{14}\text{CyrSBP}$ という年代が得られているほかは、ナウマンゾウには $23,000^{14}\text{CyrSBP}$ を下る年代はほとんどないという。オオツノシカは最新で OIS1 まで確認されているが、基本的にはナウマンゾウと同様の盛衰を辿ったと見られる。また、ヘラジカ等北方系マンモス動物群構成種の本州への移住は最終氷期の最寒冷期であろうという理由から、およそ $20,000^{14}\text{CyrSBP}$ 前後と予測されているが、詳細はわかっていない。年代値から見ると、大型動物は AT の降灰以後しばらくして急速に減少していったことは確かなようである。

こうしてみると、V 層～IV 層下部並行期という時期は、AT 降灰によって促進された急速な針葉樹の増加が起こっていた時期であり、なおかつ大型動物が古本州島に展開していた最後の時期に、大枠で相当しているのではないだろうか。直後の IV 層中部の砂川石器群やその並行期になると、各地で刺突具が薄手となるだけでなく、相対的に小型化を遂げ、重厚な大型刺突具が姿を消していくが、これが先の動物相の変化と対応した現象であることは注目されてよいだろう。したがって、V～IV 層下部並行期における各地の人間集団は、地域差はもつであろうが、植物相の変化に対応して資源開発戦略の見直しを進めつつ、それ以前のように大型動物狩猟を基本としながらも（佐藤 1993）、次第に中小型動物への依存度を高めて、前半期よりもはるかに狭い地理的範囲への地域適応を志向していたものと推測される（佐藤 2008）。これらの推測は、地域固有の技術構造の成立や石器のスタイルの地域分化という、ここまでの検討結果からも支持できる。そして、本論の検討では、地域差が顕著となったのが V 層上部であるので、適応形態の大幅な変化が起きていたのはこの時期であったと考えられる。

また、地域固有の技術構造の成立や石器のスタイルの地域分化が、小地域単位での緊密なバンドの相互交流を基本とした地域社会・地域集団の成立を示しているとすれば、それは同時に地域間での社会間ネットワークの発達をも促したと予想されよう。著しく変動する気候条件下での予測性の低い資源の利用を基本としつつも、小地域内で安定した生存を保障するためには、地域を越えた人や情報の交換体系（Safety net）が不可欠だからである。第 IV 章で論じたような、国府系石器群の広域展開に示される瀬戸内からの人の移動や、第 V 章で分析した角錐状石器の広域伝播が、地域差の顕著となる V 層上部を中心に認められたことは、まさにこうした社会変化を背景に起こったことを示そう。このように、現在の視点および分析結果から見ても、佐藤により最初に提出された予測（後半期における地域社会の成立と同盟関係の発達：佐藤 1992）は概ね正しいと評価される。

さて、では VI 層・V 層上部並行期を中心とする技術構造の再編および地域化は、具体的に各地のどのような適応戦略の変化・地域化を表すのであろうか。大型動物狩猟への依存度を高めて広域回遊型の居住・生業システムを構築していた前半期とは異なって、減少しているが貴重な大型動物狩猟を組み込みつつ、小地域での中小型動物を中心とする生業形態を維持することを志向した後半期前葉において、各地でどのような適応形態の再編がおこなわれたのか、という問題である。最後にこの点について考察を加えていきたい。

第3節 地域環境適応の進行過程

1. 技術構造の地域差とその背景：Ⅵ層並行期

二極構造が解体して生じたⅥ層並行期の技術構造は、古本州島東北部と西南部とに大きく分立した地域差を呈する。ただし、西南部のうち近畿・瀬戸内地方には、さらに細やかな技術構造上の地域差（大型刺突具：横長剥片製ナイフ形石器、小型石器：縦長～横長剥片製ナイフ形石器・切出形石器）がみられる。これは主たる石材を、より横剥ぎに適した安山岩にのみ依拠せねばならなかったという特異な石材条件に規制された、技術伝統の歴史的帰結と考えられる⁽³⁾。

最も重要な点は、古本州島東北部では石刃モードの一層の発達による石刃モード内部での大小二項性（石刃モード巡回群）の発達を見たこと、他方、古本州島西南部ではⅦ層並行期に比べて石刃モードが弱まり、剥片モード内部でのナイフ形石器の大小二項性が強まったということである。例外といえそうなのは関東地方であり、ここではⅥ層並行期にも石刃モードの大型刺突具が継続的に発達していた。

この地域差は、石材環境の異なりといったローカルな要因では説明できない。むしろ注目されるのは、古本州島東北部と西南部という地域差が、大局的な植生環境差が指摘されている地域（塚田 1984、小野・五十嵐 1991、辻 2001）によく対応しているという事実であろう（第Ⅳ－14図）。Ⅵ層並行期に限定した古植生環境を知ることができるようなデータはほとんどないが、先の辻らの植生変化説（辻・小杉 1991）から推測するならば、古本州島東北部では針葉樹林が卓越する北方的な植生、同西南部では広葉樹林を交えたより南方的で温暖な植生が展開していたと考えられ、大局的な自然環境差があったようである。

古本州島東北部における石刃モードは、Ⅵ層並行期に周縁型石刃剥離技術となり、得られる石刃を尖頭形石器をはじめとする各種石器製作に利用する方法が確立した。それ以前のように小型剥片石器モードによる臨機的な石器製作が行われなくなったと同時に、周縁型石刃石核の管理的消費によって石材の計画的・節約的利用が行われはじめたことは、石材の補充機会を減らした自由度の高い狩猟活動を可能としたと考えられる。上記の環境条件を考慮するならば、このような高コストの計画的な石器製作技術を基盤とした技術構造の成立は、広域に移動し狩猟機会が限定される、獲得難度の高い大型獣狩猟への傾斜を強めた、技術の信頼性システム化を示すものであろう。古本州島東北部では前半期より針葉樹林の発達がみられ、後半期にかけて植生上の変化が乏しかった可能性があるという指摘（辻 1990）がある。これが正しければ、Ⅵ層並行期の技術構造の変化とは、それまでとは異なる適応戦略への急速な転換というよりも、前半期からの狩猟戦略の継続的発達と強化を示している可能性が高い。

古本州島東北部では、Ⅶ層並行期までは伝統的な二極構造の発達と強化が顕著に推し進められたことが、Ⅶ層下部並行期での台形様石器Ⅱ類の発達・規格化と、Ⅶ層上部～Ⅵ層並行期での狸崎型・池のくるみ型の特異的発達等に象徴的に反映されている。しかし、大型獣

狩猟へのシフト（佐藤 1993）を背景とした石材の補充頻度の低下という一貫した志向性が前半期を通じてあったと仮定してよければ、これを石材浪費的かつ汎用性に乏しい小口面型石刃剥離技術および小型の横長～縦長剥片剥離技術を基盤技術とする二極構造で追求するには、石材消費戦略の上で限界があったことが予想される。Ⅵ層並行期における周縁型石刃技法を中心とした技術再編はこの結果として生じたのであろう。

Ⅵ層並行期を介して、狩猟戦略の転換というよりもむしろその強化が志向されたという理解は、実はサハリン～北海道半島の北海道地域における同時期の人間行動についても指摘されている（佐藤 2003b）。古本州島東北部は、細石刃石器群の発達するサハリン～北海道半島の北海道地域とは技術構造こそ大きく異なるが、適応戦略の変化の方向性には共通する部分があったようである。

これに対し、古本州島西南部では、Ⅵ層並行期には前時期を特徴づけた石刃製ナイフ形石器が、下野～北総回廊を通じて同東北部と連結されている関東地方を除いて減少し、少数の薄手石刃・縦長剥片製ナイフ形石器に、剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器が伴う技術構造へと変化する。近畿地方を除いて、Ⅶ層並行期において九州地方から中国山地、東海地方東部にまで認められた中大型の石刃剥離技術も後退する。剥片モードへの移行は、石刃核の管理的消費による計画的かつ信頼性の高い技術とは対照的な、保守性重視の技術への変化が起こったことを示すのであろう。古本州島西南部は同東北部に比べて相対的に温暖で植物質食糧の利用可能性が高い環境であり（鈴木 1988）、この時期以降に礫群等の回帰的行動を示す設備も発達する地域（保坂 1986）である。以上のことから考えると、西南部にはまだ大型獣は存在していたが、植物質食糧の利用可能性もあったことから、行動範囲の狭い中小型獣狩猟への依存度を高める方向を選択したと考えられる。

Ⅵ層並行期はこのように、古本州島東北部と西南部で適応戦略の方向性に顕著な違いが生じた時期であった。

2. 技術構造の地域差とその背景：Ⅴ層上部～Ⅳ層下部並行期

続くⅤ層下部並行期には地域性の範囲に大きな変化は見られない。しかし古本州島西南部では何らかの理由で石刃製の大型刺突具が再び増加し、技術構造が変化する。資料的制約から、東海地方中・西部や近畿・瀬戸内地方の同時期の様相は詳しく知ることはできない。関東地方の場合、この現象は前時期からの連続的進化で容易に説明できる。しかし、それ以外の地域ではこの急激な変化は理解が難しい。東海地方東部では、現在の資料による限りⅥ層並行期に石刃モードの後退が顕著であるとみられたにもかかわらず、Ⅴ層下部並行期には石刃製大型刺突具が復活する可能性が高い。九州地方でも、Ⅵ層並行期の大型刺突具の急減に反し、Ⅴ層下部並行期で剥片尖頭器の突然の出現・盛行をみる。とくに九州地方では、石刃製の大型刺突具（剥片尖頭器）が、台形様石器と結びついて、二極構造ともよべる技術構造が成立するが、後半期に発達する搔器や削器を多数伴う点では異なる。

古本州島西南部Ⅴ層下部並行期における、この石刃製大型刺突具の復活、および二極構造的な技術構造の復活という現象の背景について、本論では、辻（1985・1991 など）の理解

に依拠して次のように予測しておきたい。前述のとおり、古本州島西南部ではⅥ層並行期において大型獣への依存度を低くし、中小型獣および植物質食糧を含めた地域資源の多角的開発という方向に、不完全ながらむかい始めていたとおもわれる。しかしながら、ATの降灰を契機とする生態系攪乱、急速な針葉樹林化という事態に遭遇し、一時的にそうした方向性に歯止めがかかった可能性がある。それは、適応戦略の諸方策（動物資源・植物資源の利用比重の変更、新しい資源の開拓、および獲得・消費技術）のシステム化が不十分であった時期に、生態系の秩序攪乱を背景とした、獲得対象とする動植物資源の変更・再選別を余儀なくされ、一時的に旧来の適応形態に回帰した結果と考えたい。しかしながら、後述するように、Ⅴ層上部～Ⅳ層下部における礫群の急増や小地域の周回的移動による多角的資源開発の確立過程をみる限り、これは一時的な対応であって、再び前半期のような適応形態にもどることはなかった。適応戦略のシステム化の方向性はⅥ層並行期にすでに転換していたからである。Ⅴ層下部並行期の地域性の範囲がⅥ層並行期とほとんど変わらないのは、地域適応の進行が一時的に阻止されたことを示している。

さて、こうした経緯もあり、技術構造の地域化という点において、最もはっきりした変化はⅤ層上部並行期におこった。この時期の地域差は、Ⅵ層並行期とは異なってさらに細かい地理的単位間で認められる。概ね、山脈や山地に区切られた大きな平野、および大河川流域や盆地群という、ひと連なりの地形単位ごとに固有の技術構造が成立している。次に見ていくように、そうした範囲の石材分布構造に適応した石材消費戦略がとられるようになったために地域差が顕著となったようである。地域化の一方で、地域を越えた特定要素（国府系石器群・角錐状石器）の広がりも確認されているが、これらは矛盾する現象ではなく、地域化と表裏の関係にある地域社会間関係の再編成（同盟関係の強化）を象徴する現象といえる。

以下では各地域単位ごとに、技術構造の変化からみた適応戦略の変化のプロセスを見ていきたい。ただし、遺跡分布・遺跡間システムを考慮しての居住形態論にまで踏み込んだ議論をおこなえるのは、発掘調査遺跡数の豊富な関東地方および九州地方東南部に限られる。そこで、関東地方・九州地方東南部に関する考察に基づいて当該期の技術構造変化に関するモデルをたて、古本州島西南部のそれ以外の地域については、このモデルを参照枠として予測的な説明を提示することとしたい。また、古本州島東北部では特に奥羽山脈東西の地域でⅤ層～Ⅳ層下部並行期の細別が困難であったので、一括して取り扱わざるを得ない。

(1) 古本州島東北部

古本州島東北部では、奥羽山脈の東部と西部、そして新潟から北陸地方において地域差が顕在化した。奥羽山脈の東西の地域差は、Ⅶ層並行期からしばしば認められたが、Ⅴ層並行期にはよりはっきりとした差が生まれる。奥羽山脈西部では、良質の珪質頁岩の存在を背景にⅥ層並行期からの技術構造すなわち石刃モード巡回群が継続しているのに対し、奥羽山脈東部の北側では〈石刃モード（周縁型石刃剥離技術）＝中大型尖頭形石器／小型剥片モード＝基部加工尖頭形剥片石器・台形様石器・切出形石器〉という技術構造が成立する。剥片モードでは相対的に粗悪な玉髓なども用いられ、石刃モードとの石材の違いがある。遺跡分布

や遺跡間システムについてはほとんど言及できる状況にないが、奥羽山脈西部において特定地点への遺跡の集中（最上川中流域新庄盆地：乱馬堂遺跡・南野遺跡・横前遺跡・新堤遺跡）という現象が認められることは、遺跡が散在する前時期までと比べて大きく異なる特徴である。いまのところ、奥羽山脈東部北側には遺跡数も少ないので、同様の変化が起こるのかどうかははっきりしない。

以上の点から考えると、おそらく奥羽山脈西部では前時期から続く信頼性の高い石器製作技術に基づいて、特定の居住基地の設営とそこからの比較的長距離におよぶ狩猟遠征という生業・居住形態による地域適応が確立したと考えられる。こうした適応形態から想定されるのは、おそらく少数種の中大型獣狩猟に特化した生活であろう。他方、奥羽山脈東部北側では、大型刺突具製作技術では西部と大きな違いがないが、一定の剥片石器モードが併用されていることからみて、西部ほどには特殊化した適応形態が取られていなかったのではないだろうか。とはいっても、両地域における国府系石器群の不在に示される、瀬戸内出自集団からの技術情報の非受容は、剥片モードによる特定石器（国府型ナイフ形石器）製作に特化した技術では、上記の行動戦略を担保できないことに起因するものと考えられる。すなわち、汎用素材である石刃や、それを生み出す石刃核の管理的運用という技術デザインには、特定石器製作のために特殊化した技術は適格的ではなかったであろう。

なお、この時期の奥羽山脈東部南側の様相はよくわかっていないが、後の時期には非常にはっきりとした地域差が生じているので、この時期から地域差が生じていたことは確かである。

新潟県から北陸地方にかけての地域は、さらに異なる様相を呈する。これまでの検討の結果、V層下部並行期には奥羽山脈地域と同様の石刃モード巡回群が成立していたが、国府系石器群の出現に示されるように、異なる技術の受容が進められた結果、奥羽山脈地域との地域差が顕在化していくと考えられた。この地域は、古植生分布では西南日本に共通する要素が多く（第IV－14図）、さらに、良質安山岩原産地も点在している（第IV－13図）。このように、近畿・瀬戸内地方と類似した技術の適用が可能な条件が整っていたことから、瀬戸内出自集団の移住が比較的活発に進められたと考えられる（第IV章）。

こうして起こった技術交流の結果、〈石刃モード（周縁型石刃剥離技術）＝薄手大型～小型刺突具、剥片モード（横長剥片剥離技術）＝厚手大型～中型刺突具〉という技術構造が形成された。まだ居住形態等の詳細は明らかにしえないが、石刃モードが周縁型石刃剥離技術からなり、節約的な石器製作技術を担っていたのに対し、剥片モードでは樽口遺跡 A-KSE 文化層にみるような遺跡内での浪費的石器製作が多種類の石材によっておこなれている。両モードは厚手・薄手刺突具の作り分けのためにも並存していた可能性が高いが、厳密に作り分けられているわけでもない。こうしたことを考慮すると、剥片モードは石刃モードでの石器供給の不足を適宜補完する役割（厚手刺突具の製作や、刺突具不足時の臨機的製作）という機能的位置づけにあったと考えられる。維持コストの高い石器製作技術（周縁型石刃剥離技術）を採用した高信頼性の技術構造と計画性の高い生業・居住形態からなる奥羽山脈地域とは異なり、コストを減らして保守性をより重視した技術構造へとシフトしていることは、資

源獲得の方法等、行動戦略にも相応の異なりがあったことを示している。奥羽山脈のように特定の動物資源へ特化するのではなく、相対的に幅広い資源開発戦略がとられていた可能性が考えられる（森先 2008a）。この特徴は続く杉久保石器群にも指摘できる（Iwase and Morisaki 2008）。ひとことでいうと、古本州島東北部の中では最も古本州島西南部的な適応形態が取られていたことになるだろう。

(2) 古本州島西南部

続いて、古本州島西南部をみていきたい。基本的には特定少数資源の利用に特化することで特徴づけられる古本州島東北部とは異なり、同西南部では、適応戦略の急速な方向転換が確認された。技術構造の変化を比較的詳しく追うことが出来るのは、関東地方（ここでは西部を扱う）、東海地方東部、近畿・瀬戸内地方、九州地方東南部、九州地方西南部である。まず関東地方・九州地方東南部を検討する。

・関東地方

古本州島西南部のなかではやや特異な技術構造（大型刺突具の継続的発達および周縁型石刃技法の持続）を有していた関東地方では、V層下部並行期でも石刃モードが維持され、黒曜石や珪質頁岩という遠隔地の優良石材をもちいた石刃核リダクションによる広域移動型の居住形態がとられていた（角張 1991、佐藤 1996・1997）。しかし、V層上部並行期に至り石刃モードは急速に後退する。この傾向はIV層下部並行期にも継続する。

関東地方西部を中心に見ると、V層上部並行期には周縁型石刃技法による刺突具・各種石器の供給が行われなくなり、臨機的な縦長剥片剥離技術や横長剥片剥離技術による石核消費が発達している。相対的に大型の刺突具は縦長剥片製一側縁加工ナイフ形石器であり、形式的にも前時期からの系統的連続性が追える。幅広剥片や横長剥片は中小型のナイフ形石器・五角形の基部加工尖頭形剥片石器・切出形石器に素材を供給する。特に、中小型ナイフ形石器の形態が多様化し、基部加工尖頭形剥片石器や切出形石器が著しく増加するなど、器種組成が豊富となる点に特徴がある。瀬戸内からの人の移動はなかったが、この時期の社会間ネットワークを通じて国府型ナイフ形石器がもたらされ、石器製作には国府系ナイフ形石器として組み込まれる。ただし、国府系ナイフ形石器は中小型ナイフ形石器のごく一部を構成するに過ぎない。角錐状石器も前時期に導入されていた可能性があり、さらにこの時期になって尖頭器の一員に機能転化しているが、その機能的位置は国府系ナイフ形石器同様で、発達する様子をみせないことが特徴である（森先 2007a）。続くIV層下部並行期には、縦長剥片製の刺突具が減少かつ小型のものを中心とするようになり、それまで小型石器の位置にあった切出形石器が大型刺突具化するなど、顕著な機能転化を介した技術構造の変化をみとることができる。その一方、やはり国府系ナイフ形石器や角錐状石器は大型刺突具としては発達しない。

この時期、関東地方では、遺跡数や遺跡の立地等から見て低平な台地部の周回的移動に基づく居住形態へと変化する時期であり（安蒜 1985）、またV層上部並行期に顕著となる器

種構成の多様化や、遺跡立地環境の多様化、食餌幅の拡大を可能とする礫群の急増（保坂 1996）などは、地域資源の多角的開発の進展をうかがわせる（佐藤 1996）。剥片モードの進展と、遺跡単位での石器製作活動の一般化は、こうした多角的かつ柔軟な資源獲得戦略を保障する戦略として発達したものと理解される（森先 2007a）。

この時期の多角的資源開発とは、多数種の資源のそれぞれを、前半期のように場当たりに利用するものではないと考えられる。なぜなら、この時期には大規模な回帰的居住により形成された遺跡が多数現れることからみて（野口 1995）、より計画的・効率的に利用することが一般化したことを示すからである（田村 1992）。

さて、関東地方の石材分布構造は、低平な台地部における良質大型石材の不在と、周辺山地におけるそれらの多産と要約できる（佐藤 1992）。したがって、上述の居住形態の変化に伴い、利用石材も台地部により近い産地のものが利用される傾向が強まるものの（佐藤 1996）、他の地域に比べれば、関東地方西部では石核リダクション戦略を相対的に重視した石材消費を実行せねばならなかったと考えられる（国武 2003）。

このような石材消費戦略が重視されていたと想定される以上、整形の自由度が高い反面、石材の浪費を基本とする角錐状石器を中心的刺突具として採用することは困難であったと考えられる。このために角錐状石器の発達が抑制されたのであろう（森先 2007a）。大型の安山岩ないし良質かつ均質な石材（珪質頁岩）の利用を前提とする国府型ナイフ形石器も、それらの石材が低平な台地部からは離れた周辺山地に、しかも局所的に存在する以上、積極的かつ中心的刺突具として採用するだけの利点はなかったために、その発達が抑えられたのだと考えられる。大型刺突具に、従前より用いられていた一側縁加工ナイフ形石器（V層上部）や、切出形石器（IV層下部）などが継続的に発達を遂げるのは、それらが多様な素材剥片の形状を、しかも大きく整形せずに製作可能なため、石核リダクション戦略により適合的であったからだろう。

このように、他地域からの技術的情報伝播はこの地域にも一定の影響を及ぼしているが、居住形態の変化、石材分布構造の変化に伴う石材獲得コストの増大は、多種類の石材の節約的利用を可能とする技術構造への再編を促した結果、石材的制約のある国府系石器群や石材浪費型の角錐状石器の受容の余地が少なく、基本的には在来の技術伝統の中で新しい適応戦略を成り立たせていく方針が採用されたものと考えられる（第VI-2図関東地方）。

・九州地方東南部

九州地方東南部にあたる宮崎平野が関東地方と対照的なのは石材分布構造で、この地域では九州中央山地から宮崎平野を東流する諸河川流域において、良質な石器石材が遍在しており（宮崎県旧石器文化談話会 2005）、石材獲得上の制約が石器製作技術に及ぼす影響が小さかったと考えられる。関東地方と九州地方東南部とのこうした差が、技術構造の地域差に大きく影響していると考えられる。

V層下部並行期に石刃モードの剥片尖頭器と小型剥片製の台形様石器・切出形石器からなる技術構造が生じたが、V層上部並行期には石刃モードの後退が著しい点で古本州島西南部

の一般的傾向に一致する。Ⅴ層下部並行期では、前ノ田村上遺跡 1 期石器群など限られた地点で石刃製大型刺突具が生産され、そこからの搬出によって大型刺突具の運用が図られていた。Ⅴ層上部並行期でもこのことは変わらないと考えられるが、大型刺突具には縦長剥片製の断面三角形ナイフ形石器や、まだ中心的刺突具ではないとはいえ尖頭器化した角錐状石器が組み込まれるようになり、逆に剥片尖頭器は次第に大型刺突具から中型幅広の石器に機能転化する。遺跡ごとの剥片製中小型石器・刺突具の製作が活発化し、なおかつ製作される器種が多様化する。国府系ナイフ形石器も、中小型刺突具・石器として活発に製作されている。Ⅳ層下部並行期にはこの傾向がますます顕著になり、遺跡内での大型刺突具製作も相対的に多くなるとともに、主要大型刺突具は縦長剥片製のものから、大型剥片製の角錐状石器（長狭対称形の瀬戸内型を含む）、およびそれまで中小型石器であった切出形石器が機能転化したものへと変化し、他の器種は少なくなる。

遺跡数は関東地方と同様に、Ⅴ層上部からⅣ層下部並行期で顕著に増加し、低平な台地部に設けられるようになる。礫群は他地域より早くⅤ層下部並行期でも規模の大きなものが認められるが（前ノ田村上遺跡）、Ⅴ層上部・Ⅳ層下部並行期で急増する。礫群は古本州島でもっとも多く、大規模である。遺跡分布や遺跡数からは、やはりⅤ層上部並行期において主要な居住地が低平な台地部に移ったことが示され、大規模な礫群の構築が遺跡の繰り返し利用を示唆している。

以上のことから当時の適応戦略の変化を推測すると、次のようになる。Ⅴ層下部並行期には、礫群の多数構築されるような居住基地での大型刺突具製作と、そこからの派生的な資源獲得が中心であり、かつ磨石・台石の多さは植物質食糧の利用も活発化していたことを示すかもしれない。中小型石器は台形様石器・切出形石器等少数の器種を中心とする。Ⅴ層上部並行期には、大型刺突具の素材がそれまでのように規格的な厚形尖頭形石刃ではなくなり、多様な縦長剥片利用に変化する。低平な台地部の各地点に居住地を定めるようになったことに伴い、石材的条件（サイズや質）が整っている場合にのみ集中的に剥片尖頭器製作を行っていたものが、豊富かつ多様なサイズや質の石材に適応した大型刺突具利用に変化したことを示す。また、多種類の中小型刺突具型式と、その製作遺跡の増加は、こうした資源開発戦略の変化に対応して、様々な種類の資源を幅広く利用する傾向が強まったことを反映しよう。Ⅳ層下部並行期はⅤ層上部並行期と居住形態の面で大きな変化を指摘することはできないが、豊富な石材分布を背景に、より石材浪費的な角錐状石器が大型刺突具（だけではなく中小型の刺突具でも）の多くを占めるようになる。不定形な大型幅広剥片からでも容易に製作可能な切出形石器も大型刺突具化するが、その数は多くない。Ⅴ層上部並行期に顕著に開始された低平な台地部の集中的利用が、さらに推し進められたことを反映していよう。

この地域では、関東地方と同じように居住形態が変化しても、多様だが一定程度の質とサイズを有する石材が遍在するという石材分布構造を背景として、石材獲得コストに大きな変化がなかったことが、石材浪費型の角錐状石器の発達を促したと考えられる（第Ⅵ-2 図九州地方東南部）。逆に、この石材分布構造においては、特殊な製作技術を要する国府系ナイフ形石器を大型刺突具としてあえて採用する必要性はないため、また、瀬戸内からの人の

直接的移動がなく情報伝達が不十分であったため、その採用が抑えられたのではないだろうか。ただし、剥片素材石核から柔軟に製作可能な中小型石器・刺突具として技術構造に組み込まれている。

以上のことから、一定程度共通する居住形態の変化があったと考えられる関東地方と九州地方の間に、技術構造の大きな相違が生じていった背景には、居住形態の変化に伴う石材分布構造の変化が深く関与していると考えられる。これをモデル化したのが第Ⅵ-2図である。次に、この基本的枠組みに基づいて、古本州島西南部の他の地域についても、技術構造の変化から適応形態の変化を推定してみる。

・東海地方東部

Ⅵ層並行期に石刃モードの後退が著しかった当地域の技術構造の変遷過程は、しかしⅤ層下部並行期で石刃モード製刺突具が復活して以降、Ⅳ層上部並行期までの間については、関東地方とそれほど大きく変わらない。居住形態も、基本的にはより低平な地域への進出を開始して、多角的な資源開発が進められた可能性が想定されている（中村 2006）。ただし、Ⅳ層下部並行期の大型刺突具として切出形石器が発達した形跡に乏しく、角錐状石器（複刃厚形削器を中心とする）やこれに近い剥片製ナイフ形石器が多いことは関東地方との技術構造上の違いである可能性が高い。

関東地方と東海地方東部にこのような差異があるとしても、先に立てたモデルで基本的には説明可能である。つまり、石材分布構造上、関東地方ではコアリダクションに適合的な刺突具を採用する必要があったが、東海地方東部では、遺跡の分布範囲から推定される生業エリアと重複ないし隣接する位置に、伊豆・箱根産黒曜石やガラス質黒色安山岩、富士川系ホルンフェルス等の優良石材産地が存在するという石材分布構造にあり、石材消費戦略上の制約は乏しかった。本論のⅣ層下部並行期にあたる石器群には信州産黒曜石の急増がみられるという指摘（高尾 2006）があるが、これは子ノ神遺跡 BBO 層石器群については当てはまるものの、一般的傾向とはいえない。基本的には推定生業エリアからみて近在地産の石材の利用が多い。しかも、子ノ神遺跡 BBO 層石器群はⅣ層下部並行期でもより新しい可能性が高く（第Ⅲ章）、関東地方でも信州産黒曜石の利用が再び活発化する時期である。関東地方の場合は、この変化の背後に居住形態の変化に伴う石材獲得戦略の変化（居住中心地からの石材獲得集団の派遣）が関与していたとされる（国武 2003）。

こうした石材分布構造上の特性を背景として、東海地方東部では石材浪費的だが製作の容易な角錐状石器の採用が進められたものと考えておきたい。なお、この地域ではガラス質黒色安山岩も一定程度利用されるが、瀬戸内からの人の移動がなかったことにより情報の伝達が乏しかったため、国府系ナイフ形石器の採用はほぼ皆無だったと考えられる。

・近畿・瀬戸内地方

Ⅵ層並行期の技術構造を引き継ぎつつも、Ⅴ層並行期に起こった重要な変化は、大型横長剥片剥離技術の規格化（瀬戸内概念の諸方式）と、それが大型刺突具製作と結びついたとい

うことである。このことにより、規格的大型刺突具の量産と、原産地を離れた場所における製作が一定程度保証された（佐藤 1992、山口 1994、森先 2007a）。Ⅳ層下部並行期には大型刺突具として角錐状尖頭器（長狭対称形の瀬戸内型を多く含む）が加わり、原産地ないしその近傍で多数製作して携行されるようになる一方、国府型ナイフ形石器・国府系ナイフ形石器には大型のものが減少するようになる。石材浪費型の角錐状尖頭器が大型刺突具の一部を置換したものと考えられるので、Ⅴ層並行期のように原産地を離れた場所で大型刺突具製作を安定的に保証する必要性が低下したと考えられる。

生業・居住形態についてわかることは非常に少ないとはいえ、大阪平野周辺丘陵部での遺跡数が相対的に増加するのはⅤ層並行期以後である。近畿・瀬戸内地方は回廊上の地形単位のなかに安山岩原産地が点在するという石材分布構造をなし（佐藤 前掲）、石材消費戦略上の制約条件は多くない。ただし、安山岩原産地の分布が局所的で、それ以外の補完石材がほとんど存在しない点に特徴がある。

さて、先のモデルで考えれば、仮にⅤ層並行期に他地域と同様に低地部への進出が進行していたと仮定しても、この地域では石材分布構造上の変化はそれほど大きくなかったと考えられる。にもかかわらず、石材産地を離れた地域でも大型刺突具製作を可能とする技術が特殊の発達を遂げたのは、安山岩原産地が局所的であったためと考えることもできる（山口 1994）。主たる生業エリア内に原産地が含まれていても、それが局所分布をなし、かつ補完石材がないために、産地を離れての石器製作を保証する技術が発達したということである。ただし、Ⅴ層並行期に明らかな技術の規格化が認められるということは、古本州島西南部の他地域と異なる特徴であるので、それだけが理由ではない可能性がある。小型の石器や加工具の製作は携帯する石核や（粟生間谷遺跡 BL3）、小型の転礫を用いて便宜的に行われる一方（長原遺跡 97-12 次）、石材の補充頻度を減らし、原産地を離れた場所でも大型刺突具生産を可能とする技術の発達は、古本州島西南部のなかでは相対的に信頼性の高い技術を志向した結果とも考えられる。

この時期の近畿・瀬戸内地方は、他地域に比べて乾燥した気候下にあり、相対的に森林被覆度が低く、温帯性草原が広がっていたとする研究がある（亀井ほか 1981、辻 2001）。もしそうであるならば、当該期の人間集団は、草原景観に居住する、移動性および獲得リスクの高い草原性大型獣狩猟に特化した、相対的に移動性の高い行動戦略を有していた可能性がある。国府石器群の高い技術規格化、信頼性システム化の背景には、こうした行動戦略が関与しているのかもしれない。さらに、この地域ではⅤ層並行期の石器群に他地域のような集中的礫群の報告例が少ないのも、彼らの移動性の高さと相関している可能性がある。国府系石器群の広域展開から読み取られた瀬戸内からの人の移動が顕著に起こった背景には、彼らの有していた広域移動型の行動戦略が深くかかわっているのかもしれない。

しかしⅣ層下部並行期にはこうした石材消費戦略上の特性も見られなくなる。Ⅴ層並行期の技術構造が、石材分布構造だけではなく、生業戦略上の固有事情によって成立したものであるとする先の仮説が妥当であれば、この時期にはそうした生業戦略にも徐々に変化が生じていたということになる。この時期が、大型獣の消滅していく時期に符合していそうなことは、

注目されてよいだろう。この時期以後は、次第に小地域を周回するような居住形態へシフトし、移動性の低い中小型獣狩猟への依存度を高める方向へ進んだことを反映すると考えておきたい。

・九州地方西南部

九州地方西南部は、頁岩や安山岩（ホルンフェルス？）のほかに、より小型かつ粗悪な石材（チャートや粗悪小型の黒曜石、玉髄）が広く用いられる傾向が強い。その分布はまだ詳しくわかってはいないが、遺跡内での顕著な石材消費から考えれば、多くは比較的近い距離で獲得可能な石材であったと考えられる。ただし、大小精粗様々な石材が推定生業エリア内に散在するという石材分布構造は、緻密かつ良質で、大きさも一定程度保証された石材が密に分布する九州地方東南部との差異を示す。

この地域では九州地方東南部に近い技術構造の変化が認められるが、いくつかの違いがある。その違いは、Ⅳ層下部並行期における角錐状石器の盛行が九州地方東南部よりはるかに顕著である反面、大型刺突具としての切出形石器は少ないということ、角錐状尖頭器に九州地方東南部のように精緻なもの（瀬戸内型角錐状尖頭器）がみられないことである。九州地方西南部における国府系石器群の少なさ等、Ⅴ層上部並行期にも両地域間に違いがあるが、Ⅳ層下部並行期にさらに明瞭になる。ただし、遺跡数が九州地方東南部ほど多くないため、居住形態の変化を指摘することはまだ難しい。

とはいえ、類似した技術構造の変化から、Ⅴ層上部並行期までは九州地方東南部に近い適応戦略の変化を想定することが可能とおもわれる。ただし、すでに第Ⅳ章で述べた理由から、九州地方西南部には瀬戸内からの人の移動が乏しかったため、その技術的情報の伝播と受容もほとんど起こらなかった。逆に、Ⅳ層下部並行期において角錐状石器の大型刺突具としての発達が顕著である理由は、この地域特有の石材分布構造にあると考えたい。すなわち、良質石材だけではなく、多数存在する粗悪かつ小型の石材を幅広く有効利用するためには、石材浪費的ではあるが石材的制約条件が少ない角錐状石器を中心的大型刺突具として採用することが、それまで有していた技術的レパートリーから構築可能なもっとも適当な技術適応だったものと考えられる。

しかし、これだけでは角錐状石器（特に尖頭器）の形態が不整形なことを説明できない。不整形な角錐状石器に特徴づけられるのは九州地方西南部だけでなく、四国地方太平洋側にも共通する。さらに東海地方中・東部にも近い様相が見て取れる。これは、瀬戸内地方・九州地方東北部・東南部が大型で長狭対称形の精美な角錐状尖頭器に特徴づけられるのとは対照的である。両地域は古植生分布においても差異が認められるので、もし太平洋沿岸の地域が相対的に温暖な地域に属し、そのため植物資源への依存度が高かったとすれば、角錐状石器に反映されている技術形態的な差異は、動物資源への依存度の違いか、対象獣の違いと関連したデザインの違いである可能性が考えられる。しかしこの問題には、現在のデータから蓋然性の高い説明を与えることはまだ難しい。

3. その後の地域差について

後期旧石器時代後半期の地域差は、Ⅳ層下部並行期までにほぼ形成されている。この地域差は、一時的に差異が不明確になる時期を介しつつも、後の地域差の基盤となっていく。いくつかの例に絞ってみておきたい。

たとえば、古本州島東北部では、前時期の地域差を引き継いで奥羽山脈西部と東部にはそれぞれ異なる石器群が展開し、前時期よりも差異が顕在化する。すなわち、前者の地域には太郎水野2遺跡に代表される石刃石器群が展開し、後者の地域には田向冷水遺跡に代表される有肩尖頭器石器群が成立する。この地域差の顕在化は、時間の経過とともに地域適応をいっそう進行させた結果と考えられる。

また、前時期には石刃モードと剥片モードそれぞれで大小の刺突具を製作する技術構造が成立していた新潟～北陸地方にかけての地域では、新潟県域に杉久保石器群が、北陸地方には瀬戸内系石器群が成立し、やはり地域差が顕著となった。これは前時期の多様な技術オプションに、時間の経過とともに取捨選択が働き、特定技術システムへの収斂が生じた結果と考えられる。

Ⅳ層中部並行期には古本州島一帯で厚手の大型刺突具が減少し、薄手品が中心となっていくが、新潟～北陸地方にかけての地域でも、薄手均質の刺突具製作へ傾斜していくなかで技術構造の見直しが進められた結果、地域差が顕著となっていった可能性が高い。すなわち、北陸地方の地域集団は瀬戸内からの人の移入期に内置されていた横打剥片石器モードを発達させる方向を選択したのであり、他方の新潟県域の地域集団は石刃石器モードを発達させる方向を選んだ結果といえる。では、この取捨選択の背景をなした地域固有の事情はどのように説明できるだろうか。

じつは、瀬戸内東部集団移入期の国府系ナイフ形石器には、新潟県周辺と富山県周辺で微妙に異なる特徴がみられる。すなわち、新潟県側では安山岩も一定数含まれるものの、頁岩・凝灰岩・珪質頁岩・黒曜石など多様な石材でこれを補完している。一方の富山県周辺では、資料が少なく確言はできないが、現在見られる資料では表採資料も含めて全て安山岩を素材としている（麻柄 2006、森先 2008a）。これは両者間での石材分布構造の差異を反映している可能性がある。すなわち、三浦知徳（2005）の推測するように、富山県周辺でより密となる、安山岩原産地の分布が関係しよう。

つまり、北陸地方ほどには恒常的な安山岩系石材の利用を望めない新潟県域では、薄手の尖頭形石器製作に傾斜するなかで、次第に珪質石材を用いた石刃石器モードへの収斂が生じ、対照的に富山県周辺では、安山岩の獲得が相対的に容易であったため、その石理を活かして横打剥片モードで薄手尖頭形石器を製作する方向へと技術的再編が行われたと考えられよう。また、瀬戸内系石器群のナイフ形石器の背部整形が、素材腹面側からでなく背面側からの平坦調整であるのは、国府型ナイフ形石器からの技術の崩れとして評価するよりも、幅に対する厚みの減少を指向した技術適応と考えたほうが適切である（須藤 2005）。瀬戸内系石器群と杉久保石器群の分立には、石材分布構造の異なりを背景とした、このような地域適

応過程があったものとみられる。

ところで、中部高地尖頭器石器群の成立も、特定技術システムへの収斂と薄手均質形状の刺突具製作への傾斜という方向性に一致したものである。野尻湖から千曲川上流域の地域集団が、瀬戸内東部集団との邂逅によって得た情報をもとに、尖頭器石器群を発達させたという仮説（安斎 2004）は、今後検討を要する。安斎の言うとおり、本論の編年でも、国府系石器群や角錐状石器が展開した後に両面調整尖頭器の発達が見られたのは、中部高地であり、この点は賛成である。ただし、筆者は、東裏遺跡 H2 石器群の断面片凸レンズ形でやや平坦な調整に特徴をもつ粗雑な木葉形尖頭器・非対称形尖頭器や複刃厚型削器（角錐状石器）、および木曽川ルートに残された柳又遺跡 C 地点等の木葉形角錐状尖頭器が重要な鍵を握る石器と考えている。これらの石器群は V 層上部から IV 層下部並行期に相当し、このとき受容されていた角錐状尖頭器が、黒曜石を背景に発達を遂げた結果として、男女倉型の両面加工尖頭器石器群が成立した可能性を考えている。

関東地方における IV 層下部期から IV 層中部期砂川石器群への技術構造の変化は、すでに国武貞克（2003）らが説明しており、基本的には筆者もこれに賛成したい。つまり、遺跡間システムからみて、居住形態がより小さい地域の周回型となって居住基地が固定化し、そこからの資源獲得集団を派遣するという資源獲得戦略が確立していったものと説明されている。それと同時に、より柔軟な技術と多様な器種を複数組み合わせた石器製作技術構造であった IV 層下部並行期と異なって、砂川石器群では厚手大型刺突具が極端に減少し、中小型薄手石刃石器を主とする石器製作へと技術構造が収斂する。これらの変化は、移動型の大型獣狩猟への依存度の低下と移動性の低い中小型獣狩猟の進展により、小地域への定着性の高い生活が始まったこと（佐藤 2008）、そのことによって促進された資源利用の安定化、資源獲得戦略の収斂・固定化を反映したものと考えられよう。東部関東では東内野型尖頭器に特徴を持つ石器群が展開して、地域差がさらに顕著となっている（佐藤 1995、国武 前掲）。

東海地方から近畿・瀬戸内地方までの様相はいまだ判然としないが、基本的には前時期までの地域差を引き継ぎつつ、その差異が顕在化していくと考えられる。九州地方も同様に前時期の地域差が維持されており、各地で刺突具の種類や型式を違えた石器群が成立していくようである。

第 4 節 まとめ

後期旧石器時代前半期から後半期への移行にみられる二つの大きな変化について、その背景を検討してきた。その結果以下のような結論を得た。

VI 層並行期には地域的な資源環境の違いに応じた技術構造の地域差はまだ認められない。おそらく、大局的な自然環境の差異に応じた技術構造の差異が生じ、相応の行動戦略の差異が顕在化したと想定される。

V 層上部並行期になると、広い範囲でそれまでより狭い地域への定着を示すような遺跡数の増加が始まり、同時に技術構造の顕著な地域化が確認された。居住形態の変化に伴う石

材分布構造の変化によって、各地の技術構造の変化を概ね合理的に説明することができるので、石材をはじめとする地域資源へのより細やかな適応が進行していることがわかる。ただしそれだけではなく、地域社会化と表裏の現象である国府系石器群・角錐状石器の広域展開によって付加された技術的情報は、各地で様々に受容され、この技術構造の再編過程において多様な役割を果たした結果、地域性の多様化を促進している様子がみてとれた。

なお、近畿・瀬戸内地方についてみたように、石材分布構造だけでは説明をつけられない変化もあり、生態的条件の特異性を背景とする生業戦略の差異があったとの仮説を提示した。データの不十分な地域に関するこうした仮説は、今後の資料の蓄積によって検証されていくべきである。

また、古本州島東北部では、Ⅴ層並行期に後期旧石器時代前半期的な適応形態の強化を図るような信頼性重視の技術構造へ変化し、相対的に保守性重視の技術が成立した古本州島西南部とは異なっていた。このため、国府系石器群・角錐状石器の受容もほとんど起こらなかったと考えられる。

こうした地域適応は、Ⅳ層中部並行期まで、各地で漸進的に進行したと考えられる。

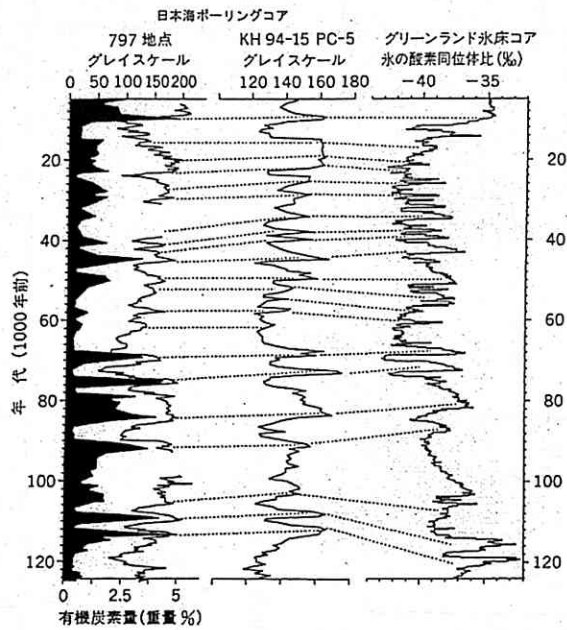
註

- (1) 佐藤の指摘のとおり、南関東地方ではⅦ層上部並行期にすでに台形様石器をほとんど認めることができない。石刃製の大型刺突具と剥片製の台形様石器からなるⅨ層並行期に最も発達する技術構造を二極構造とよぶならば、関東地方では若干はやくその構造が変容している。
- (2) ただし、いまのところ草原環境に生息するマンモスゾウ自体の化石骨は本州以南ではみつかっておらず、本州以南への南下は起こらなかったらしい。
- (3) なお、九州地方のなかでも西北部では剥片製小型ナイフ形石器や切出形石器のかわりに台形様石器が発達するという、技術構造上の微細な地域差があるが（阿部 2004）、ここでは捨象しておく。

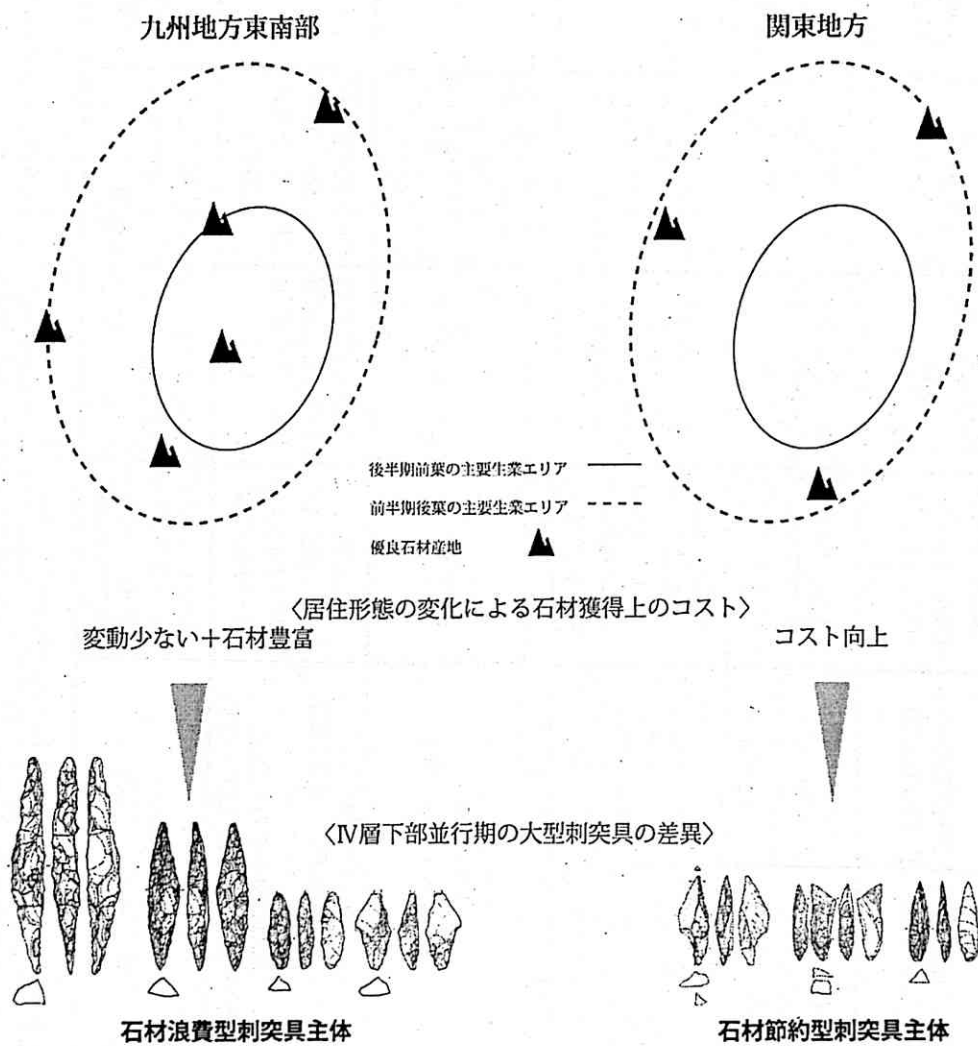
第VI-1表 技術構造の変遷と地域性の形成

時期	古本州島西南部					古本州島東北部				地域性
	九州地方西南部	九州地方東南部	近畿・瀬戸内地方	東海地方東部	南関東地方西部	北陸地方	新潟県周辺	奥羽山脈西部	奥羽山脈東部北側	
Ⅳ層中部 並行期	尖頭形石器石器群 (城ヶ尾Ⅲ文)	尖頭形石器石器群 (前ノ田Ⅲ期)	縦長剥片製ナイフ 形石器石器群? (淀岩南山石器 群)	ナイフ形石器石器 群 (類砂川石器群)	砂川石器群 (砂川)	瀬戸内系石器群 (上ノ原遺道)	杉久保石器群 (杉久保)	尖頭形石器石器群 (太郎水野2) (石刃モード巡回群)	有肩尖頭形石器群 (田向冷水)	地域性確立
Ⅳ層下部 並行期	角錐状尖頭器 (・切出形石器) / 角錐・切出	角錐状尖頭器・ 切出形石器 / 角錐・切出・国府系・ 尖頭形石器	角錐状尖頭器・国府型・ 国府系ナイフ形石器 / 切出・横長剥片ナイフ	角錐・切出・剥片ナイフ	切出形石器・横長剥片 製ナイフ形石器・ 角錐・切出・尖頭形剥 片石器	尖頭形石器・ナイ フ形石器・横長剥 片製ナイフ形石器 ／剥片製小型ナイ フ形石器・切出形 石器	尖頭形石器・ナイ フ形石器・横長剥 片製ナイフ形石器 ／尖頭形石器・横 長剥片製小型ナイ フ形石器・切出形 石器	尖頭形石器 / 切出形石器 (石刃モード巡回群)	尖頭形石器・有肩 尖頭形剥片石器 (・台形様石器)	
Ⅴ層上部 並行期	縦長剥片・剥片ナイフ形石 器・角錐尖(・剥片尖頭 器・両面尖頭器) / 切 出形石器・台形様・基 部加工尖頭形・角錐尖 ど	縦長剥片・剥片ナイフ形石 器・角錐尖(・剥片尖頭 器) / 切出形石器・台 形様・基部加工尖頭 形・角錐尖・国府系な ど	〈国府石器群〉 国府型ナイフ形石 器・国府系ナイフ 形石器 / 切出形石 器・剥片ナイフ	縦長剥片・剥片ナイフ形石 器(・尖頭形石器) / 角錐尖・尖頭形剥片石 器・剥片ナイフ	縦長剥片・剥片ナイフ形石 器(・尖頭形石器) / 角錐尖・切出・尖頭形 剥片石器(・国府系)					地域性顕在化
←国府系石器群・角錐状石器の広域展開→										
Ⅴ層下部 並行期	剥片尖頭器 / 台形様石器・切出形石器		国府石器群?	尖頭形石器 / 剥片ナイフ形石器?	尖頭形石器・石刃製ナ イフ形石器 / 剥片ナイフ・尖頭形剥 片石器・台形様石器・ 切出形石器	尖頭形石器 / 尖頭形石器 (石刃モード巡回群)			尖頭形石器 / 尖頭形剥片石器・ 台形様石器・切出)	(東北部・西南部)
Ⅵ層 並行期	縦長剥片製ナイフ形石器 / 剥片製ナイフ形石器・切出形石器 AT (24,500RCYBP) 縦長剥片製ナイフ形石器 / 剥片製ナイフ形石器・切出・台形?		横長剥片製 ナイフ形石器 / 剥片製ナイフ形石 器・切出形石器	石刃・縦長剥片製 ナイフ形石器 / 剥 片ナイフ・切出形 石器	石刃製ナイフ形石 器・尖頭形石器 / 剥片ナイフ・切出 形石器	尖頭形石器石器群 (・台形様石器)				
Ⅶ層上部 並行期	ナイフ形石器 / 台形様石器・切出形石器		縦長・横長剥片製ナイフ 形石器・台形様石器 / 台形様石器・横長剥片 ナイフ・切出形石器	石刃製ナイフ形石器・ 剥片製小型ナイフ形石器・ (・台形様石器)	石刃製ナイフ形石器・ 尖頭形石器・切出形石器	尖頭形石器 / 台形様石器?	尖頭形石器・石刃 製ナイフ形石器 / 台形様石器	尖頭形石器 / 台形様石器	尖頭形石器・石刃 製ナイフ形石器 / 台形様石器	未地域 性

注1：各枠内 (A/B) の見方は、Aが大型剥片製具、Bが小型剥片製具、小型石器を意味する。
 注2：枠の太さは地域差を表す (太：顕著な技術構造差あり、中：技術構造差ある可能性が高い、点線：若干の構造差ある可能性あり)。「?」は不確定であることを示す。
 注3：一部に次の略称を用いている (剥片ナイフ＝剥片製ナイフ形石器、角錐尖＝角錐状尖頭器、切出＝切出形石器)。



第VI-1図 ダンスガード=オシュガー・サイクルと日本海海底堆積物暗度変化の対応 (多田 1997)



第VI-2図 居住形態・石材分布構造の変化を主要因とする技術構造差の形成モデル

結語—結論と今後の課題—

第1節 まとめと結論

本論は、古本州島の後期旧石器時代前半期から後半期にかけておこった人間集団の環境適応戦略の変化の過程と背景を、同時期の自然環境の変化と関連づけながら、石器群の分析を通じて読み解くことを目的とした。最後に本論の内容をまとめ、結論を述べたい。

分析の対象となりうる資料は、古本州島全域に残された石器群のみである。そこで、研究の方法として、石器製作の技術的特徴を分析して技術構造を抽出することと、その行動戦略上の特性を把握することで、適応戦略の基本的側面を理解し、その通時間的・地域的な変化・変異を整理することとした。分析では、関東地方のⅦ層並行期からⅣ層中部並行期石器群の抽出および編年をおこない、石器製作の技術構造とその変化の過程を整理した。その結果、技術構造の顕著な変化がⅥ層並行期とⅤ層上部並行期に起こっていることがわかり、さらにⅤ層上部並行期にはそれまでになく明瞭な地域差が急速に形成されること、それと同時に地域を越えた特定石器・石器群の伝播拡散が起こっていることが確認できた。Ⅴ層上部並行期の技術構造の変化には、各地域内部での技術伝統では説明できない要素が加わっていることがわかったため、この広域的な伝播拡散現象の実態を詳しく分析した。その上で、最後に技術構造の変化と地域化の背景を、環境変化や地域環境条件の違いを踏まえながら説明してきた。結論を次のようにまとめたい。

- ①後期旧石器時代前半期から後半期への移行は、Ⅵ層並行期からⅤ層上部並行期を中心に、比較的長い時間をかけて進行した。また、適応戦略の変化は階層的であり、一挙にあらゆる側面が変化したわけではない。
- ②Ⅵ層並行期の技術構造の変化は、古本州島全域における二極構造の解体として理解できるが、地域石材に適応するような細かな地域差を、まだ本格的には示していない。この時期には、古本州島東北部と西南部という程度の、大局的な自然環境の差異に対応した適応行動差が顕在化したと考えられる。
- ③Ⅴ層上部並行期には、特に古本州島西南部で急速な技術構造の変化がおこっている。これはAT降灰による生態系の構造変動が、古本州島西南部でより急激であったためと考えられる。西南日本を中心に生じた技術構造の顕著な地域差は、減少する大型獣から中小型獣へと狩猟対象の重心が移ったことで、人間集団の遊動域が縮小して起こった可能性が高い。ここに至って、後の地域差の基盤をなす本格的な地域環境適応が始まり、地域社会が成立したと考えられる。国府系石器群と角錐状石器の広域展開はこの時期に起こっており、地域社会間の同盟関係が強化された様子を象徴的に示している。
- ④Ⅴ層上部並行期における技術構造の地域差の形成過程は、居住形態の変化に伴う、生業エリアと地域石材条件との関係（石材分布構造）の違いによってほぼ説明可能である。

このとき、国府系石器群や角錐状石器に示される技術情報の伝播・受容は、一部の地域ではその後の技術構造の変化の方向性を左右することとなった。

端的にいうと、小地域への適応という共通する方向性をとりながらも、それによって顕在化する地域環境差が、この時期の技術構造の地域固有化をもたらしている。この地域適応は、特にV層上部並行期以後、IV層中部並行期にかけて、漸進的に進行した。

ただし、古本州島東北部では、V層並行期に後期旧石器時代前半期的な適応形態の強化を図るような信頼性重視の技術構造へ変化し、相対的に保守性重視の技術が成立した古本州島西南部とは異なっていた。このため、国府系石器群・角錐状石器の受容もほとんど起こらなかった。しかしその後、IV層中部並行期にかけて技術構造が地域固有化していく過程は、古本州島西南部と大きな違いはない。

第2節 今後の課題

現時点では解明できなかったことについて、今後の課題としてまとめ、本論を締めくくりたい。

まず本論では、人間集団の適応戦略の基盤的側面が反映されていると考えられる石器製作の技術構造を重視した。それは、より多くの資料を対象とすることができ、資料的な粗密をもつ地域間での比較研究に適しているからである。遺跡間システムの緻密な検討に基づく居住形態研究との総合によって、人間集団の適応行動のいっそう具体的な叙述が可能となるのは、関東地方や九州地方東南部といった、ごく一部の地域に限られる。それらの地域については、居住形態の変化も考慮した適応戦略の変化を推定したが、実際はこうした検討ができない地域のほうが多い。このため、資料的不足がある地域については、技術構造の変化と石材分布構造を主たる手がかりとして、また関東地方や九州地方東南部でのモデルを参照しながら、適応戦略の変化に関する予測的な説明モデルを提出した。したがって、この予測的説明は、今後の資料蓄積によって補足・検証していかねばならない。ただし、大きな変更は要しないであろう。

また、将来的な古環境研究の進展に伴い、より詳細な環境変化モデルが提示されれば、本論の技術構造変化とのより細かな対応関係を検討することができ、地域環境適応過程を詳しく論ずることが可能となる。それによって本論の内容を補足・検証していくことも今後の課題となる。

もう一点は、本論で一章をつかって論じた国府系石器群の広域展開現象についてである。国府系石器群の広域展開からは、当時の人の移動の固有事情や、それを背景とする技術情報の伝播の多様性を読み取ることができ、またその背景の一部を説明できたと考えている。しかしながら、各地で技術の固有化が起こっていたこの時期に、なぜ瀬戸内地方で発達した技術ばかりが、周辺地域に強い影響を与えたのかを説明することはできなかった。これについては、より後の時期におこる細石刃石器群の広域展開現象について提出されている仮説（ニッチモデル：佐藤 1992）等を参照して考察を深めていかねばならない。おそらく小集団・

個人単位での移動であったと考えられるので、第Ⅵ章で簡単に予測しておいたように、近畿・瀬戸内地方地域集団の生業戦略上の特異性が、なんらかのかたちで関与しているはずである。今後とも研究していきたい。

本論は対象とする時期について従来にないスケールで地域間比較研究をおこなったことにより、逆説的ではあるが、地域個別に扱うのでは明らかにできない各地域の人間集団の適応史について、ひとつの仮説を提出することができた。以上の課題を意識しながら、今後一層の分析を進めていきたい。

引用・参考文献

【論文】

- 会田容弘 1987 「東北地方における〈国府系石器群〉」『歴史』第69輯、1－14頁、東北史学会。
- 会田容弘 1992 「東北地方における後期旧石器時代石器群の剥片剥離技術の研究」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』、209－292頁、加藤稔先生還暦記念会。
- 会田容弘 1993 「頁岩製石刃石器群の比較研究—山形県新庄盆地の石器群分析を中心として—」『考古学雑誌』第79巻2号、1－30頁。
- 会田容弘 1994a 「東日本の〈国府系石器群〉を中心とした石器群の石器組成比較」『瀬戸内技法とその時代』、153－162頁、中・四国旧石器文化談話会。
- 会田容弘 1994b 「越中山道跡K地点」『瀬戸内技法とその時代 資料編』、176－177頁、中・四国旧石器文化談話会。
- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 『日本の旧石器』立風書房。
- 阿子島 香 1989 『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社。
- 麻生敏隆・織笠昭・犬塚俊雄 1984 「千葉県鎌ヶ谷市東林跡遺跡の調査」『日本考古学協会第50回総会研究発表要旨』、9－10頁。
- 阿部 敬 2004 「後期旧石器時代前半期後葉の九州地方における石器群構造」『旧石器考古学』65、69－86頁。
- 阿部 敬 2005 「剥片尖頭器はなぜ消えたか」『物質文化』第79号、37－70頁。
- 阿部 敬 2007 「角錐状石器群の行動的背景—九州地方後期旧石器時代後半期石器群の再検討」『考古学V』、33－72頁、安斎正人編集・発行。
- 阿部友晴・潮田憲幸・酒井亜紀・佐野陽子・高橋 優 2001 「奥三面遺跡群周辺地域における石材調査結果」『新潟県考古学談話会会報』第23号、85－92頁、新潟県考古学談話会。
- 安斎正人 1988 「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行—前・中期／後期旧石器時代過渡期の研究—」『先史考古学研究』第1号、1－48頁、阿佐ヶ谷先史学研究会。
- 安斎正人 1990 『無文字社会の考古学』六興出版。
- 安斎正人 1991a 「日本旧石器時代構造変動論」『早坂平遺跡—原石産地遺跡の研究—』、99－120頁、岩手県山形村教育委員会。
- 安斎正人 1991b 「ナイフ形石器群の発生—日本旧石器時代構造変動論(2)—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第10号上、103－127頁、東京大学文学部考古学研究室。
- 安斎正人 1993 「考古学の革新—社会生態学派宣言—」『考古学雑誌』第78巻4号、78－98頁。
- 安斎正人 1994 「縄紋文化の発現—日本旧石器時代構造変動論(3)—」『先史考古学論集』第3集、43－82頁、安斎正人編集・発行。
- 安斎正人 1996 『現代考古学』同成社。
- 安斎正人 2000 「台形様・ナイフ形石器群(2)—構造変動研究法の階層的秩序—」『先史考古学論集』第9集、1－28頁、安斎正人編集・発行。
- 安斎正人 2002 「〈神子柴・長者久保文化〉の大陸渡来説批判—伝播系統論から形成過程論へ—」『物質文化』第72号、1－20頁。
- 安斎正人 2003a 「石器から見た人の行動的進化」『考古学』I、78－128頁。
- 安斎正人 2003b 「現代型ホモ・サピエンスの出現と『第二次出アフリカ』」『作業の科学』vol.5、13－44頁、作業療法関連科学研究会。
- 安斎正人 2003c 『旧石器社会の構造変動』同成社。
- 安斎正人 2004 「東北日本における『国府系石器群』の展開—槍先形尖頭器石器群出現の前提—」『考古学』II、1－40頁、安斎正人編集・発行。

- 安斎正人 2007 『人と社会の生態考古学』 柏書房。
- 安斎正人 2008 「〈伝播〉をめぐる構造変動」『伝播を巡る構造変動』、2-7頁、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「日本列島北部の更新世／完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究」グループ。
- 安藤政雄 1979 「石器の形態と機能」『日本考古学を学ぶ2』、19-41頁、有斐閣。
- 安藤政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集 日本原史』、193-216頁、吉川弘文館。
- 安藤政雄 1986 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』5、27-60頁、岩波書店。
- 池水寛治 1967 「鹿兒島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3-4、1-21頁。
- 石川恵美子 2005 「米ヶ森型台形石器の型式学的検討」『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学文学部考古学研究室編、5-22頁、六一書房。
- 伊藤 健 1991a 「ナイフ形石器の変異と変遷」『研究論集—創立10周年記念論文集』X、81-108頁、東京都埋蔵文化財センター。
- 伊藤 健 1991b 「AT降灰前後の様相—ナイフ形石器と広域環境変化—」『石器文化研究』3、263-270頁。
- 伊藤 健 1996a 「列島内対比」『石器文化研究』5、367-388頁。
- 伊藤 健 1996b 「中部ナイフ形石器文化地域圏の確立」『古代』第101号、57-81頁、早稲田大学考古学会。
- 稲田孝司・日野琢郎 1993 「鳥取県関金町野津第三1遺跡の石器群」『岡山大学文学部紀要』第19号、85-96頁。
- 井上雅善 2001 「下呂町大林遺跡の旧石器資料」『飛騨と考古学Ⅱ 旧石器特集号』飛騨考古学会、66-69頁。
- 岩谷史記 1997 「九州尖頭器石器群の中にみる三稜尖頭器の位置」『九州旧石器』第3号、47-62頁。
- 氏家敏之 2005 「小形ナイフ形石器と国府系石器群—阿讃地域の後半期編年に関する素描」『石器文化研究』12、25-40頁。
- 内山 隆 1998 「関東地方の植生史」『図説日本列島植生史』、73-91頁、朝倉書店。
- 内山ひろせ 2004 「〈台形様石器〉の諸問題」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』、1-6頁、河瀬正利先生退官記念事業会。
- 宇野修平・佐藤祐宏 1973 「山形県新庄市新堤遺跡の旧石器(1)」『山形考古』第2巻第2号、7-18頁、山形考古学会。
- 大西雅広 2008 「群馬県渋川市上白井西伊熊遺跡」『日本旧石器学会 第6回講演・研究発表・シンポジウム予稿集』、24-25頁。
- 大塚忠道・村山雅史・松本英二・中村純夫 1995 「日本海隠岐堆コアの加速器質量分析(AMS)法による14C年代」『第四紀研究』第34巻第4号、289-296頁。
- 奥野 充 2002 「南九州に分布する最近3万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第41巻第4号、225-236頁。
- 奥村吉信 1990 「後期旧石器時代における北陸の地域性」『考古学研究』第37巻第3号、21-28頁。
- 小野有五・五十嵐八枝子 1991 『北海道の自然史—氷期の森林を旅する—』北海道大学図刊行会。
- 織笠 昭 1987a 「国府型ナイフ形石器の形態と技術(下)」『古代文化』第39巻第12号、15-30頁。
- 織笠 昭 1987b 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』第72巻第4号、1-38頁。
- 織笠 昭 1988 「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』1-48頁、東海大学史学会。
- 織笠 昭 1992 「南関東における国府型ナイフ形石器の受容と変容」『海老名市史研究—えびなの歴史』第3号、1-23頁。
- 角張淳一 1989 「武蔵野台地の横剥ぎ技法—研究ノート—」『佐久考古通信』№49、3-9頁。
- 角張淳一 1991 「黒曜石原産地と消費地遺跡のダイナミズム」『先史考古学論集』第1集、25-82頁、安斎正人編集・発行。
- 勝山百合 2007 「新潟県三条市平ノ原遺跡」『第21回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、23-33頁、加藤稔発行。
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『図録 石器の基礎知識Ⅰ』 柏書房。
- 加藤 稔 1965a 「東北地方のナイフ形石器文化」『歴史教育』13巻3号、22-27頁、日本書院。
- 加藤 稔 1965b 「東北地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』、198-221頁、河出書房。
- 加藤 稔 1969 「東北地方の旧石器文化(前編)」『山形県立山形中央高等学校研究紀要』第1号、1-17頁。
- 加藤 稔 1975 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物〈上〉』、112-137頁、雄山閣。

- 加藤 稔 1992 『東北日本の旧石器文化』雄山閣。
- 加藤稔・会田容弘 1998 「山形県小国町横道遺跡の研究」『東北芸術工科大学紀要』No.5、100 - 147 頁、東北芸術工科大学。
- 加藤稔・小林達夫 1974 「山形県寒河江市金谷原の旧石器群—新しい様相をもつ石刃工作について—」『歴史』第19輯、26 - 41 頁、東北史学会。
- 加藤稔・鈴木和夫 1976 「越中山 K 遺跡の接合資料」『考古学研究』第22巻第4号、139 - 143 頁。
- 金井美典・石井則孝・大脇 深 1969 「長野県霧ヶ峰池のくろみ先土器時代遺跡調査報告(第1次・第2次)」『考古学雑誌』第55巻第2号、1 - 19 頁。
- 庭又喜隆 2005 「東北地方後期旧石器時代初頭の石器の製作技術と機能の研究—岩手県胆沢町上萩森遺跡Ⅱb文化層の分析を通して—」『宮城考古学』第7号、1 - 26 頁、宮城県考古学会。
- 鎌木義昌 1959 「香川県城山遺跡出土の石器—翼状剥片石器を主とする—」『古代学』第8巻第3号、300 - 307 頁。
- 鎌木義昌・小林博昭 1986 「戸谷遺跡」『岡山県史 考古資料編』8 - 14 頁。
- 鎌木義昌・小林博昭 1987 「岡山県北部の火山灰と石器群」『日本考古学協会 1987 年度大会研究発表要旨』19 - 25 頁。
- 鎌木義昌・高橋 護 1965 「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』、284 - 302 頁、河出書房。
- 亀井節夫・ウルム氷期以降の生物地理総研グループ 1981 「最終氷期における日本列島の動・植物相」『第四紀研究』第20巻第3号、191 - 206 頁。
- 亀田直美 1995 「武蔵野台地 V 層Ⅳ層下部段階における遺跡構造」『古代探査Ⅳ—滝口宏先生追悼考古学論集—』、1 - 16 頁、早稲田大学。
- 亀田直美 1996 「角錐状石器」『石器文化研究』5、189 - 198 頁。
- 川合 剛 2003 「尾張(愛知県西部)の旧石器」『東海石器研究』第1号、14 - 15 頁。
- 川口武彦 2002 「石器群の様相—ナイフ形石器段階—」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と展望—』ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会。
- 河村義也 1998 「第四紀における日本列島への哺乳類の移動」『第四紀研究』第37巻第3号、251 - 257 頁。
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37、25-44 頁。
- 木崎康弘 1996 「槍の出現と気候寒冷化—地域文化としての九州石槍文化の提唱—」『旧石器考古学』53、43 - 56 頁。
- 絹川一徳 1988a 「国分台遺跡における石器製作の技術構造—原産地遺跡間の比較を通して—(上)」『考古学研究』第35巻第1号、32 - 60 頁。
- 絹川一徳 1988b 「国分台遺跡における石器製作の技術構造—原産地遺跡間の比較を通して—(下)」『考古学研究』第35巻第2号、68 - 89 頁。
- 絹川一徳 1998 「近畿地方出土の「角錐状石器」に関する予察」『大阪市文化財協会研究紀要』創刊号、1 - 19 頁、財団法人大阪市文化財協会。
- 絹川一徳 2004 「近畿と瀬戸内」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』、85 - 98 頁、中・四国旧石器文化談話会。
- 絹川一徳・小倉敬也 2008 「大阪市平野区瓜破北遺跡(UR07-2次調査地)出土の旧石器」『日本旧石器学会 第6回講演・研究発表・シンポジウム予稿集』、62 頁。
- 木村剛朗 2003 『南四国の後期旧石器文化研究』、幅多埋文研。
- 工藤直子・高橋 学 1998 「米代川流域の旧石器時代資料—能代・山本地方を中心として—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号、1 - 24 頁、秋田県埋蔵文化財センター。
- 国武貞克 2003 「両面体調製石器群の由来 —関東地方 V 層・Ⅳ層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』

- 1、52 - 77 頁、安齋正人編集・発行。
- 国武貞克 2005 「後期旧石器時代前半期の居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』78、1 - 25 頁。
- 久保弘幸 1989 「大阪湾沿岸地域における小型ナイフ形石器とその編年について」『旧石器考古学』38、83 - 92 頁。
- 久保弘幸 1999 「近畿地方におけるナイフ形石器の形態変遷」『同志社大学考古学シリーズⅦ：考古学に学ぶ』、15 - 27 頁。
- 公文富士夫・河合小百合・井内美郎 2003 「野尻湖湖底堆積物中の有機炭素・全窒素含有率および花粉分析に基づく約 25000 ～ 6000 年前の気候変動」『第四紀研究』第 42 巻 第 1 号、13 - 26 頁。
- 桑波田武志 2004a 「鹿児島県における瀬戸内技法関連資料」『鹿児島考古』第 38 号、7-23 頁、鹿児島県考古学会。
- 桑波田武志 2004b 「ナイフ形石器文化後半期における南九州の狩猟具の様相」『九州旧石器』第 8 号、47 - 58 頁。
- 小菅将夫 1999 「地域性の出現とナイフ形石器文化」『第 7 回岩宿フォーラム／シンポジウム 岩宿発掘 50 年の成果と今後の展望 予稿集』、55 - 61 頁、笠懸町教育委員会・岩宿フォーラム実行委員会。
- 斉藤基生 2003 「愛知県内における後期旧石器の変遷」『東海石器研究』第 1 号、4 - 5 頁。
- 笹原芳郎 2005 「愛鷹・箱根旧石器時代編年の現状と課題」『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学文学部考古学研究室編、91 - 106 頁、六一書房。
- 佐藤耕太郎・磯部保衛 1988 「神林村大聖寺遺跡採集の国府型ナイフ形石器」『北越考古学』創刊号 53 頁、北越考古学研究会。
- 佐藤達夫 1969 「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館紀要』第 5 号、23 - 61 頁、東京国立博物館。
- 佐藤達夫 1970 「長野県南佐久郡野辺山 B5 地点の石器—ナイフ形石器の編年に関する覚書—」『信濃』第 22 巻 第 4 号、1 - 6 頁。
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第 73 巻 3 号、1 - 37 頁。
- 佐藤宏之 1990 「〈尖頭器文化〉概念の操作的有効性に関する問題点」『長野県考古学会研究報告』1、124 - 134 頁。
- 佐藤宏之 1991 「東北日本の台形様石器」『研究論集』X、1 - 48 頁、東京都埋蔵文化財センター。
- 佐藤宏之 1992 「日本旧石器文化の構造と進化」柏書房。
- 佐藤宏之 1993 「細石刃石器群の行動論分析のための視点」『細石刃文化研究の新たな展開Ⅱ—細石刃文化研究の諸問題Ⅰ—』、299 - 307 頁、佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ。
- 佐藤宏之 1995 「技術的組織・変形論・石材受給」『考古学研究』第 42 巻 第 1 号、27 - 53 頁。
- 佐藤宏之 1996 「社会構造」『石器文化研究』5、329 - 340 頁。
- 佐藤宏之 1997 「日本旧石器時代研究と居住形態論 —関東地方後期旧石器時代前半期から後半期への移行を中心として—」『住の考古学』、2 - 12 頁、同成社。
- 佐藤宏之 2000 「日本列島後期旧石器文化のフレームと北海道及び九州島」『九州旧石器』第 4 号、53 - 70 頁。
- 佐藤宏之 2003a 「細石刃石器群研究のパースペクティブ」『シンポジウム 日本の細石刃文化Ⅱ —細石刃文化研究の諸問題Ⅰ—』、276 - 280 頁、八ヶ岳旧石器研究グループ。
- 佐藤宏之 2003b 「北海道の後期旧石器時代前半期の様相—細石刃文化期以前の石器群—」『古代文化』Vol.55-4、3 - 16 頁。
- 佐藤宏之 2004 「(2) 石器の形態と機能」『千葉県の歴史—資料編考古 4 (遺跡・遺構・遺物)—』、126 - 141 頁。
- 佐藤宏之 2005a 「北海道旧石器文化を俯瞰する—北海道とその周辺—」『北海道旧石器文化研究』第 10 号、137 - 146 頁、北海道旧石器文化研究会。
- 佐藤宏之 2005b 「日本列島の自然史と人間」『日本の地誌 1 日本総論Ⅰ (自然編)』、80 - 94 頁、朝倉書店。
- 佐藤宏之 2006 「日本旧石器時代編年研究の進展—シンポジウムを通じて—」『旧石器時代の地域編年の研究』363 - 370 頁、同成社。
- 佐藤宏之 2007a 「第 1 章 分類と型式」『ゼミナール旧石器考古学』15 - 31 頁、同成社。
- 佐藤宏之 2007b 「日本旧石器文化の課題」『季刊考古学』第 100 号、19 - 22 頁、雄山閣。

- 佐藤宏之 2008 「序論 縄文化の構造変動—更新世から完新世へ—」『縄文化の構造変動』、1—12頁、六一書房。
- 佐藤雅一 2001 「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望—後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡—」『先史考古学論集』第11集、1—52頁、安斎正人編集・発行。
- 佐藤雅一・新田康則ほか 2000 「新潟県津南町・平成11年度調査成果—旧石器時代～縄文時代初頭に関する調査—」『第12回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』、71—79頁。
- 佐藤雅一・山本克ほか 2001 「平成12年度 新潟県津南町発掘調査の成果」『第13回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』、79—87頁。
- 佐藤良二 1989 「近畿地方におけるナイフ形石器群の変遷」『旧石器考古学』38、121—132頁。
- 沢田 敦 1994 「新潟県の様相」『群馬の岩宿時代の変遷と特色 予稿集』、61—67頁、笠懸野岩塾文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会。
- 沢田伊一郎・長屋幸二 1990 「岐阜県嵩川流域の旧石器」『旧石器考古学』41、87—90頁。
- 沢田伊一郎 1992a 「各務原台地とその周辺の旧石器 (1)」『旧石器考古学』44、55—74頁。
- 沢田伊一郎 1992b 「各務原台地とその周辺の旧石器 (2)」『旧石器考古学』45、79—84頁。
- 沢田伊一郎 1993 「各務原台地とその周辺の旧石器 (3)」『旧石器考古学』46、83—93頁。
- 沢田伊一郎・橋詰佳治 1994 「岐阜県における瀬戸内技法の様相 (1)」『旧石器考古学』49、72—77頁。
- 渋谷孝雄 1992 「東北地方における石刃技法出現期の石器群について」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』、173—208頁、加藤稔先生還暦記念会。
- 渋谷孝雄 1994 「東北地域について」『考古学ジャーナル』370、9—14頁。
- 渋谷孝雄 2003 「山形県金谷原遺跡・お仲間林遺跡の石刃製作」『考古学ジャーナル』504、7—11頁。
- 渋谷孝雄・大川貴弘 2000 「山形県榎ノ内F遺跡の発掘調査」『第14回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、26—41頁。
- 白石純・小林博昭 1998 「蒜山原笹畝遺跡第2地点発掘調査概報」『自然科学研究所研究報告』第23号、25—50頁、岡山理科大学。
- 白石浩之 1974 「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』第26巻第1号、86—93頁。
- 白石浩之 1976 「東北日本におけるナイフ形石器変遷の素描」『神奈川考古』第1号、31—45頁、神奈川考古同人会。
- 白石浩之 1983 「考古学と火山灰層序」『第四紀研究』第22巻第3号、185—198頁。
- 白石浩之 1984 「旧石器時代における角錐状石器の様相—とくに九州地方を中心として—」『大平台史窓』5、1—11頁。
- 白石浩之 1997 「九州地方の石槌石器群の様相について」『九州旧石器』第3号、111—112頁。
- 白石浩之 2002 「角錐状石器と石槍の比較研究」『國學院大学考古学資料館紀要』第19輯、1—16頁、國學院大学考古学資料館。
- 白石浩之・荒井幹夫 1976 「茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷」『考古学研究』第23巻第2号、9—24頁。
- 進藤貴和子 1995 「磐田原台地の岩宿時代遺跡と石器群の編年」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』、293—332頁、静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会。
- 杉原荘介 1956 「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座3 縄文文化』、1—42頁、河出書房。
- 杉原荘介・戸沢充則 1962 「佐賀県伊万里市平沢良遺跡の石器文化」『駿台史学』第12号、10—35頁。
- 杉原敏之 2004 「AT降灰後の西北九州」『九州旧石器』第8号、77-88頁。
- 杉原敏之 2005 「列島西端における「角錐状石器」の出現」『地域と文化の考古学1』明治大学文学部考古学研究室編、91—106頁、六一書房。
- 鈴木 暁 1999 「新潟県新発田市坂ノ沢C遺跡」『第12回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、39—47頁、加藤稔発行。
- 鈴木 暁 2001 「新発田市二タ子沢B遺跡の瀬戸内系石器群」『北越考古学』第12号、68—72頁、北越考古学研究会。

- 鈴木忠司 1988 「聚落・日本先土器時代の食糧と生業」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第1集、1-40頁、財団法人京都文化財団。
- 鈴木忠司・片田良一 1979 「初矢遺跡採集のナイフ形石器」『岐阜県考古』第7号、1-7頁。
- 須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸地方におけるV・IV下層段階の石器群一列島内対比の視点から」『石器文化研究』5、451-464頁。
- 須藤隆司 2005 「杉久保型・砂川型ナイフ形石器と男女介型有槌尖頭器一基部・側縁加工尖頭器と両面加工尖頭器の技術構造論的考察」『考古学』Ⅲ、73-100頁、安齋正人編集・発行。
- 諏訪間 順 2000 「V・IV下層段階の石器群の範囲一最終氷期最寒冷期に適応した地域社会の成立」『石器文化研究』5、353-566頁。
- 諏訪間 順 2002 「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』Vol.72 No.6、636-643頁、岩波書店。
- 石器文化研究会 1991 「石器文化研究3」。
- 石器文化研究会 1995 「石器文化研究5」。
- 芹沢長介 1957 「考古学ノート 先史時代(1) 一無土器文化」日本評論新社。
- 芹沢長介 1963 「無土器時代の地方色」『国文学 解釈と鑑賞』第28巻5号、19-27頁、至文堂。
- 芹沢長介 1967 「日本における旧石器の層位的出土例とC14年代」『日本文化研究所研究報告』第3集、59-109頁、東北大学日本文化研究所。
- 芹沢長介・麻生優 1953 「北信・野尻湖底発見の無土器文化(予報)」『考古学雑誌』第39巻2号、26-33頁。
- 前・中期旧石器問題調査研究特別委員会 2003 「前・中期旧石器問題の検証」日本考古学協会。
- 高尾好之 1994 「愛鷹山南麓・箱根西麓の後期旧石器時代編年試案」『地域と考古学 向坂綱二先生還暦記念論集』、1-29頁、向坂綱二先生還暦記念論集刊行会。
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』、61-102頁、同成社。
- 高橋 桂 1963 「北信濃小坂遺跡の調査」『考古学雑誌』第48号3巻、61-71頁。
- 高橋啓一 2007 「日本列島の鮮新-更新世における陸上哺乳動物相の形成過程」『旧石器研究』第3号、5-14頁。
- 高橋啓一 2008 「後期更新世の環日本海地域における大型哺乳動物相の変遷」『環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動』、68-81頁、総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「日本列島における人間・自然相互関係の歴史的・文化的検討」サハリン・沿海州班。
- 高橋章司 2001 「翠島岡遺跡の技術と構造」『翠島岡遺跡発掘調査報告書』、192-221頁、羽曳野市教育委員会。
- 多田 仁 1997 「中・四国地方における角錐状石器の様相」『九州旧石器』第3号、73-92頁。
- 多田隆治 1997 「ダンスガード・サイクル 突然かつ急激な気候変動と日本海海洋変動」『科学』Vol.67 No.8、597-605頁、岩波書店。
- 橘 昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3、1-69頁、別府大学考古学研究会。
- 橘 昌信 1990 「AT(始良Tn火山灰)上位のナイフ形石器文化一宮崎県における最近の調査例から」『史学論叢』21、35-52頁、別府大学史学研究会。
- 橘 昌信・萩原博文 1983 「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究』第22巻第3号、165-176頁。
- 田中耕作・鈴木 暁 1998 「新潟県新発田市坂ノ沢C遺跡の調査概要」『旧石器考古学』56、89-91頁。
- 田中耕作・鈴木 暁 2000 「新発田市ニタ子沢A遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第12回大会 研究発表会発表要旨』、28-31頁、新潟県考古学会。
- 谷 和隆 2000 「第7章 第2節 日向林1石器文化の剥片石器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15-信濃町内その1 一 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代本文編』、262-267頁、日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター。

- 田村 隆 1989 「二項的モードの推移と巡回」『先史考古学研究』第2号、1-52頁、阿佐ヶ谷先史学研究会。
- 田村 隆 1992 「遠い山・黒い石―武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察―」『先史考古学論集』第2集、1-46頁、安斎正人編集・発行。
- 田村 隆 2001 「重層的二項性と交差変換―端部整形石器産出の検出と東北日本後期旧石器石器群の生成―」『先史考古学論集』第7集、1-48頁、安斎正人編集・発行。
- 田村 隆 2006 「この石はどこからきたか―関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて―」『考古学』Ⅲ、1-72頁、安斎正人編集・発行。
- 田村 隆・国武貞克・吉野真如 2003 「下総―北総回廊外縁部の石器石材（第1報）―特に珪質頁岩の分布と産状について―」『千葉県史研究』第11号、143-153頁、千葉県。
- 塚田松雄 1984 「日本列島における約2万年前の植生図」『日本生態学会誌』34巻2号、203-208頁。
- 津久井雅志 1984 「大山火山の地質」『地質学雑誌』Vol.90、643-658頁。
- 辻 誠一郎 1985 「火山活動と古環境」『岩波講座日本考古学2 人間と環境』、289-317頁、岩波書店。
- 辻 誠一郎 1991 「自然と人間―AT前後の生態系をめぐる諸問題―」『石器文化研究3』、255-230頁。
- 辻 誠一郎 2001 「縄文の生態系と人」『NHKスペシャル日本人はるかな旅』第3巻、112-126頁、NHK出版。
- 辻 誠一郎 2002 「日本列島の環境史」『日本の時代史1 倭国誕生』、244-278頁、吉川弘文館。
- 辻 誠一郎 2004 「地球時代の環境史」『歴史研究の最前線 vol.2 環境史研究の課題』、40-70頁、総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館。
- 辻 誠一郎 2008 「更新世から完新世へ―環境変動と生態系の構造変動―」『縄文化の構造変動』、13-32頁、六市書房。
- 辻誠一郎・小杉正人 1991 「始良 Tn 火山灰(AT) が生態系に及ぼした影響」『第四紀研究』第30巻第5号、419-426頁。
- 東北学院大学佐川ゼミナール 2005 「宮城県賀茂沢遺跡 2005 年度発掘調査の成果」『第19回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』、57-70頁。
- 富永直樹 2004 「佐賀県岡本遺跡 LocA および周辺遺跡出土石器群の再検討」『Stone Sources』、9-22頁、石器原産地研究会。
- 中川和哉 1995 「西日本の角錐状石器をめぐる諸問題」『旧石器考古学』50、35-46頁。
- 長岡信治 2004 「西北九州の無斑晶質安山岩類の産状と石器石材としての可能性」『Stone Sources』No.4、1-4頁。
- 長崎潤一 1987 「石斧の形態変化について―接合資料を中心として―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊（哲学・史学編）』14、71-78頁。
- 中村孝三郎 1971 「旧石器時代の石器」『越後の石器』、19-23頁、学生社。
- 中村雄紀 2006 「後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相―愛鷹・箱根第3期・第4期の遺跡群―」『東京大学考古学研究室研究紀要』第20号、1-36頁。
- 中村由克 1986 「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』第38巻第4号、1-16頁。
- 中村由克 1995 「長野・新潟における石器石材について」『石器石材―北関東の原石とその流通を中心として―』、46-49頁、笠懸野尻湖文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会。
- 中村由克・中村敦子 1994 「信濃町上ノ原遺跡の第2次調査」『第6回 長野県旧石器文化研究交流会―発表資料―』、26-32頁。
- 長屋幸二 2003 「岐阜市日野遺跡瀬戸内技法接合資料に用いられている石材について」『東海石器研究』第1号、32-37頁。
- 長屋幸二 2005 「東海地域の集団―石材から見た集団―」『東海石器研究』第3号、16-20頁。
- 那須孝梯 1985 「先土器時代の環境」『岩波講座日本考古学』2、51-109頁、岩波書店。
- 西秋良宏 1998 「第1章 解説」『石器研究入門』、30-31頁、クバプロ。

- 西秋良宏 2004 「動作連鎖」『現代考古学事典』、325 - 329 頁、同成社。
- 西井幸雄 1996 「V～IV下層の細分」『石器文化研究』5、341 - 352 頁。
- 西川 宏・杉野文一 1959 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』第3集、1 - 9 頁、古代吉備研究会。
- 丹羽野 裕 1991 「鳥根県における旧石器時代研究の現状と課題」『鳥根考古学』第8集、57 - 66 頁。
- 根鈴輝雄 1991 「鳥取県の旧石器研究」『鳥根考古学』第8集、51 - 56 頁。
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地IV・V上層段階の石器群」『旧石器考古学』51、19 - 36 頁。
- 野口 淳 2005 「後期旧石器時代第Ⅲ期の石器群構造とナイフ形石器一殿山からの視点一」『上尾市殿山遺跡シンポジウム—石器が語る2万年—』、262 - 276 頁、埼玉考古学会・上尾市教育委員会。
- 野尻湖人類考古グループ 1987 「野尻湖発掘の考古学的成果第1集 野尻湖遺跡群の旧石器文化1」野尻湖人類考古グループ。
- 野村亮太郎・田中眞吾 1986 「兵庫県東部の山間低地に発見された大山起源の火山灰層」『第四紀研究』第24巻第4号、301 - 307 頁。
- 萩原博文 1994 「九州における角錐状石器の編年と地域的特徴」『古代文化』第46巻第9号、31 - 40 頁。
- 萩原博文 1995 「平戸の旧石器時代」『平戸市史・自然考古編』、223 - 318 頁、平戸市史編集委員会。
- 萩原博文 1996 「西南日本後期旧石器時代後半期における石器群の構造変容」『考古学研究』第43巻第3号、62 - 85 頁。
- 秦 昭業 2003 「東北地方の珪質頁岩石材環境」『考古学ジャーナル』499、8 - 11 頁、ニュー・サイエンス社。
- バターソン〈磯野直秀・磯野裕子訳〉1982 『現代の進化論』岩波書店。
- 服部隆博 1991 「AT 降灰前後の様相—第Ⅵ層段階石器群の様相と変遷過程を中心として—」『石器文化研究』3、271 - 274 頁。
- 林 茂樹・樋口昇一ほか 1966 「杉久保 A 遺跡緊急発掘調査報告—長野県上水内郡信濃町野尻湖底—」『長野県考古学会誌』第八号、1 - 20 頁、長野県考古学会。
- 比田井民子 1990 「角錐状石器の地域的動態と編年の予察」『古代』第90号、1 - 37 頁、早稲田大学考古学会。
- 平口哲夫・松井政信・榎田 誠 1984 「福井県三国町西下向遺跡の横剥ぎ技法—主要石器類の定性分析を中心に—」『旧石器考古学』28、5 - 18 頁。
- 藤田 淳 1992 「金谷原遺跡出土石器群の研究」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』、293 - 339 頁、加藤稔先生還暦記念会。
- 藤野次史 1996 「広島県冠遺跡群出土の角錐状石器」『広島大学博物館研究報告』第2号、87 - 103 頁、広島大学研究・教育総合資料館設立準備委員会。
- 藤野次史 2006 「中・四国、近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』、173 - 206 頁、同成社。
- 藤野次史・保坂康夫 1983 「西瀬戸内における瀬戸内技法の様相」『旧石器考古学』26、103 - 129 頁。
- 藤森栄一・戸沢充則 1962 「茶白山石器文化」『考古学集刊』1 - 4、1 - 20 頁。
- 藤原妃敏 1983 「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤—石刃石器群を中心として—」『考古学論叢』、63 - 90 頁、寧楽社。
- 藤原妃敏 1992 「東北地方後期旧石器時代前半期の一様相」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』、157 - 172 頁、加藤稔先生還暦記念会。
- 藤原妃敏 1999 「福島県における後期旧石器時代研究の現状と課題」『福島県の旧石器時代遺跡』、61 - 71 頁、福島県立博物館。
- 藤原妃敏・柳田俊雄 1991 「北海道・東北地方の様相—東北地方を中心として—」『石器文化研究—シンポジウム AT 降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島対比—』3、63 - 91 頁。
- 保坂康夫 1986 「先土器時代の礫群の分布とその背景」『山梨考古学論集』1、7 - 56 頁。
- 保坂康夫 1996 「遺跡内の空間構造（礫群分布）」『石器文化研究』5、267 - 284 頁。
- 麻柄一志 1984 「日本海沿岸地域における瀬戸内系石器群」『旧石器考古学』28、19 - 35 頁。

- 麻柄一志 1994 「中部地方および東北地方日本海側の瀬戸内系石器群について」『瀬戸内技法とその時代』、73 - 80 頁、中・四国旧石器文化談話会。
- 麻柄一志 2006 『日本海沿岸地域における旧石器時代の研究』雄山閣。
- 麻柄一志・古森政次 1992 「御瀬上遺跡の瀬戸内技法 (1)」『旧石器考古学』45、61 - 72 頁。
- 麻柄一志・古森政次 1993 「御瀬上遺跡の瀬戸内技法 (2)」『旧石器考古学』46、47 - 53 頁。
- 馬龍亮道・長野真一 2006 「城ヶ尾遺跡の再検討—後期旧石器時代第Ⅱ文化層～第Ⅲ文化層の石器群を中心として—」『縄文の森から』第4号、9 - 25 頁、鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 松藤和人 1974 「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』、138 - 163 頁、学生社。
- 松藤和人 1979 「再び『瀬戸内技法について—瀬戸内技法第一工程を中心に—』」『二上山・桜ヶ丘遺跡』、203 - 252 頁、奈良県教育委員会。
- 松藤和人 1980 「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21、213 - 259 頁、旧石器文化談話会。
- 松藤和人 1981 「西日本における船底形石器の編年的予察—近畿・瀬戸内地方の出土例を中心に—」『旧石器考古学』22、1 - 26 頁。
- 松藤和人 1982 「九州地方における国府系石器群」『同志社大学考古学シリーズⅠ 考古学と古代史』、81 - 94 頁、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 松藤和人 1985 「瀬戸内技法・国府石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』30、119 - 134 頁。
- 松藤和人 1992 「大阪平野部における旧石器編年研究に寄せて」『旧石器考古学』44、11 - 23 頁。
- 松藤和人・森川 実 2001 「宮崎県赤木遺跡における瀬戸内技法—接合資料1の分析を中心に—」『旧石器考古学』61、61 - 80 頁。
- 松本 茂 2008 「九州地方における国府石器群の来歴と伝播論」『伝播を巡る構造変動』、32 - 46 頁、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「日本列島北部の更新世／完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究」グループ。
- 三浦知徳 2005 「瀬戸内系石器群拡散の荷担者像に関する一私案」『上尾市殿山遺跡シンポジウム—石器が語る2万年—』、241 - 261 頁、埼玉考古学会・上尾市教育委員会。
- 光石鳴巳 2005 「近畿地方における『ナイフ形石器文化終末期』の一様相—馬見二ノ谷遺跡をめぐって—」『石器文化研究』12、41 - 49 頁。
- 宮 宏明 1985 「美里洞窟遺跡出土の台形椀石器について」『考古学ジャーナル』244、24 - 26 頁。
- 宮坂 清 1994 「角錐状石器形態論」『中部高地の考古学Ⅳ 長野県考古学会30周年記念論文集』、11 - 34 頁、長野県考古学会。
- 宮崎県旧石器文化談話会 2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66、47 - 62 頁。
- 宮田栄二 2005 「旧石器時代の編年的研究—東南九州—」『公開シンポジウム「旧石器時代の地域編年とその比較」予稿集』、49 - 65 頁、東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室。
- 宮田栄二 2006a 「九州東南部の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』、241 - 274 頁、同成社。
- 宮田栄二 2006b 「剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について—南九州における最新の調査成果から—」『縄文の森から』第4号、27 - 36 頁、鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 宮塚義人・矢島國雄・鈴木次郎 1974 「神奈川縣本蓼川遺跡の石器群について」『史観』3、1 - 22 頁、早稲田大学史学会。
- 村木 敏 2007 「岩手県奥州市岩洞遺跡発掘調査」『第21回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、1 - 5 頁。
- 森川 実 2003 「第9章 第2節 八尾南遺跡第6地点の接合資料」『粟生間谷遺跡 旧石器・縄紋時代編』、197 - 218 頁、財団法人大阪府文化財センター。
- 森川 実 2008 「瓜破台地の旧石器と接合資料」『考古学ジャーナル』№575、6 - 9 頁。
- 森先一貴 2004a 「杉久保型尖頭形石器の成立とその背景—東北日本日本海側石器群の批判的再検討—」『考古学』Ⅱ、41 - 75 頁、

安斎正人編集・発行。

- 森先一貴 2004b 「杉久保型石器群における石材消費戦略の諸特徴」『第16回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム・杉久保遺跡の石器群をめぐる諸問題』予稿集』長野県旧石器文化研究交流会・野尻湖ナウマンゾウ博物館、110-116頁。
- 森先一貴 2005 「国府石器群の成立—大阪平野周辺部石器群再考—」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』、111-127頁、大阪大学考古学研究室。
- 森先一貴 2006 「近畿・瀬戸内地方の石器群編年研究について—森川・氏家論文へのコメントに代えて—」『石器文化研究』13、55-62頁。
- 森先一貴 2007a 「角錐状石器の広域展開と地域間変異—西南日本後期旧石器時代後半初頭の構造変動論的研究—」『旧石器研究』第3号、85-109頁。
- 森先一貴 2007b 「東北地方後期旧石器時代前半期研究の諸問題—特に台形様石器の分類と型式を巡って—」『秋田考古学』第51号、1-13頁、秋田考古学協会。
- 森先一貴 2007c 「第12章 伝播と拡散」『旧石器考古学を知る』、209-222頁、同成社。
- 森先一貴 2008a 「東北日本・日本海側における国府系石器群の形成過程」『伝播を巡る構造変動』、14-32頁、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「日本列島北部の更新世／完新世移行期における居住形態と文化形成に関する研究」グループ。
- 森先一貴 2008b 「九州地方における国府系石器群の伝播と形成」『考古学ジャーナル』No.575、10-14頁。
- 森先一貴 2008c 「潮流と展望：東京大学公開シンポジウム〈伝播を巡る構造変動—国府石器群と細石刃石器群—〉」『石器文化研究』14、57-61頁。
- 森先一貴・山崎真治 2006 「高知県香美市佐野楠山遺跡採集の石器について」『旧石器考古学』68、61-68頁。
- 守田益宗・崔基龍・日比野祐一郎 1998 「中部・関東地方の植生史」『日本列島植生史』、92-104頁、朝倉書店。
- 森山栄一・吉留秀之・杉原敏之 2001 「第一章旧石器時代」『筑紫野市史 資料編(上)』筑紫野市。
- 矢島國雄 1985 「尖頭器状石器の性格—いわゆる「角錐状石器」、尖頭器様石器の再検討—」『論集日本原史』、93-111頁、吉川弘文館。
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号、1-30頁。
- 柳田俊雄 1978 「岩戸遺跡の遺物と層序」『岩戸』東北大学文学部考古学研究会。
- 柳田俊雄 1983 「大分県岩戸遺跡第1文化層出土の石器群の分析とその位置づけ」『考古学論叢』、芹沢長介遺著記念論文集刊行会編、25-62頁。
- 柳田俊雄 1985 「大分県岩戸1の瀬戸内技法」『旧石器考古学』30、39-48頁。
- 柳田俊雄 1995 「東北地方南部の後期旧石器時代前半期の石刃技法—会津笹山原遺跡群の2石器群の検討から—」『旧石器考古学』50、3-15頁。
- 柳田俊雄 2006 「東北地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』、141-172頁、同成社。
- 柳田俊雄・須藤 隆・阿子島 香 2000 「山形県新庄市上ミ野人遺跡の第3次発掘調査」『第14回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、42-49頁、加藤稔発行。
- 山口卓也 1983 「所謂瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離技術伝統について」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』、919-950頁、関西大学。
- 山口卓也 1994 「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代 本編』、185-198頁、中・四国旧石器文化談話会。
- 山下実・富永直樹 1984 「佐賀県東分遺跡の旧石器」『旧石器考古学』29、51-76頁。
- 山田晃弘 1999 「第1部 列島各地域の研究結果と展望 東北地方」『石器文化研究』7、11-20頁。
- 吉井雅男 2000 「新潟県北部地域における国府系石器群の変容について—非安山岩系石材を用いる石器群の分析から—」

『MICROBLADE』創刊号、17-31頁、ハケ岳旧石器研究グループ。

吉留耕太郎 2007 「石器原料の獲得・消費と移動領域の編成—後期旧石器時代前半期における珪質頁岩地帯からの一試論—」『旧石器研究』第3号、35-58頁。

吉留秀敏 1994 「九州の瀬戸内技法を含む石器群」『瀬戸内技法とその時代』、147-152頁、中・四国旧石器文化談話会。

吉留秀敏 2004 「九州地域の様相」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』、99-108頁、中・四国旧石器文化談話会。

ルロワ=グーラン, A. (荒木 亨訳) 1973 『身ぶりと言葉』新潮社。

渡辺哲也 1994 「信濃町東裏遺跡の調査」『第6回 長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』13-17頁。

渡辺 仁 1985 『ヒトはなぜ立ちあがったか—生態学的仮説と展望—』東京大学出版会。

綿貫俊一 1982 「東九州における瀬戸内系の人類遺物」『旧石器考古学』25、145-179頁。

Binford, L. R. 1979. Organization and Formation Processes: Looking at Curated Technologies. *Journal of Anthropological Research*, 35(3): 255-273.

Binford, L. R. 1980. Willow Smoke and Dog's Tails: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation. *American Antiquity* 45(1): 4-20.

Bleed, P. 1986. The optimal design of hunting weapons: maintainability or reliability. *American Antiquity*, 51(4): 737-747.

Clark, J. D. G. 1977 *World Prehistory*. 3rd ed. Cambridge University Press, Cambridge.

Gamble, C. 1986. *The Palaeolithic settlement of Europe*. Cambridge, Cambridge University Press.

Hayden, B., N. Franco., J. Spafford. 1996. Evaluating Lithic Strategies and Design Criteria. In *Stone Tools: theoretical insights into human prehistory*, pp.9-50, New York, Plenum Press.

Izuho, M. and H. Sato 2008. Landscape evolution and culture changes in the Upper Paleolithic of Northern Japan. In Derevianko, A. P., and Shunkov, M. V. (eds.) *The Current Issues of Paleolithic Studies in Asia*. Publishing Department of the Institute of Archaeology and Ethnography SB RAS, Novosibirsk, pp.69-76.

Iwase, A. and K. Morisaki 2008. Use-Wear Analysis of Kamiyama-type Burins in Sugikubo Blade Industry, Central Japan: New Evidence for Versatile Lithic Tool Use. *Current Research in the Pleistocene*, vol.25: 47-50.

Morisaki, K. 2006. The Kou Point and Kou Industry in the Upper Paleolithic of Southwestern Japan. *Current Research in the Pleistocene*, vol.23: 16-18.

Ono, A., H. Sato, T. Tsutsumi, Y. Kudo, 2002. Radiocarbon Dates and Archaeology of the Late Pleistocene in the Japanese Island. *Radiocarbon*, 44(2): 477-494.

Torrence, R. 1983. Time budgeting and hunter-gatherer technology. In *Hunter-gatherer economy in prehistory: A European perspective*, pp.11-22, Cambridge University Press.

【発掘調査報告書・都府県市史】

愛知県史編さん委員会 2002 『愛知県史 資料編1 旧石器・縄文』愛知県。

青木豊・内川隆志・高橋真実編 1993 『柳又遺跡C地点』開田村教育委員会・柳又遺跡C地点発掘調査団。

青木豊・金山喜昭ほか 1984 『橋本遺跡VI 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会。

秋山宏・渡部明夫 1984 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告I 羽佐島遺跡(1)』香川県文化財保護協会。

安里 進・竹原伸次編 1988 『南花田遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会。

麻生敏隆 1986 『後田遺跡(旧石器編)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

麻生敏隆・桜井美枝編 2004 『波志江西宿遺跡Ⅱ(縄文時代・旧石器時代編)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

阿部昭典 2000 『向原A遺跡』『向原B遺跡』『津南町遺跡発掘調査概要報告書』、22-23頁、津南町教育委員会。

阿部朝衛編 2002 『荒川台遺跡—1989年度調査—』帝京大学文学部史学科。

阿部勝則 2000 『峠山牧場I遺跡B地区発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

阿部司・柳田俊雄 1998 『笹山原遺跡群発掘調査概要報告書Ⅱ』会津若松市教育委員会。

- 阿部祥人・五十嵐 彰編 1991 『お仲間林遺跡 1986』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 阿部祥人ほか編 1995 『お仲間林遺跡の研究—1992年発掘調査—』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 有馬孝一・馬鹿亮道ほか編 2003 『城ヶ尾遺跡 東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財センター。
- 安藤史郎・堤隆編 1984 『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市教育委員会。
- 安藤利光・島木良浩 2007 『中ノ迫第Ⅰ遺跡（一次・二次）』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 池田政志編 2000 『三ツ子沢中遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 石川恵美子編 1991 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ—小出Ⅰ遺跡・小出Ⅱ遺跡・小出Ⅲ遺跡・小出Ⅳ遺跡—』秋田県教育委員会。
- 石川治夫編 1982 『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』沼津市教育委員会。
- 石本弘・松本雅史ほか編 2000 『福島県文化財センター白河館（仮称）遺跡発掘調査報告 一里段A遺跡』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。
- 和泉昭一 1998 『上ノ野遺跡発掘調査報告書』二ツ井町教育委員会。
- 一瀬和夫編 1990 『南河内における遺跡の調査Ⅰ 旧石器時代基礎資料編Ⅰ』財団法人大阪府文化財センター。
- 伊藤恒彦・松浦有一郎編 1983 『自由学園南遺跡—東京都東久留米市所在の先土器時代・縄文時代遺跡の調査—』自由学園。
- 伊藤徳広・石橋裕子 2008 『原田遺跡（4）—旧石器時代の調査—』島根県教育庁埋蔵文化財センター。
- 稲田孝司編 1988 『恩原遺跡 旧石器人の生活跡をさぐる』恩原遺跡発掘調査団・上斎原村教育委員会。
- 稲田孝司編 1996 『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団。
- 井上和人・金子裕之・佐川正敏・森本晋・大場正善 2002 『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告—旧石器時代編（法華寺南遺跡）』奈良文化財研究所。
- 岩崎新輔・宮田栄二ほか 2007 『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査報告書』出水市教育委員会。
- 岩崎泰一 1990 『旧石器時代の遺構と遺物』『堀下八幡遺跡』、10—127頁、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 岩崎泰一 2004 『今井三騎堂遺跡（旧石器時代編）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 岩崎泰一ほか 1989 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 岩崎泰一・津島秀章 2007 『今井見切塚遺跡（旧石器時代編）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 磐田市史編集委員会編 1993 『磐田市史通史編上巻 原始・古代・中世』磐田市。
- 上田薫・砂田佳弘編 1986 『代官山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター。
- 植田千佳穂・梅本健治ほか 1983 『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）』広島県教育委員会。
- 氏家敏之・栗林誠治ほか 2001 『東段地区』『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告17』財団法人徳島県文化財センター。
- 鶴戸周成・金丸琴路編 2005 『唐木戸第3遺跡 東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書13』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 大竹幸恵・勝見謙ほか 2001 『県道男女倉・長門線改良工事に伴う発掘調査報告書—鷹山遺跡群第Ⅰ遺跡及び迫分遺跡群発掘調査—』長門町教育委員会。
- 大竹憲昭・須藤隆司ほか 1982 『下里本邑遺跡』下里本邑遺跡調査会。
- 大野憲司・高橋忠彦・小林克 1985 『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財センター。
- 大野憲司ほか 1986 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ—石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅴ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石

- 坂台区遺跡・松木台Ⅲ遺跡』秋田県教育委員会。
- 大野康男・田村隆 1991 『八千代市白幡前遺跡』財団法人千葉県文化財センター。
- 大保秀樹編 2002 『前原和田遺跡 東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』鹿児島県埋蔵文化財センター。
- 大船孝弘編 1978 『郡家今城遺跡発掘調査報告書―旧石器時代の調査―』高槻市教育委員会。
- 大山博志編 2006 『東睦原第1遺跡(三・四次調査) 東九州自動車道(都農～西都賀)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書33』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 岡崎里美・岡本康司 1987 『真砂遺跡』真砂遺跡調査会。
- 緒方勉編 1979 『下城遺跡Ⅰ』熊本県教育委員会。
- 緒方勉編 1980 『下城遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会。
- 小川 賢編 2000 『香西南西打遺跡』高松市教育委員会。
- 小久江隆史・新田浩三編 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 取手和田戸遺跡(空港No.60)』財団法人千葉県文化財センター。
- 小山内透ほか 1992 『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―鴨子台・八幡台遺跡―』秋田県教育委員会。
- 小田静夫編 1980 『小金井市西之台遺跡B地点』東京都教育委員会。
- 小田島恭二・浅田知世編 1984 『和賀仙人遺跡発掘調査報告書』和賀町教育委員会。
- 落合章雄 2000 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―白井町一本松南遺跡―』財団法人千葉県文化財センター。
- 小野和之・中隆之ほか 1985 『見立瀬井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会・群馬県教育委員会。
- 鏡石町史編集委員会 1982 『鏡石町史 第二巻資料編Ⅰ』鏡石町。
- 柏倉亮吉編 1964 『山形県の無土器文化』山形考古友の会。
- 柏倉亮吉・加藤 稔編 1969 『山形県史 考古資料編』山形県。
- 加藤 稔 1964 『山屋・東山遺跡』新庄市教育委員会。
- 加藤稔編 1976 『越中山遺跡』致道博物館。
- 加藤稔編 1979 『弓張平B遺跡 第3・4次発掘調査報告書』山形県教育委員会。
- 加藤稔・米地文夫・渋谷孝雄 1973 『山形県岩井沢遺跡の研究―小国盆地の旧石器時代―』
- 加藤有次ほか 1978 『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡刊行会。
- 加藤 竜 2004 『龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡』秋田県埋蔵文化財センター。
- 香取正彦・榊原弘二・新田浩三 2007 『船橋市源七山遺跡』財団法人千葉県教育振興財団文化財センター。
- 菊池強一 1988 『上萩森遺跡調査報告書』胆沢町教育委員会。
- 菊池強一ほか 1996 『柏山館跡発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 木崎康弘編 1986 『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県教育委員会。
- 木崎康弘編 1987 『狸谷遺跡』熊本県教育委員会。
- 木崎康弘編 1993 『久保遺跡』熊本県教育委員会。
- 岸本雅敏・松島吉信 1982 『富山県立山町白岩薮ノ上遺跡調査概要(2)』立山町教育委員会。
- 北沼明・日置智ほか編 2004 『名和乙ヶ谷遺跡 名和小谷遺跡―一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所。
- 北村忠昭・米田寛・長村克稔 2004 『早坂平遺跡発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

- 絹川一徳編 2000 『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会。
- 木下 修 1993 『春園遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 26』福岡県教育委員会。
- 木村弘之編 1992 『平成 3 年度 道東古墳群発掘調査報告書』静岡県磐田市教育委員会
- 草雄良雄・山田洋一郎編 2003 『北牛牧第 5 遺跡・銀座第 3A 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 久保弘幸・藤田淳編 1990 『七日市遺跡(Ⅰ) 旧石器時代遺跡の調査』兵庫県氷上郡春日町。
- 久保監美朗 1994 『椎ヶ丸～芝生遺跡』『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 6』財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 窪田恵一・太田賢一・安達浩編 1995 『丸山東遺跡Ⅰ』東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会。
- 窪田忍・佐藤通子 2002 『野田山遺跡』名取市教育委員会。
- 倉岡靖浩・興紹慶一・金丸琴路 2005 『東睦原第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 栗原伸好・新開基史編 2004 『川田大河内遺跡 県道 22 号(横浜伊勢原) 線道路改良事業(川田バイパス建設)に伴う発掘調査』財団法人かながわ考古学財団。
- 栗山遺跡第 2 地点調査会 1994 『栗山遺跡第 2 地点』東京都住宅局。
- 慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編 1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第 2 巻 岩宿時代』慶応義塾。
- 小泉信司 1994 『日吉谷遺跡』『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 27』財団法人徳島県埋蔵文化財センター。
- 後藤幹彦編 1995 『大野地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 勢方池迫遺跡・光昌寺遺跡』大分県大野町教育委員会。
- 齊藤毅編 1991 『和良比遺跡発掘調査報告書Ⅰ』財団法人印旛郡市文化財センター。
- 阪田正一・橋本勝雄 1984 『八千代市権現後遺跡』財団法人千葉県文化財センター。
- 阪田正一・藤岡孝司 1985 『八千代市北海道遺跡』財団法人千葉県文化財センター。
- 佐竹智光 2008 『中ノ迫第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 佐藤慎宏・大川貴弘 2003 『八森遺跡先史編』八幡町教育委員会。
- 佐藤庄一・黒坂雅人 1995 『お仲間林遺跡発掘調査報告書』財団法人山形県埋蔵文化財センター。
- 佐藤雅一 1997 『神山遺跡群遺跡確認調査概要報告書—国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡確認調査概要報告書—』津南町教育委員会。
- 佐藤雅一 1998 『正面ヶ原 B 遺跡』『堂尻遺跡群試掘調査報告書』、205—214 頁、津南町教育委員会。
- 佐藤雅一ほか 1998 『平成 10 年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会。
- 佐藤雅一ほか 2000 『平成 12 年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会。
- 佐藤雅一ほか 2001 『正面ヶ原 D 遺跡』津南町教育委員会。
- 佐藤雅一・新田廣則 2002 『大原北遺跡群』津南町教育委員会。
- 佐藤竜馬 1996 『郡家田代遺跡』財団法人香川県埋蔵文化財センター。
- 佐藤嘉広編 1993 『北上市和賀町愛宕山遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館
- 沢田 波 1996 『上ノ平遺跡 C 地点』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- 沢田 敦・飯坂盛泰 1994 『上ノ平遺跡 A 地点』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- 沢田敦・坂上有紀 2004 『吉ヶ沢遺跡 B 地点』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- 寒川朋枝編 2006 『南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ 堂園平遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター。
- 寒川朋枝・宮田栄二ほか 2007 『南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅠ 前山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター。

- 実川順一・廣瀬昭弘編 1984 『花沢東遺跡 都営国分寺南町三丁目団地建設に伴う調査』恋ヶ窪遺跡調査会。
- 藤淳一・酒井弘志・宮文子 1994 『公神東遺跡群Ⅰ』財団法人印旛都市文化財センター。
- 信里芳紀 2004 『中間東井坪遺跡・正箱遺跡・八幡遺跡』財団法人香川県埋蔵文化財センター。
- 柴田陽一郎 1984 『此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会。
- 嶋田史子 2007 『前ノ田村上第2遺跡—東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 清水宗昭・栗田勝弘編 1985 『百枝遺跡C地区（昭和59年度）大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書』三重町教育委員会。
- 清水宗昭・高橋信武ほか編 1986 『岩戸遺跡 大分県大野郡清川村所在旧石器時代遺跡第3次発掘調査報告書』清川村教育委員会。
- 下濱貴子編 2004 『八里向山遺跡群』小松市教育委員会。
- 自由学園南遺跡発掘調査団編 1991 『自由学園南遺跡 自由学園南遺跡発掘調査報告書』東久留米市教育委員会。
- 主浜光朗 1995 『上ノ原山遺跡』仙台市教育委員会。
- 白石典之・右島和夫 1986 『旧石器時代の遺構と遺物』『分郷八崎遺跡』北極村教育委員会、30～68頁。
- 新海正博編 2003 『栗生間谷遺跡 旧石器・縄文時代編—国際文化公園都市特定土地区画整備事業に伴う旧石器・縄文時代遺跡の調査』財団法人大阪府文化財センター。
- 菅原俊行 1983 『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会。
- 菅原俊行 2002 『地蔵田遺跡』『秋田市史第6巻 考古・史料編』秋田市。
- 菅原哲文・齋藤健 2008 『地坂台遺跡・下中田遺跡・太郎水野1遺跡・太郎水野2遺跡発掘調査報告書 第二分冊』財団法人山形県埋蔵文化財センター。
- 杉原莊介 1956 『群馬県岩宿発見の石器文化』臨川書店。
- 鈴木暁・田中耕作 1996 『前山遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会。
- 鈴木次郎・白石浩之 1980 『神奈川県埋蔵文化財調査報告18 寺尾遺跡』神奈川県教育委員会。
- 鈴木忠司編 1982 『富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書〈A地点〉』平安博物館。
- 鈴木敏中編 1992 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三島市教育委員会。
- 鈴木敏中・伊藤恒彦・前嶋秀張 1999 『初音ヶ原遺跡』三島市教育委員会。
- 鈴木敏中・芦川忠利・佐々木和子 2002 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』三島市教育委員会。
- 鈴木裕篤・小野信義・袴田稔 1980 『西大曲遺跡発掘調査概報』沼津市教育委員会。
- 隅田 真編 1990 『大門遺跡』建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所・板橋区大門遺跡調査会。
- 諏訪市史編集委員会編 1986 『諏訪市史上巻 原始・古代』諏訪市。
- 妹尾周三 1989 『冠遺跡D地点の調査』財団法人広島県埋蔵文化財センター。
- 関 清・山本正敏・久々忠義編 1983 『県民太閤ランド内遺跡群調査報告(2)』富山県教育委員会。
- 関口博幸編 2008 『大上遺跡Ⅰ—旧石器時代編— 北関東自動車道（伊勢崎—県境）地域並びに（一）香林羽黒線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』東日本高速道路株式会社・群馬県伊勢崎土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 関塚英一編 1985 『出山遺跡Ⅱ 東京都三鷹市大沢出山遺跡発掘調査報告書』三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会。
- 関根唯充ほか 1995 『南葛野遺跡』南葛野遺跡発掘調査団。
- 関野哲夫ほか 1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書 その2—東尾根の先土器・縄文・古墳・奈良時代の調査、中央尾根の先土器・縄文・古墳時代の調査—』沼津市教育委員会。
- 芹沢長介編 1977 『磯山』東北大学文学部考古学研究会。

- 芹沢長介編 1978 『岩戸』東北大学文学部考古学研究会。
- 芹沢長介・中村一明・麻生優編 1959 『神山』津南町教育委員会。
- 船場昌子・杉山隆光編 2008 『田向冷水遺跡—田向土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書3—』八戸市教育委員会。
- 副島和明編 1981 『西輪久道遺跡・鷹野遺跡』長崎県教育委員会。
- 副島和明・伴耕一郎編 1985 『鎌早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会。
- 高尾好之編 1989 『中見代第Ⅰ遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 高尾好之編 1988 『土手上・中身代第Ⅱ・第Ⅲ遺跡発掘調査報告書（足高尾上No.1-6・7遺跡）』沼津市教育委員会。
- 高木 洋編 1987 『日野2 岐阜市日野土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査』岐阜市教育委員会。
- 高野学・高橋章司編 2001 『翠鳥園遺跡発掘調査報告書—旧石器編—』羽曳野市教育委員会。
- 高橋桂・望月静雄編 1981 『太子林・関沢遺跡』飯山市教育委員会。
- 高橋桂・望月静雄ほか編 1991 『国営飯山山地開発関係遺跡発掘調査報告書 新堤遺跡・トノ池南遺跡』飯山市教育委員会。
- 高橋毅介・菊池強一編 1999 『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋学・五十嵐一治 1998 『家の下遺跡(2)』秋田県埋蔵文化財センター。
- 田川肇・副島和明ほか 1988 『百化台広域公園に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 百化台D遺跡』長崎県教育委員会。
- 武谷和彦編 2001 『馬川谷口遺跡Ⅰ区・Ⅱ区』七山村教育委員会。
- 田島 新 1991 『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』財団法人千葉県文化財センター。
- 田島龍太編 1993 『日ノ出松遺跡』唐津市教育委員会。
- 橘 昌信編 1985 『駒形古屋遺跡発掘調査報告書』別府大学附属博物館。
- 橘昌信・牧尾義則ほか編 1992 『駒方津室迫・夏足原遺跡(0地区) 大野地区遺跡群発掘調査報告書』大野町教育委員会。
- 橘昌信・佐藤宏之・山田哲編 2002 『後牟田遺跡』後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会。
- 田中英司・金子直行ほか 1984 『住宅・都市整備公団 浦和南部地区一明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 田中耕作・鈴木暁・渡邊美穂子・伊藤喜代子 2003 『ニタ子沢A遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会。
- 田中 光・藤木 聡ほか編 2004 『野首第Ⅰ遺跡 県道木城高鍋線高速関連道路・河川等緊急整備事業(青木地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 谷口武範・山田洋一郎編 2002 『上ノ原遺跡 東九州自動車道建設(西都—清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIV』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 谷藤保彦編 1992 『房谷戸遺跡Ⅱ』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 田村隆・小林清隆 1987 『松戸市彦八山遺跡』日本鉄道建設公団・財団法人千葉県文化財センター。
- 田村隆編 1986 『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—元割・聖人塚・中山新田Ⅰ—』財団法人千葉県文化財センター。
- 茅野市史編集委員会 1986 『茅野市史上巻 原始・古代』茅野市。
- 趙哲済・田中清美ほか 1997 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅸ』財団法人大阪市文化財協会。
- 立木宏明編 1996 『朝日村文化財報告書第11集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会。
- 立木由理子編 1996 『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。
- 對比地秀行・高杉尚宏編 1982 『嘉留多遺跡・祐中学校7号墳』世田谷区遺跡調査会。
- 土屋 積・大竹憲昭 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 信濃町内その1 貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』(財)長野県文

化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター。

土屋 積・谷 和隆 2000a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 信濃町内その1 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター。

土屋 積・谷 和隆 2000b 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 信濃町内その1 裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター。

辻 信広編 2005 『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会。

堤 隆編 1997 『柏ヶ谷長ラサ遺跡―相模野台地における後期旧石器時代遺跡の調査―』柏ヶ谷長ラサ遺跡調査団。

鶴田典昭・谷和隆ほか 2004 『一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書 信濃町内その3 仲町遺跡』財団法人長野県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

寺田良喜・高杉尚宏ほか 1997 『瀬田遺跡Ⅱ』世田谷区教育委員会。

寺田光一郎編 1998 『中村分遺跡・天台B遺跡・台崎C遺跡試掘調査 県営緊急埋蔵文化財総合整備事業に伴う発掘調査報告書』三島市教育委員会。

富樫泰時編 1977 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』秋田考古学協会。

時任和守・山田洋一郎編 2002 『長岡原遺跡 東九州自動車道(西部～清武間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ』宮崎県埋蔵文化財センター。

土橋由理子編 2003 『北陸自動車道安田土取場関係発掘調査報告書 円山遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。

中川重紀・早瀬のほか編 1995 『大渡Ⅱ遺跡』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

長沢正機編 1977 『南野遺跡発掘調査報告書』新庄市教育委員会・新庄市文化財調査会。

長沢正機編 1982 『山形県新庄市教育委員会報告書6 乱馬堂遺跡発掘調査報告書』新庄市教育委員会。

長友久昭・今丸琴路編 2005 『勘大寺遺跡(一次調査) 東九州自動車道(都農～西部間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書18』宮崎県埋蔵文化財センター。

長野眞一・大保秀樹ほか編 2005 『桐木耳取遺跡 東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』鹿児島県立埋蔵文化財センター。

長野眞一・堂込秀人ほか編 2006 『伏野遺跡 隠道遺跡 杉堀遺跡 仁田尾遺跡 御飯屋跡遺跡 一般国道小山田谷山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター。

永野達郎 2000 『粘地遺跡』喜入町教育委員会。

中原一成編 2004 『一般国道10号末吉IC関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 桐木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター。

中村孝三郎編 1971 『御瀬上遺跡』長岡市立科学博物館。

中村守男・森田誠 1999 『小原野遺跡』大口市教育委員会。

中村雄紀・森先一貴ほか編 2003 『国分寺市№37遺跡発掘調査概報―シーズクリエイティブ株式会社共同住宅建設に伴う調査』国分寺市遺跡調査会。

中村由克編 1995 『貫ノ木遺跡・日向林B遺跡(個人住宅地点)発掘調査報告書』信濃町教育委員会。

中村由克・森先一貴編 2008 『上ノ原遺跡第一5次調査・県道地点一発掘調査報告書』信濃町教育委員会。

西沢隆治 1995 『北大作遺跡発掘調査概報』我孫子市教育委員会。

西山太郎・西川博孝編 1984 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―№7遺跡―』財団法人千葉県文化財センター。

橋本正ほか編 1974 『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会。

- 橋本正 1973 『富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会。
- 橋本正編 1976 『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会。
- 萩原博文 1985 『堤西牟田遺跡』平戸市教育委員会。
- 萩原博文 1989 『牟田ノ原遺跡』平戸市教育委員会。
- 畑宏明編 1985 『湯の里遺跡群』北海道埋蔵文化財センター。
- 羽石智治・会田容弘・須藤 隆編 2004 『最上川流域の後期旧石器文化の研究Ⅰ—上ミ野A遺跡 第1・2次発掘調査報告書—』東北大学大学院文学研究科考古学研究室。
- 早川正一・河野典夫・立田佳美・小島 功編 1999 『岐阜県吉城郡宮川村 宮ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県宮川村教育委員会。
- 林 辰男 1992 『成増との山遺跡』板橋区成増との山遺跡調査会。
- 坂東雅樹・坂詰秀一ほか編 1999 『武蔵台東遺跡』都営川越道住宅遺跡調査会。
- 久富なをみ・中山豪編 1994 『垂水第1遺跡』宮崎市教育委員会。
- 久末康一郎・高杉尚宏ほか 2001 『堂ヶ谷戸遺跡Ⅴ』世田谷区教育委員会。
- 比田井民子・鶴間正昭・小松眞名・伊藤健 1997 『菅原神社台地上遺跡』東京都埋蔵文化財センター。
- 日高広人・竹井眞知子・柳田裕三 2004 『高野原遺跡第5地点』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 平井勝編 1979 『野原遺跡群早風A地点』岡山県文化財保護協会。
- 平川昭夫・廣瀬高文ほか編 1986 『中尾・イラウネ・野台 畑地帯総合土地改良事業・長泉地区第Ⅰ工区埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県東部農林事務所・長泉町教育委員会。
- 平口哲夫編 1983 『西下向遺跡—第1次・第2次発掘調査概要—』三河町教育委員会。
- 廣田吉三郎・前田 顕・河野重義編 1987 『葛原遺跡B地点調査報告書』練馬区遺跡調査会・練馬区教育委員会。
- 福島県文化センター編 1983 『母畑地区遺跡発掘調査報告12 上悪戸遺跡・下悪戸遺跡』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。
- 福島県文化センター編 1987 『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ 三貫地遺跡（原口地区）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター。
- 福田一志編 2000 『根引池遺跡』長崎県江迎町教育委員会。
- 福田英人編 1989 『八尾南遺跡—旧石器出土第3地点—』大阪府教育委員会。
- 福永雄一・真鍋雄一郎 2004 『九養岡遺跡・踊場遺跡・高森遺跡 東九州自動車道建設（末吉IC～国分IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』鹿児島県埋蔵文化財センター。
- 藤田健一・早田勉ほか 2004 『上野林Ⅰ遺跡・上野林E遺跡』安田町教育委員会。
- 藤波啓容・林辰男ほか 1999 『西台後藤田遺跡第1地点発掘調査報告書』都内第二遺跡調査会西台遺跡調査団。
- 藤野次史・中村真理編 2004 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室。
- 藤好史郎 1985 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 西方遺跡』香川県埋蔵文化財研究会。
- 藤原紀敏編 1999 『福島県の旧石器時代遺跡』福島県立博物館。
- 藤原紀敏ほか 1983 『塩坪遺跡発掘調査概要』福島県教育委員会。
- 宝珍伸一郎・松村英之編 2000 『猪野口南幅遺跡』勝山市教育委員会。
- 細田昌史 2006 『森吉B遺跡・二重島A遺跡』北秋田市教育委員会。
- 堀金靖・藤原紀敏 1990 『笹山原遺跡群発掘調査報告書1・2—笹山原№7遺跡発掘調査—』福島県会津若松市教育委員会。
- 堀正人編 1989 『椿洞遺跡』岐阜市教育委員会。

- 前島秀張編 1998 『上ノ池遺跡 平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 松井一明・高野由美子ほか 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』袋井市教育委員会。
- 松浦郁乃・西野秀和編 1999 『能美丘陵東遺跡群Ⅴ いしかわサイエンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人石川県埋蔵文化財センター。
- 松尾吉高 1983 『川原田遺跡』肥前町教育委員会。
- 松藤和人編 1994 『百花台東遺跡—雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』同志社大学文学部文化学科。
- 松村信博・山本純代 2001 『奥谷南遺跡Ⅲ』財団法人高知文化財埋蔵文化財センター。
- 松山和彦ほか 1987 『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター。
- 真鍋昌宏編 1982 『大洲遺跡発掘調査概報』香川県埋蔵文化財保護協会坂出支部。
- 本田秀生 1987 『旧石器時代』『宿東山遺跡』、30—34頁、石川県立埋蔵文化財センター。
- 三島誠・藤根久 2001 『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』財団法人岐阜県文化財保護センター。
- 水ノ江和同編 1994 『県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告5 宗原遺跡』福岡県教育委員会。
- 光石鳴巳編 2006 『馬見二ノ谷遺跡』奈良県立橿原考古学研究所。
- 宮坂孝宏編 1994 『白鳥平B遺跡』熊本県教育委員会。
- 宮下貴浩編 1990 『金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡』宮崎市教育委員会。
- 宮下貴浩編 2004 『県道松元川辺線整備事業（黄田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 冥作遺跡』金峰町教育委員会。
- 宮田栄二編 1992 『一般国道鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅴ） 西丸尾遺跡』鹿児島県教育委員会。
- 村上 拓 1999 『耳取Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 村崎孝宏編 1999 『耳切遺跡—小国地熱発電所計画に伴う埋蔵文化財調査報告—』熊本県教育委員会。
- 村山 繁・佐藤雅一編 1997 『神山遺跡群遺跡確認調査概要報告書』津南町教育委員会。
- 望月静雄 1999 『太子林遺跡第Ⅱ地点概要報告書』長野県飯山市教育委員会。
- 望月由佳子・森嶋富士夫ほか 2003 『大岡元長塚関連遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 森井貞雄・竹原伸次編 2003 『西大井遺跡—縄文時代・後期旧石器時代石器群の調査—』大阪府教育委員会。
- 森下英治 1997 『三条黒島遺跡・川西北七条Ⅰ遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団。
- 森下英治編 2001 『中間西坪遺跡Ⅲ』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財研究会・日本道路公団。
- 森嶋秀一・谷中隆・津野仁・江原英 1998 『寺野東遺跡Ⅰ』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 森嶋稔・川上元編 1975 『男女倉—国道142号新和田トンネル有料道路事業用地内緊急発掘調査報告書』長野県道路公社・和田村教育委員会。
- 八木澤るみ子・桑波田武志・児之原博寿編 2000 『宮ヶ迫遺跡 ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』松元町教育委員会。
- 矢島國雄ほか編 1996 『綾瀬市史9 別編考古』綾瀬市。
- 安田宏市編 1993 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会。
- 柳田宏一・加藤学編 2003 『祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 八尋 実 1984 『船塚遺跡』神埼町教育委員会。
- 山内幹夫・小野忠大ほか 2001 『大谷上ノ原遺跡（1次調査）・新堤入遺跡』福島県教育委員会・財団法人福島県文化財センター。
- 山口逸弘編 1992 『書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。

- 山口卓也編 1991 『板井寺ヶ谷遺跡 旧石器時代の調査』兵庫県教育委員会。
- 山口卓也・成瀬敏郎・芝香寿人 1995 『硯岩南山遺跡』御津町教育委員会。
- 山崎克巳 1997 『勾坂上2遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会。
- 山崎純男・井澤洋一編 1994 『有田・小田部 第19集』福岡市教育委員会。
- 山下秀樹編 1985 『広野北遺跡発掘調査報告書』平安博物館。
- 山田隆一編 1993 『八尾南遺跡Ⅱ—旧石器出土第6地点の調査—』大阪府教育委員会。
- 矢本節朗編 1994 『四街道市御山遺跡(1)』財団法人千葉県文化財センター。
- 矢本節朗・横山仁 1997 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X—天神峰奥之台遺跡(空港№65遺跡)』財団法人千葉県文化財センター。
- 吉川耕太郎編 2006 『縄手下遺跡 一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ』秋田県教育委員会。
- 吉田格・高麗正ほか 1996 『羽根沢台遺跡Ⅱ』三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会。
- 吉田格・高麗正ほか 2004 『天文台構内遺跡Ⅲ 東京都三鷹市大沢天文台構内遺跡発掘調査報告書』東京都北多摩南部建設事務所・三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会。
- 吉田哲・森嶋秀一 2000 『伊勢崎Ⅱ遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』財団法人栃木県文化振興事業団。
- 吉田英敏編 1987 『寺田・日野Ⅰ』岐阜市教育委員会。
- 吉田 充 2006 『二の台長根遺跡発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 吉田充・三浦謙一 1996 『峠山牧場Ⅰ遺跡B地区範囲確認調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 山本 誠・青木哲哉ほか編 2004 『七日市遺跡(Ⅲ)—旧石器時代の調査—』兵庫県教育委員会。
- 山本正敏 1977 『城端町西原C遺跡』『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第5次緊急発掘調査概要』、16—20頁、富山県教育委員会。
- 吉牟田浩一・山田洋一郎編 2002 『下屋敷遺跡 東九州自動車道(西都～清武間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ』宮崎県埋蔵文化財センター。
- 依田賢二ほか 1996 『四葉地区遺跡 平成8年度(旧石器時代編)』板橋区四葉地区遺跡調査会。
- 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 1996 『早稲田大学安部球場跡地埋蔵文化財調査報告書 下戸塚遺跡の調査』早稲田大学。
- 早稲田大学文化財整理室編 2000 『下柳沢遺跡』早稲田大学。
- 綿貫俊一編 1999 『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書 一方平Ⅰ遺跡』大分県教育委員会。
- 綿貫俊一・坂本嘉弘編 1989 『五馬大坪遺跡 大分県日田郡天瀬町五馬所在遺跡の発掘調査報告書』天瀬町教育委員会。

古本州島における後期旧石器時代前半期／後半期移行期の構造変動研究
—国府系石器群・角錐状石器の広域展開と地域間変異の解明を通じて—

2009年3月 発行

著者・発行者 森先一貴
